

會津史

卷九

110  
29

館書圖京東				
二		一		
九		〇		
冊	號	架	函	類

新雨 關海忠武園  
相城 池内儀八著

# 寶津史

第九卷

明治三十年六月出版

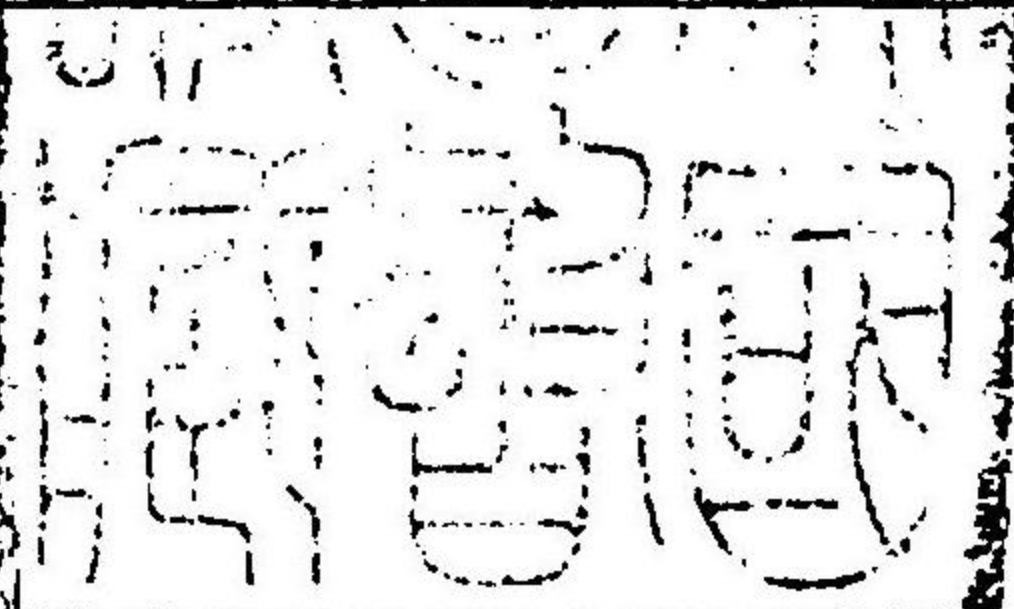
會津史目次

卷九

第八編 保科氏後松平氏

第七章上 容保公の籠城

- (一) 西軍の會津侵入兼
- (二) 幕成口の戦
- (三) 猪苗代城の火
- (四) 十六橋の要害
- (五) 戸の口原の戦
- (六) 白虎隊の義烈
- (七) 容保公の出陣
- (八) 蘆養町の戦
- (九) 追手門の戦
- (十) 天神橋の戦
- (十一) 市街の夜戦



會津史 卷九 地内天城版

(十二)	一番砲兵隊の歸城
(十三)	城下の混雜
(十四)	一藩の節烈
(十五)	國境守兵の歸城
(十六)	穢多町の戰
(十七)	小田山の要害
(十八)	長命寺の戰
(十九)	木曾口の戰
(二十)	西軍の聯絡
(廿一)	大内并關山の戰
(廿二)	飯寺川原の戰
(廿三)	援を米藩に促す
(廿四)	城下の火
(廿五)	熊倉の戰
(廿六)	諏訪の戰

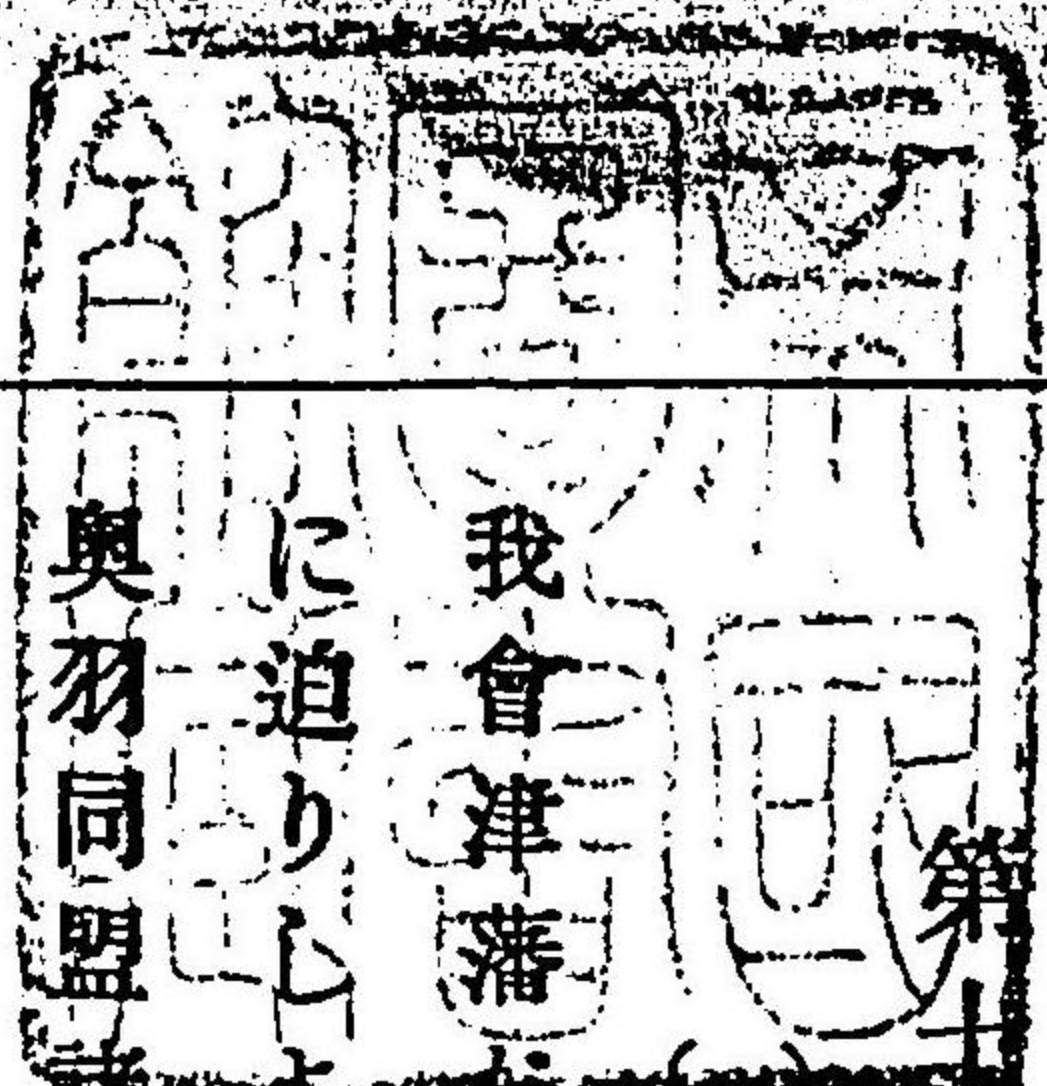
會津史卷九目次終

會津史 卷九

耕雨 關場忠武 閱  
相城 池内儀八 著

第十章 上容保公の籠城

西軍の會津侵入策



我會津藩が謝罪恭順の哀願天聽に達せずして、西軍諸藩の四方に迫りしより、茲に數閱月、我一藩全力を盡して之を封境に拒ぎ、奥羽同盟諸藩をして兵威を鼓舞して西軍に當らしむ、是より先き、西軍總督府の參謀大村益次郎東征の戰畧として、仙米等の會津を援けんとする、枝葉の諸藩を斷て、而して後根本なる會津を孤立せしむるの策を執れり、然るに今や、磐城仙道の小藩は西軍の勢に避易して、皆挫けざるなしと雖とも、未だ奥羽同盟軍をし

西軍總督府參謀大村益次郎の討會策

東軍戰を遷延して風雪の候とす

て懼れしむるに足るなく、東軍の猶白河、須賀川、二本松、棚倉等の各地に出没して襲撃するあり、而して西軍の是より最も強力なる仙米諸藩と戦ひ、同盟軍を撃破掃蕩せんとするには、尙數月を期せざるべからざるに、時已に秋冷の候、尙進んで奥羽の中心に深入するの比は、則ち嚴寒漸く逼り、積雪路を埋め、朔風凜烈、鐵骨を衝き、六花繽紛、戎衣を撲たんとす、此時こそ寒地に生れ、風雪に慣れたる東北人の、輕捷驍健、東西に馳驅し、縦横に突進するの時に、征旅に疲れたる炎地の西軍、先づ此天候と戦ふ、恐らくは人馬共に復進むべからざらん、如此にして曠日久しきに亘らば、十方の西軍、徒に奔命に疲れ、兵倦み、士氣萎靡して用ふべからざるに至らん、是に於て、我藩は仙道の各藩敗れたりと雖も、猶國境の備を嚴にして戦を遷延し、將に酷寒の至らんとするを待て、大になす所あらんと欲す、

白河口西軍參謀板垣の討會策

土軍の將板垣退助之を慮り、薩軍の將伊地知正治に説て曰く、會津は根本なり、仙米諸藩は枝葉なり、今枝葉を斷つも根本存すれば益なし、加かず根本を衝かんには、根本にして傾かば枝葉は自ら亡びんのみ、況んや向寒の期節を前に控へ、徒に枝葉のために醒醒して、歳月を費し、竟に風雪の襲ふ所となるに於ては、我兵勇と雖も必ず進撃を妨げられざるを得ず、而して卒に來春を期するに至りては、其間敵の戦機を熟さしめ、根本を固めしむるのみならず、一旦不慮の變起らば、勢亦將に測るべからざるものあらんとす、故に今日の策は、宜しく渠が備堅からざる一方に、我兵力を集め、激戦以て之を衝き、渠が守る所多くして中堅の虚なるに乗じ、奮進猛突、以て其根本を覆すに若くはなし、假令我軍力足らずして會津城を抜くと能はざるも、其城外を火き、其地方を蹂躪し、兵を勢至堂に退けば、則ち四方を守る所の敵之を聞て先づ

其○膽○を○寒○く○し○則○ち○其○勢○を○挫○折○せ○し○む○る○に○至○ら○ん○且○北○越○の○我○軍○  
勢○漸○く○猛○烈○敵○は○精○銳○を○悉○し○て○之○を○防○ぐ○と○聞○く○猛○進○會○津○を○伐○つ○  
は○豈○之○れ○千○載○一○時○の○好○機○會○に○あ○ら○ざ○ら○ん○や○と○議○遂○に○會○津○を○衝○  
く○に○決○せ○り○

(二) 暮成口の戦

此時に當り、白河以北の仙道各方面の戦急にして、西軍動もすれば、直ちに會津に進入せんとするが如く、而して南日光方面は毎に西軍を撃退して、戦危急ならざるを以て、會津藩は其南口派遣の兵をして轉じて、白河、二本松口等を守備せしむ、抑仙道方面より會津に入るに數路あり、一は白川より長沼、勢至堂、三代、福良、原、赤井等を過ぎて若松に達す、其行程十八里、一は須賀川より中地を経て三代に合す、其若松に至るまで行程十五里、一は郡山、或は本宮、或は二本松より熱海、中山を経て、猪苗代湖の北岸に回

東軍南方  
面より仙  
道の諸道  
に轉ず

會津諸道  
の防備

伊知地板  
垣の兩將  
雅隱の方  
面を異に  
す

り、猪苗代、戸の口を過て若松に達す、其行程十五里、一は郡山、本宮、二本松より猪苗代、湖南岸に回り、御靈櫃、濱路、舟津を経て、若松に達す、其行程十六里、一は二本松より石筵、暮成峠の間道を過ぎ、猪苗代に至り、若松に達す、其行程十五里、一は桶島より土湯を経て猪苗代に出づ、其行程二十里、其中白河に至る勢至堂口は、江戸に至る本道にして、東軍防禦甚だ嚴也、次で二本松に至る中山口は、相馬仙臺に至る本道にして、守備亦忽にせず、是に於て、西軍の將板垣は、陽に中山、土湯、暮成の三口進撃を唱て、虚勢を示し、密に轉じて、御靈櫃を衝き、進て中地、三代に出で、勢至堂の東軍前後を顧みて、自ら潰走するを俟て、若松に長驅せんと欲し、伊知地は、暮成口進撃を主張し、爲めに兩道より進まんよとに決せしが、長將桃村發藏、其力岐れて成功し難からんとを憂ひ、板垣に勸めて、遂に暮成の一道に定めしと云ふ、之れ西軍の軍畧として、最も良計なる

西軍諸藩の援兵與羽に入る  
西軍暮成口より會津に進む

ものと謂はざるべからず如何となれば當時御靈櫃には我砲兵隊中地には傳習隊等ありて皆伏見總野等の戦に勇名ある所の強兵にして之等の地は勢至堂三代等の東軍に呼應するを得るの要地なり而るに石筵口に至ては奮闘の勇なき舊幕の歩兵及び農兵多くして且此地は山間の間道にして若松の本城に甚だ遠く其守兵も多からざるを以てなり時に西軍諸藩の後援白河に至れるを以て急使を派して其兵を本宮及二本松に集まらしむ則ち薩長土垣及び大村五藩總軍凡そ三千人時に八月十九日なり明くれば二十日薩長土垣の西軍は二本松より暮成峠に迫り薩長の別隊及び大村の兵は本宮より中山峠に進み來る時に暮成口を防ぐ所の我兵は猪苗代田中隊及び暮兵數百人なり田中隊は先きに二本松藩に應援して西軍を防ぎしも二本松敗れてより退きて此地を固め而して其兵數甚だ寡少なるを以て南

山入村の戦

日光口の暮兵轉して來り之を援けしなり已にして西軍玉の井村に至り兵を三面に分つて迫り來ると聞き我軍山入村に進み叢林に據り撃つて之を斥く土軍乃ち溝中を潛行して我背後に出て吶喊して襲ひ來る我兵相顧み短兵相接し突撃搏戦最も力む西軍避易遂に玉の井の本營に退き我軍亦退きて暮成の砲壘に據る

暮成の激戦

廿一日西軍進んで石筵に至る是より山道にして懸崖屹立路極めて險なり之れ即ち暮成峠にして坂路三に分れ左方猿岩口最も峻峭なり我兵壘を築くと三以て其三道を守る已にして西軍は本隊を中央となし左右翼を縦ちて戦を挑む我兵壘に據り高崖に伏し眼下に西軍を亂射し砲聲山壑に震ふ西軍苦戦突貫せんとするも絶壁深谷に支へられて一步も進む能はず須臾にして大霧全嶽を蔽ひ咫尺を辨せず唯砲聲を聞て敵の所在を知る

石籠村民  
西軍を導く

東軍諸村  
を焼て暮  
成を退く

猪苗代の

のみ、西軍の本隊機に乗して我中央を猛撃す、猿岩口の東軍は此方面の敵の射撃漸く衰へ兵氣萎靡せるを知り、險を恃みて深く力を用ゐるに足らずとなし、本道の東軍を援け、此壘を守るもの甚た少し、西軍之を探知し、且つ石籠の人民曩に我募兵の爲めに村落を焼かるゝを仇とするを以て、其村民を諭し、二人の獵師を以て嚮導となさしめ、土の精兵數十人之に繼ぎ、暗啞樹を攀ぢ岩を涉り、竟に雉子ヶ澤の窮谷を越て、我砲壘の中間に出で、不意に猿岩の砲臺を側射し、其正面の西軍亦一齊之に迫る、之を以て守兵壘を棄て、退く、他の砲壘隨て潰え、行々路傍の民舎を焼き、猪苗代に退く、西軍乃ち進て我陣營を焼き、暮成峠の關門を破りて壘中に入り、此夜此地に露營せり、

(三) 猪苗代城の火

廿二日、暮成の敗兵、猪苗代に集り、此地に西軍を邀撃せんと、援を

要地

城代高橋  
城に火を  
放ちて退く

東方面の  
各守備隊  
守を徹し  
て戸の口  
に向ふ

若松城に乞ひ、守備を修む、此日拂曉西軍暮成を發し、勇進猪苗代を衝く、猪苗代は北米澤、東二本松及本宮に通する要衝に當り、會津の所領三万石の大邑にして、若松城を距る五里餘なり、時に猪苗代の城代高橋權太夫、衆寡敵せざるを慮り、自ら城を火き、見稱山に到りて土津の神靈を奉じ、若松に退く、中山口を守れる、我兵は、揚技峠の險及び間道沼上峠の險を扼せしが、猪苗代の火光を顧み、腹背敵を受けたるを知り、守を徹して若松に退く、是に於て本宮より迫れる中山口の西軍は、進んで猪苗代の西軍と合するを得たり、

此時御靈櫃を守れる者は一番砲兵隊にして、會將小原宇右衛門之を率ふ、初め一番砲兵隊は隊長林權助に屬して伏見に戦ひ、後宇都宮今市に戦ひ、又轉じて白河に奮戦し、其附近に駐軍せしが、仙道各藩西軍の破る所となるを以て、再轉じて御靈櫃を守備し、



嶺上壘を築き銳砲を備へ、以て敵の進軍をまちたるなり、其廿二日に至り遂に猪苗代方面に當り烟燄天を焦すを見、暮成口の敗れたるを知り、其西軍を中途に遮らんと欲し、守を徹して湖の南岸を馳せて戸の口に赴く、中地口を固めたる會將海老名郡治、宗川茂友等、亦猪苗代の火光を望み、敵を戸の口に支へんと、湖の南岸を進む、而して土湯口、勢至堂口、其他の守備隊皆暮成の敗報に驚き、歸路を絶たれんとを恐れ、守を徹し馳せて猪苗代を回復せんとす、

(四) 十六橋の要害

西軍の將河村與十郎猪苗代より突進す

西軍の將河村與十郎、純義猪苗代に入るや、直に一隊を率ゐて猪苗代湖の北岸を突進して、戸の口なる十六橋の險要を占領せり、戸の口は若松を距る三里、湖水の注て河をなす所にして、架するに堅牢なる十六節の石橋を以てす、河を日橋川と云ひ、激流奔湍

險要

東軍十六橋を破壊せん

河村十六橋を占領す

石筵口の敗報若松上下を驚かす

日向内記等白虎隊を率て戸の口に戦ふ

水勢甚だ強し、其要害なること宛然、京師に於ける勢多の如し、是より先き、東軍猪苗代の敗るゝや、走りて十六橋の橋礎を破壊し、一步も是より越ゆる能はざらむんと欲し、將に盡く之を撤せんとするに當り、西軍河村隊の龍怒虎吼の勢を以て、突進奮撃するに遇ひ、遂に撤橋を果さずして退きたり、

(五) 戸の口原の戦

廿二日石筵口敗報若松に達す、時に若松城壯者は出で、四境にあり、残る所のものは多く、老幼婦女子のみにして、固より籠城の準備もなし、是に於て、上下大に驚き、先づ之を中途に防かざるべからずとなし、急使を馳せて仙道各方面の守備兵をして、晝夜兼行、直ちに戸の口に轉して西軍に當らしめ、而して國民の壯丁を招募し、隊伍を編制して之に赴かしめ、日向内記、原克吉は城中を守れる、士中二番白虎隊を率ゐ、小池繁次郎、游軍隊を率ゐて十六

小池繁次郎等遊軍隊を以て西軍に當る

桑名隊大寺口を守る

戸の口原の激戦

橋方面に西軍を逆撃せしむ、而して桑名隊をして猪苗代口の別路大寺口を防かしむ、乃ち桑名隊は日橋を絶ち險に據て敵をまつ日橋は湖口の下流に架するものにして若松を距る二里其要害なるを恰も京師に於ける宇治の如し、白虎隊は一隊三十七人、勇氣勃勃大雨を犯して奮進す、已にして十六橋方面の諸隊戸の口原に至り、地形を按じ、敢死隊は中軍に、白虎隊は左翼に、遊軍隊は右翼に列し、胸壁を築きて西軍を防ぐ、西軍亦守備兵を猪苗代に置き、河村の一隊をして敵の獲る所とならしむるなかれど、各隊繼ぎ至り、橋を渡りて戸の口原の東軍を突撃す、兩軍の砲銃並ひ發し、轟々として磐嶽を震動し、硝烟冥濛として戸の口原頭を覆ふ、白虎隊年少なりと雖も、氣皆剛壯、死を決して奮戦す、時に西軍の一隊湖を渡りて笹山に上陸し、我右側を襲ふ、我軍屈せず亦之と戦ひ、河なす碧血を踏み、山なす伏屍を越え、會城の存亡此

一戦に關すと、拒戦大に勗む、其兩軍の劍光閃々として、猪湖の白波に映じ、喊聲轟々として、日橋の奔流に和す、

已にして日暮れたりと雖も、朝來の大雨は未だ止まず、滿天墨を流したる暗黒場裡、猶戰を收めず、血戰激闘、鼓角劍戟の音、森々たる萬籟と共に響く、已にして我兵彈盡き、皆劒を抜て敵と戦ふ、西軍は後援益至り、勢頗る強盛、砲銃を亂發する驟雨の如し、我遊軍隊長小池繁次郎、全組頭安藤物集、馬敢死隊組頭小原信之助、正奇隊小隊頭牧原次郎、猪苗代隊村松常磐二百石、鈴木文次郎二百石、討死し、其他我兵の死傷するもの相踵き、死屍丘を成す、抑戸の口原は十六橋を越えて、強清水村に至る、方一里の原野にして、西大野原、南赤井谷地に連る、而して、我は固より寡兵なるに、已に十六橋の要害を敵に委し、茫々たる原野の戦闘、其勝算なき知るべきなり、夜半に及び我兵遂に衆寡敵せざるを悟り、一は本道強清水

強清水の戦

に退き、一は赤井谷地に移り、以て西軍の進み逼るを俟ちて之を夾撃せんとす。西軍果して破竹の勢を以て來り迫り、猛撃先つ強清水の軍を破りて進む。郡奉行牧原奇平、横山健三郎等戦死し、日向内記、纒に免れて若松に還る。

(六) 白虎隊の義烈

白虎隊の苦戦

是に於て、赤井谷地の軍は多く白虎隊の殘餘なりしが、腹背敵をうけ、且戦ひ且退き、赤井新田に至り、夜暗くして隊長原等と相失す。原は七人と共に路を失ひて榛荆に陥り、數日にして漸く羽黒山顛に出て、東山村に下り、始めて若松に達せり。殘る所の白虎隊は十有六人、皆白面の青年、丹心赤誠、一死以て君國に報ずるを期し、難戦苦闘、創を裹むに暇なく、滿身鮮血、淋漓、銃を肩にし、刀を杖き、一團となりて、黑夜山谷を跋渉し、城に入らんと欲す。時に衆皆飢ゑ且つ疲る、曰く、事此に至る寧ろ自殺して臣節を全ふすべき

白虎隊の決心

白虎隊飯盛山に登る

のみと、某日假令事既に此に至るも、銃未だ裂けず、刀未だ折れず、城陥り公の殉するを見て、而て後從容義を取り、生を捨つるも亦未だ晩からずと、衆其言に従ふ。然るに一人の捷路を辨ずる者なく、峻崖を攀ぢ、間關して天明僅に不動瀑畔の山徑に達し、漸くにして瀧澤山麓なる新堀に至る。新堀は戸の口より通ぜる三里餘の疏水にして、飯盛山腹數十里間の洞道を通して、若松地方田圃の灌漑となるものなり。此時已に西軍の先鋒は城下に迫り、後隊は猶瀧澤坂上にありしが、之を見るや、銃丸を注きて之を亂射する甚た急なり。白虎隊乃ち溝中を潜行し、飯盛山の洞中を過ぎて其山上に登り、西方府城を瞰視すれば、今や敵兵市街に接戦し、城郭に迫り、數千の家屋皆火ならざるなく、烟焰天に漲り、雲を凌ぐの五重の天守閣も僅に黯雲滅没の中にあり。敵銃の響き、劍戟の音、吶喊の聲、天に轟き、地に震ふ。衆相顧みて曰く、今や城將に陥ら

白虎隊の  
自刃

ん。ど。す。主。辱。め。ら。る。れ。ば。臣。死。す。と。聞。く。一。死。以。て。君。國。に。殉。ず。此。辰。に。あ。り。と。乃。ち。跪。て。城。を。拜。し。十。有。六。人。環。座。し。從。容。と。し。て。自。刃。す。實。に。八。月。廿。三。日。な。り。白。虎。隊。自。刃。者。の。姓。名。左。の。如。し。

- |        |       |     |
|--------|-------|-----|
| 兵庫三男   | 森田備三郎 | 年十七 |
| 久之助長男  | 西川勝太郎 | 年十六 |
| 隼長男    | 津川喜代美 | 年十七 |
| 小野雄之助弟 | 安達藤三郎 | 年十七 |
| 卯之助弟   | 野村駒四郎 | 年十七 |
| 軍藏弟    | 梁瀬勝三郎 | 年十七 |
| 克吉弟    | 梁瀬武治  | 年十七 |
| 守之進長男  | 井深茂太郎 | 年十六 |
| 衛士弟    | 有賀綱之助 | 年十六 |
| 岩五郎弟   | 間瀬源七郎 | 年十七 |
| 亘二男    | 伊東俊彦  | 年十七 |
| 忠藏長男   | 林八十治  | 年十六 |
| 丈之助長男  | 永瀬雄治  | 年十六 |

- |      |      |          |
|------|------|----------|
| 立甫二男 | 鈴木源吉 | 年十七      |
| 龍立二男 | 石田和助 | 年十六      |
| 時衛長男 | 飯沼貞吉 | 年十六 (蘇生) |

此他同隊池上新太郎(與兵衛長 男年十六)、伊東禎次郎(左太夫三 男年十七)、石山寅之助(彌左衛門長 男年十七)、竹岡捨藏(津田三三 男年十七)等も、亦同山に自刃す、而して各地に戦死せる白虎隊士も亦多かりき、

白虎隊自刃せし後數日、藩士印出八次郎の母山口氏、其子の戦に出、還らざる久しきを以て、戦死せしならんと、其遺骸を搜索して飯盛山に至る、至れば自刃者の死屍枕藉、碧血地に溢るゝを見、我兒も亦此中にあらんと、其屍を檢して得ず、時に一少年氣息奄々として猶未だ殊せざるあり、就て之を熟視すれば其相貌容姿我兒に似たり、乃ち之を負ふて歸り、保持護養、遂に病院に入れ、其疵癒ゆるを得たり、之れ即ち飯沼貞吉なり、(白虎隊十有六人一團は、なりて自刃せし)

實見せし山口氏に問く所なり

(七) 容保公の出陣

猪苗代の敗報若松上下を沸騰せしむ

是より先き、猪苗代敗れ戸の口原に戦端を開くや、礮聲若松市に轟くと終夜絶えず、城中は援兵派遣、糧糧送付、死傷者の始末等に上下奔走し、恰も鼎の沸くが如く、市内は各町天明に至る迄篝火を燒きて勢威を示す、然れども每家皆早晚西軍の侵入を慮り、珍寶器財を井に投するあり、地中に埋むるあり、土藏に收めて窓戸を密閉するあり、荷擔の用意するあり、其混雜名狀すべからず、是より先き暮成の敗るゝや、西軍の斥候は石筵の村民を嚮導となし、皆身を行商又は農夫に變装し、若松に來りて潜伏し、軍事を偵察せしと云ふ、

容保公城を出て、瀧澤に西軍を拒く

廿三日、天明、容保公には兵を率ゐて自ら城を出て、瀧澤峠より來れる西軍を防かんとて、弟桑名藩主松平定敬と共に馬に鞭ちて

瀧澤坂上の戦

瀧澤村に陣し、勝敗を決せんとす、西軍は勢に乗じて進撃し、瀧澤峠に至り砲銃を劇射すると雨の如く霰の如し、而して我兵は創を覆ふに違あらず、皆流血淋漓刀を杖きて峻坂を退き來れり、佐川官兵衛、桑藩の岡本武雄等、各其主に従ひ在りしが、敗兵紛々として還れるを見、勵聲叱咤、會城の勝敗は此地にありと、劍を揮ふて進みければ、我兵乃ち奮戦し、彼は坂上より我は麓より砲撃して、兩軍相持する數刻、我砲兵頭上田新八郎戦死す、已にして西軍の援兵益加はり、其一軍をして別路より城の虚を衝かしむ、是に於て、我軍停り戦ふ能はず、城中に退く、容保公亦止むを得ず、瀧澤村を引揚げて城中に至らんとし、途上定敬を顧みて曰く、我は城陷るの曉には潔く戈を枕にして社稷に死なん、卿は早く會津を去て、同盟諸藩と共に、今後の謀をなせと、定敬涙を揮て曰く、京都以來安危を共にせんと欲せり、今如何ぞ離るゝに忍びんや、願く

西軍道を分つて進む

容保公弟定敬公を以て米澤に援を乞はしむ

は國難に死を同くせしめよと。我公聽かず、定敬曰く、然らば我は是より米藩に赴き、援兵を乞ふて夾撃の計を爲さん、卿幸に籠城の謀をなせと、別を告げて米澤に向ふ、

此時まで舊老中小笠原長行は若松市外大龍寺に、長岡藩主牧野忠訓は建福寺に、舊老中板倉勝靜は郭内興徳寺に、桑名藩主松平定敬は淨光寺に、棚倉藩士阿部正靜は願成寺に駐在して、日々城中に登り作戦の經劃をなせしが、是に於て皆仙臺米澤等に走れり、

(八) 蠶養町口の戦

此日、西軍は瀧澤坂上に於て一隊を分ちて右翼とし、舟石の間道を下りて直ちに瀧澤村の北より城下に至らしめ、而して瀧澤坂下に於て亦全軍を二隊に分ち、一は左翼となし飯盛山下より瀧澤村の南に出で、直ちに城の東南に迫らしめ、一は本隊にして本

西軍三道より若松市街に入る

桑名隊戸の口敗れたりと聞き守を徹して若松に入る

桑名隊蠶養町に西軍の輜重を衝く、桑名隊蠶養社に據る、西軍法華寺に據る

道を直ちに東軍を亂撃しつゝ瀧澤村より城下に迫り、城の北面なる追手口に向はしめたり、已にして左翼は郊外に回りて城の東面(右側)に迫り、本隊は市街に長驅して北面大手口に向へり、此時大寺口を固めたる桑名隊は、西軍戸の口を破れりと聞き、退きて城外を守備せんと、守を徹して市の東北端蠶養町に入る、蠶養町は瀧澤町の傍にあり、時に輜重の人馬絡繹たり、之を熟視すれば西軍の輜重なり、乃ち一隊に令して之を襲ひ、其糧食を奪ふ、輸卒軍夫大に驚き、走て前隊に告ぐ、前隊の兵俄に馳せて之を救ひ、蠶養町の西方法華寺の墓所に據る、桑名隊亦全町の東方、蠶養國神社の叢林に據り、或は銃戰、或は接戦す、桑名藩士某勇敢剛猛、刀を揮ふて挺身し、敵兵二十餘人を斬り向ふ所前なし、萬衆目を注ぎて之を狙撃す、一丸飛んで其胸を傷く、然れども皆一十に當るの烈戰中にして、負傷を助く

桑名隊仙臺より庄内に至る

るものなければ、自ら創を包み、刀を杖き、僅に戦線外に出で、竟に路傍に斃る。已にして西軍の援兵加はり、桑名隊半ば死傷し、終に衆寡敵すべからざるを知り、喜多方方面に引上げ、藩主の米澤を経て仙臺に至ると聞き、追ふて間道より福島に出で、仙臺に入り、轉じて庄内の軍に投ぜり、此時に當り舊幕兵及び諸藩の兵多く仙臺庄内に走れり、

(九) 大手門の戦

會將嵯川薩將中村と接戦す

此時、薩將中村半次郎(桐野利秋)、土將笠原謙吉、各一隊を率ゐて、城より十餘町隔りたる外郭の大手門を突貫す。我將嵯川友次郎、田原助左衛門等門を開き、出て、殊死奮闘衆を勵まして進み、大に呼て曰、薩長は國家を擾亂する、不義の暴徒なり、我之を鑿にして蒼生を救はん、と、敵を斃すと無數、西軍少く逡巡す、中村大に怒り、劍を揮て進み、嵯川友次郎と相闘ふ、兩雄奮撃、雲湧き、風生じ、龍吼

會將佐瀨井深馬場等奮闘す

西軍追手門を突進す

城中巨砲を放て西軍を斥く

東西兩軍の戦死者

へ虎嘯くの状あり、兩軍亂戦、彈丸雨の如く、劍光電の如し、我幼少組中隊長佐瀨清五郎、大砲隊長井深數馬、游撃隊組頭(四百石)馬場清兵衛、軍事奉行黒河内式部の諸將、亦僵屍を越えて進む、偶日向内記白虎隊の一隊を率ゐて來り援け、勢大に震ふ、中村竟に支へずして退く、已にして西軍の援兵踵ぎ來り、勢を回復して、猛進大手門を破り、一直線に大手通りを突貫し、將に城に迫らんとす、我城兵之を見るや、大手口の城壁を壞りて、其間に備へたる巨砲を西軍に發射す、西軍此不意の一發に斃れたる者、其幾十人なるを知らず、爲めに逡巡進む能はず、我軍機に乗して進撃、竟に之を卻く、此戦我隊長佐瀨清五郎、日向左衛門、津吉啓治、田原助左衛門、井深數馬、馬場清兵衛、黒河内式部、原新五左衛門、堀昌三郎、多賀谷勝左衛門、黒河内與次右衛門、野村甚兵衛、嵯川友次郎、三宅彌七等奮闘之に死す、西軍は軍監土藩牧野群馬、其弟笠原謙吉、軍事奉行垣

藩戸田五郎左衛門等の諸將之に死す、實に八月廿三日なり、

(十) 天神橋の戦

廿三日、西軍若松城に迫るや、土將板垣退助は別隊を率ゐて、城の東面より湯川の上流を渡り、南方搦手より進撃す。湯川は城外一町餘をはなれて流れ、自ら搦手の外湟をなせり、橋あり天神橋と云ふ、西軍則ち橋を渡りて城に迫り、勢甚だ鋭し、遂に三の丸に進入す、我將和田傳藏、小室金五左衛門等、進撃隊を率ゐ、小松忠之進、玄武隊を率ゐ、死を決して之と奮戦し、三の丸より郭外に斥け、進んで天神橋に戦ふ、進撃隊入江惣助、安藤市藏等、挺身槍を揮ひ、叫て曰く、薩長は天下の賊なり、吾輩天に代て之を誅すと、縦横憤闘、皆一を以て十に當り、數十人を殲す、西軍即ち其急に城を抜く能はざるを知り、遠く退却し、要地に據りて砲撃を試みるのみ、我兵亦退きて城に入る、此戦に我士の死するもの大畧左の如し、

西軍搦手より進撃す

進撃隊の奮戦

會將入江安藤等の憤闘

會兵の死傷者

進撃隊組頭	入江庄兵衛	砲兵隊	大戸新八郎
遊撃隊	大和田龜太郎	進撃隊	池澤定治
進撃隊小室隊	太田喜一	入江惣助隊	小沼富藏
進撃隊小室隊	板橋丑藏	進撃隊長	和田傳藏
進撃隊小室隊	仁科勇八	卒	丹羽富藏
卒	川井留五郎	小室隊	戸田數馬
全	津村乘之助	全	角田覺四郎
草風隊差圖役	藤谷又八	小室隊	山寺伴助
全	山田伴助	全	八島清三郎
全	柳下恒吉	卒	山田兵馬
全	武 小松忠之進	全	小池傳五郎
朱雀寄合	相澤勇吉	進撃隊	赤塚彦三郎
全	天野由之助	全	齋藤右近
全	佐藤佛藏	全	酒井康吾
卒	佐藤治左衛門	小室隊	平向俊吾
全	青山八郎	全	鈴木延次郎



西軍將に  
退陣せん  
とす

城兵夜市  
街の西軍  
を襲ふ

西軍狼狽  
濧澤に退  
く

(十一) 市街の夜戦

是より先き、西軍の將に城を攻めんとするや、板垣退助、伊地知正治に謂て曰ふ、我軍地理に熟せず、午後三時に至りても猶城を陥る能はずんば、即ち士邸に放火し、退陣の計畫をなさざるべからずと、伊地知地之を善とし、奮戦して日暮に及び、城堅くして抜く能はず、伊地知令して退陣せんとす、板垣急に之を止めて曰く、時已に遅し、日暮に及びては一兵も動かすべからずと、終夜砲撃天明を俟たんとす、我軍西軍の地理に暗きを知り、二十三日の黑夜に乗じて、城の各門を突出し、驀然西軍の諸隊を市街に襲ふ、西軍其不意に驚き、皆止り戦はんとするものなく、黄河の一時に決するが如く、紛々として瀧澤方面に向て走る、而して夜暗くして逃路を失し、右に往き左に走り、多く我兵の殪す所となれり、板垣乃ち部下の諸隊を呼び、叱咤自ら刀を抜き、大喝して曰く、退かんものは斬らんと、敗兵を麾して進む、隊長宮崎合助、飛丸に中りて仆る、漸くにして諸隊踵き至ると雖も、意氣沮喪して銃を放つ能はず、我兵勝に乗じ砲銃を亂射すると益激烈なり、西軍の砲兵分隊長小島慥助亦丸に中りて死す、而して東軍放つ所の火は、焰々として忽ち全市街に漫延し、其爆烈の聲、砲銃の響に和して、百雷の如く、火焰天を焦して一團の火海の如し、其爆聲、其火光、十餘里に及ぶ、時に板垣更に使を伊地知に遣はして曰く、事已に此に至る、竟に他策なし、唯砲陣を作りて夜を徹するに在るのみと、我兵亦長驅伏に遇ふの恐れありと、乃ち全軍徐々城中に入る、

(十二) 一番砲兵隊の歸城

是より先き、猪苗代城の陥るや、御靈櫃を守れる一番砲兵隊は、戸の口に馳せて西軍を支へんと欲し、廿三日、原、赤井等の諸村に至れば、兵火焰々として全村に及び、西軍已に戸の口を破りて若松

一番砲兵  
隊背炎よ  
り若松に  
入る

天寧寺町口の戦

隊長小原敵中ヲ突貫す

小原兄弟の戦死

城下に侵入せり、是に於て、背炙峠の間道を経て、東山街道に下り、直ちに天寧寺町口より城に入らんと欲し、隊伍肅々市街に入る、此時西軍、已に城の東方なる天寧寺町口の外郭を占領し、其壘壁内に潜據し、我兵の近きに来るを俟ち、一齊に劇射すること風雨の如し、其間實に數十間、我兵の斃るゝもの算なし、其先隊は疾驅壘壁の下に身を潜むるも、後隊の苦戦甚し、是に於て、隊長小原、宇右衛門大に怒り、兵を叱咤して、郭門を突貫せしむ、木村某乃ち壘壁を越え、敵中に進入して、郭門を開き、以て我隊を呼ぶ、宇右衛門刀を揮ひ、率先して門内に入り、郭内一の町に出で、敵中を猛進す、西軍左右に披靡して、道を避け、士郎に潜んで狙撃し、其飛丸骸の如し、宇右衛門將に城に入らんとして、忽ち丸に中りて仆る、其弟魁、身軀壯大、容貌魁偉、武勇全隊に秀つ、時に家兄の負傷せるを見、之を救はんと欲し、彈丸雨下の中を馳せ、將に傍に近かんとし

て、又敵の狙撃に遇ひ、銃丸胸に中りて死す、隊長の從士大塚六四郎、宇右衛門を介錯し、首を携へて、僅かに城に入るを得、此時城壘に上りて、後方を顧みれば、數町の間、我士の屍軀二十七、碧血淋漓、どしどし枕藉するを見る、而して身を全ふして城に入るを得るもの全隊の半ばにも足らざりき、蓋し此隊は歸城兵中の最も早きものなり、

(十三) 城下の混雜

廿二日の夜、戸の口原の礮聲轟々として、城下に響き、市民は荷擔難を避くるの準備をなし、通宵一睡せず、而して西軍如何に勇敢なりとも、若松に入るには猶一兩日の時日を費さざるべからずと想ひ、徐ろに荷物を市外に運ばんとせり、然るに廿三日の天漸く白なるや、瀧澤坂上敵俄に迫り、兩軍の劍光砲火、已に頭上に閃くが如し、瀧澤峠は市外僅に十數町、我兵皆血に塗れ、刀を杖き絡

市民一時に西方に遁る

西軍侵入の急劇

釋として退き來り、道路の雜踏又甚し。此時西軍電馳風擊、一瞬間にして若松を衝き、市街に亂射す。是に於て、市民大に愕き、朝餐を喫するの暇なく、多く食膳を並べたるまゝ、老を扶け子を携へ、西方の山野に遁る、而して數萬の市民、一時に七日町口、柳原町口及び材木町口に出で、先を争ひたるを以て、肩摩毆擊混雜甚しく、殊に川原町橋、材木町口、烏橋、原柳町口、柳橋、七日町口の如きは、人を以て山を築き、仆るゝもの又起つ能はずして死傷するもの無數、婦女童幼の悲泣叫喊、雲霄を衝き、路傍には財貨を棄て、顧みざるあり、珍器寶物の狼藉たるあり、日用器具の泥濘に塗れたるあり、而して市民の敵丸に中り、街路に絶息せるもの、呻吟せるもの、甚た多く、之を救ふて少しく逃げ後れたるものは、或は狙撃に遇ひ、或は流丸の犯す所となりて、殞れ死するもの相踵ぐ、此急劇の際に於て、父母兄弟相失し、一家各地に離散し、死生を知らざるに

市民の死傷

鶴沼河の溺死

至るもの多かりき、殊に幼童釋女の家族と相失し、彈丸雨飛の中に傍徨して父を呼ぶあり、母を戀ふあり、幼き同胞の助け相携へて何處ともなく走るあり、而して病者を擔ふあれば盲人を負ふあり、聾者の狼狽するあれば跛者の這ふあり、其雜沓名狀すべからず、

市外の西半里に大河あり、鶴沼川と云ふ一名大川、河幅廣く水勢急にして橋を架すべからず、常に舟を以て往來す、時に暴雨篠を束ねて下すが如く、濁流漲り流れ、水勢常に倍す、河岸多くの小舟あり、而して市内を遁れて此河岸に集れる幾千の老幼婦女、皆争ふて小舟に乗り、中流に至りて人多く舟重くして、顛覆するもの幾回、其溺るるもの手を上げ頭を浮べて悲泣哀を乞ふも、水勢急に舟は人を滿載して之を救ふ能はず、岸邊に蜎集するもの之を見るも亦小舟の動かざるまでに争ひ乗り、猶乗る能はざるもの

は乃ち衣を脱し、徒渉して前岸に達せんと欲し、而して亦溺るゝもの幾百人なるを知らず、此時後方を願望すれば、城下は已に戰闌にして、猛火四方に移り、烟焰簇々空を蔽ひ、砲聲轟々雷の如し、其西軍の侵入如河に急激なりしかを知るべし、

(十四) 一藩の節烈 (廿三日の一家殉難)

西軍の石筵を抜き、猪苗代を衝き、戸の口瀧澤等の我兵を撃破して、城下に闖入せんとするや、飛騎難を報ずること頻なり、國老田中土佐(二千石)、神保内藏之助(千二百石)、其急を聞て城を出て、敗兵を叱咤し、留り戦はしむ、西軍の勢大河の一時に決するが如く、留り戦ふもの皆飛丸に斃れざるなし、田中神保亦將に西軍の虜とならんとす、二人走りて郭内なる藩醫土屋一庵の宅に入り、憤慨相評て曰く、事此に至る天なり、敵のためには擒となりて其辱しむる所となるなかれと、從容として自刃す、土屋一庵亦共に殉難せり、

國老田中  
神保等の  
自刃

隊長井上  
丘隅の殉  
難

小山田の  
家族難に  
死す

重臣沼澤  
出雲の家  
族節に死  
す

隊長大竹  
其妻子と  
共に自殺  
す  
奉行河原  
善左衛門  
一家の忠  
死

幼少組中隊長井上丘隅(六百石)亦急を聞き、其邸に妻女四人を刺し、屠腹して死せり、

小山田傳四郎(四百石)の父多門、母某も亦婦女二人と共に自宅に自殺せり、

沼澤出雲(千石)の祖母某年八十二、身軀鏗鏘、性行操烈、西軍四面に迫ると聞くや、男子を勵まして敵陣に向はしめ、子女三人と共に自宅に自害せり、

足輕小隊長大竹勝左衛門(百五十石)敵の郭内に亂入し、城門已に閉ぢられたりと聞き、妻子を携へて日新館に入り、亦節に死せり、國産奉行河原善左衛門(百三十石)の母及女は、一家兵火の犯す所となり、出で日向信之丞の妻子と共に、石塚觀音の堂に上り、相戒めて曰く、今や砲聲地を撼し、硝烟天を衝き、士邸市街皆烈焰の

隊長多賀谷一家の殉國

高木西郷有賀等の妻女諏訪社内に自盡す

中に投じ、城亦將に陥らんとす。我等敵のために辱めらるるなかれ。我公及び忠死の士と黄泉の途を同ふせんと。水を汲みて別盃を酌み、環坐刃に伏して死せり。善左衛門亦此日天明藩公に従ひ、敵を防ぎしが、西軍の追撃するに及び、殿戦して其子二人と共に瀧澤町に戦死す。初め善左衛門、獨恭順謹慎の説を主張す。然れども時既に戦論に傾きて聽従するの人はなし。是に至て、一死主君に背かざるを表白せり。烈丈夫と謂はざるべけんや。朱雀士中小隊長多賀谷勝之進(四百五十石)の家族七人、自宅に自盡す。是より先き、勝之進、越後福井に戦死し、此日祖父勝左衛門は大手通りに伯父勝次郎は城中三の丸に戦死せり。高木助三郎の妻女四人、西郷寧太郎の家族三人は、有賀惣左衛門の妻女と共に、郭内なる諏訪社内に自盡し、助三郎の父新十郎は、西追手前に進撃し、飛丸に中りて戦死せり。

組頭永井家族を刺して割腹す。中澤の家族自刃す

中野野中木村等の閩族國難に殉す

西郷柴遠藤等の婦女子皆自害して節を全ふす

士中組頭永井左京(四百石)は、憤慨自ら堪へず、家族六人を刺して自邸に割腹せり。中澤十郎(三百石)は奮闘激戦、刀折れ矢竭き、而して後城と共に亡びんと、家族四人をして自盡せしめ、遺骸を敵に辱しめずと、家に火を縱て城に入る。中野大次郎(百五十石)は妻女四人と、武具役人(七十五石)野中此右衛門は家族六人と、朱雀二番中隊長木村兵庫(五百石)は養父忠左衛門、實父幸藏及び婦女六人と、慷慨悲憤自ら禁ぜず、各自邸に火を縱ちて國難に殉す。朱雀二番中隊長西郷刑部(七百石)の家族四人、柴太一郎の家族五人、柴太助(百五十石)の家族三人、遠藤元之助の家族四人、皆貞操節烈の婦女子なり。其父兄弟は或は境上に戦ひ、或は城下に奮闘して、皆家に在らず。其西軍の迫るや、謂らく、苟も餘生を亂離の間

に偷み悔を百世に貽さんよりは寧ろ潔く節に國家に殉じ死して父兄をして願慮の煩累を絶たしめ一は歴世の君恩に報じ一は土津公以來素養の士風を表彰するに若かずと各自邸に火を縦ち從容死に就けり

重臣西郷  
頼母一家  
の忠烈

家老西郷頼母は先きに藩公の京都守護職の任を拜せんとするや爲以らく今や藩祖の遺志なりし尊王の思想天下に磅礴し來り而して開國交通の潮流は世界の氣勢として將に我環海國に汪洋せんとす此時に當り京師の重任を帯び過激黨と共に一意朝議を奉せんとせば鎖國攘夷以て我國家をして倍固陋頑愚に陥らしめ何の時を期すも世界列國の間に對峙し皇威を八紘に震ふ能はざるを如何せん而して幕府と共に専心開國主義を擴張せんとせば朝議に背き王命にあらざるを如何せん故に此二者の中間に居り兩派の要路に立ち圓滿に處理せんとするは固

より大難事にして或は時に禍に遇はんを保すべからずと藩地より馳せて江戸に登り其拜任を諫止せしが聽かれず因て國に歸り専ら封内の政刑を視たりき後果して鳥羽伏見の變あり次て討會軍の我四境に迫るや出で白河口の兵を督せり其白河城の陥るや謂らく事爲すべからずと乃ち主として恭順の説を唱へ再び藩公に勸む藩公其説を斥け諸將士亦之と議合はず是に於て頼母藩公の旨を失し閉居鬱々として一藩の危急を憂慮せり已にして西軍城下に迫り硝烟天を蔽ひ砲聲地を撼す頼母乃ち家族に告て曰く事已に此に至る今にして亦何をか言はん一死殉難以て臣節を盡すべきのみ然れども我公多年の孤忠苦節をして空しく水泡に歸し反賊の臭名を負はしむるは之れ臣子終天の遺憾なり我暫らく惜しからざる生命を保ちて朝廷に訴へ賊名を消し然る後に死を決す亦憾なかるべしと其母之を

小森町田  
芥川淺井  
等の家族  
皆義に死  
す

替して曰く、汝初めより一藩のために微志を盡す之れ皆大義名  
分を誤り、賊名を負はんを恐れてなり、今や事此に陥り、而して其  
責を知らざるは士の恥づる所なり、汝是より百方我公の忠節を  
表はさんことを謀るに努力せよ、我等は潔く國に殉じ、汝を泉下  
に待たんと、乃ち其婦及び子女二人、孫女五人と共に、刃に伏して  
死す、時に又親族小森駿河の家族五人、西郷鉄之助夫妻、軍事奉行  
町田傳八一家三人、芥川十藏の家族三人、淺井新次郎の妻子二人、  
皆共に同邸に自亦す、頼母乃ち邸に火を縦ち、子吉次郎と共に城  
に入り、藩公に謁して、大に開戦の非を論じ、熱誠赤心を瀝きて直  
諫し、而して列坐の重臣に向つて、恭順説を排したるを駁撃し、勵  
聲叱呼、眦裂け、髮立ち、其論鋒當るべからず、然れども恭順の機已  
に去り、亦如何ともなす能はず、之を以て皆耳を傾くるものなく、  
唯城と存亡を共にせんと欲するのみ、時に恭順説の城中の兵氣

小澤和村  
垣見西村  
竹本高木  
等の妻子  
皆劍に伏  
す

東軍の義  
勝勇

を阻喪せんことを恐れ、之を殺さんと欲するものあるに至る、後  
使命を奉じて米澤に至り、次て間行仙臺に至り、我公の冤を天下  
に表明せんとす、遂に海に航して箱館に趣き、徳川の脱士榎本等  
と、大に朝廷に訴ふる所ありしが、遂に開戦し事敗るるに、及ひ降  
に就けり、  
小澤八彌の家族四人、和田勇藏の妻女三人、垣見幾五郎の老父母、  
西村文次郎の老父母、竹本鴨夢の妻女三人、高木豊次郎の家族五  
人、皆義膽烈志慨然として、亦自ら劍に伏し、國難に殉す、  
其他黒河内傳五郎、矢島村右衛門、山下寅之助、岡本丈助、小田外三  
郎、赤塚藤内、君島貞五郎等、皆老成耳順、或は古稀に近し、而して二  
十三日の味爽、切齒慨歎、劍に伏して死せり、  
廿三日の役は、奥羽第一の烈戦なり、我會津藩士の戦死せるもの  
實に四百六十餘名、其他市民の死せるもの數ふるに、遑あらず、而

西軍の勇  
壯剛果

西軍市内  
の各所に  
據る

いて其西軍の兵凡そ三千、我兵の精銳皆國境を守り、其城中にあるもの僅に玄武白虎の老少の兵にして、而かも其一部分残れるもの凡そ數百餘人に過ぎず、天明より夜に至るまで屈せず撓まざ、奮戰激闘實に死を決せしに至りては、西軍已に支ふべからざらんとして、僅に夜を徹して對峙せり、之れ皆我軍の驍勇強悍に因らずんばあらず、然りと雖ども西軍も亦敵中に突入し、死地を侵して烈戰する、其剛果壯武想ふべきなり、

(十五) 國境守兵の歸城

廿四日、昨朝よりの兵火倍々熾なり、西軍兵を悉く市中に移し、更に堡壘を越後街道なる市端穢多町と、米澤街道なる市端七日町とに築き、各藩の信地を定め、薩州及び佐土原の兵は、追手通り、甲賀町口より左側本六日町口、三日町口を経て、天寧寺町口の間を守り、土州の兵は甲賀町口より右側馬場町口を経て、大町口の間

東方面の  
守兵若松  
城に返る

を固め、長州及び大垣の兵は大町口より右側桂林寺町口の間を警め、越後、米澤の兩街道の堡壘を守備し、又薩州の別隊は瀧澤町に陣し、砲撃して以て諸口の西軍來り會するを俟てり、是より先き、白河、須賀川等各方面の我守備兵は、猪苗代の急を聞き、馳せて戸の口に西軍を逆撃せんと、福良、原等の白河街道に出づれば、會城は已に重圍の中に陥りたりとの報を得、背矢、湯の入等の間道より、前後若松市外に達す、西軍は此日より天寧寺町口を始めとして、城外の東及北面に據守せるも、城の南及西方は合圍する能はず、城南天神橋畔の昨日の戰場は敵軍已に去りて、唯空しく死屍遺骸の累々たるのみ、然れども歸城兵の小數なる時は、西軍必ず之を亂射して其入城を妨ぐるを以て、其小隊は市外に留まりて、諸隊の來會するを俟ち、漸く多數に至れば乃ち虚勢を示して城に入りぬ、



南日山川  
隊の騎城

此日南方面に出陣せる山川砲兵隊は、若松城危急なりと聞き、馳せて市外に至るも未だ城中に入る能はず、城兵遙に之を見敵兵至れりと思ひ、門を閉ぢ、砲を擬して以て來り迫るを待つ、是に於て、隊長山川大藏(浩)城兵の守備に急にして、我を敵軍と誤らんことを恐れ、乃ち一計を案じ、兵士に令して巨大なる太鼓及び横笛各十數個を求め、衆をして若松地方の俗調なる彼岸獅子の囃子を奏せしむるに、其響轟々然として城中に達す、城兵始めて山川隊なるを知り、門を開て之を待つ、西軍亦鼓聲を怪み、避けて戦はず、隊長山川乃ち鼓躁して進み、終に城中に達することを得たり、若松地方毎年彼岸の日に至れば、藩村各一隊をなして、勇壯なる獅子を奏し、獅子舞をなして市中を行く、而て各隊其技を競ひ、互に罵詈雑言の末必ず一場の争鬭を開く、常とす藩の壯士之を好み、互に各隊の巧拙優劣を論難せり、故に世人佐川の勇猛、西郷の忠直、山川の智謀を稱して、會津の三傑となす、是れより廿五日に至るまで各方面より前後城に入るもの、其兵數凡そ千數

白河口の  
西軍若松  
に入る

百人に至り、城中勢威大に振ふ、廿五日、白河方面の肥前兵、二本松方面の備前兵は、長駈若松に達して、薩長土垣等の兵と合し、肥前兵は城の東面、備前兵は米澤街道の堡壘を固めたり、此日又紀州尾州の兵後援として勢至堂に到れり、

(十六) 穢多町の戦

西面越後  
口の東軍  
若松の西  
軍を掃は  
んとす

廿五日、越後口出張の我衝鋒隊は敵軍城下に逼ると聞きて馳せ還り、曉霧に乗じて長州大垣の信地を侵し、若松市端、越後街道の堡壘を襲ふ、是より先き、二十三日、西軍城下に迫るや、藩公使を馳せて、越後口出張の一部隊に命じ、若松城下の敵兵を掃攘せしむ、此時我兵は越後口本道なる津川を根據となし、阿賀川を挟みて、西軍と對陣し、其間道沼越は、石間、岩屋、五十島、谷澤等に陣して西軍を防ぎ、勢大に振ふ、然るに暮成の敗聞達するや、皆津川に集まる、而して衝鋒隊は若松の敵軍掃攘の先鋒を命ぜられ、次て亦町

町野結義  
砲兵の諸  
隊若松に  
向ふ

柳橋附近  
の戦

中野竹子  
等の烈婦  
西軍と戦  
ふ

野隊結義隊砲兵隊等津川の營を抜て若松に向ふ先鋒は二十五日拂曉若松市街より城に入らんと欲し城中の迂回兵と相合し即ち市端の敵壘を襲へり是に於て西軍柳橋近傍に之を拒ぎ苦戦して漸く之を斥く我將岡田又五郎等戦死す我兵退きて高瀬村を保つ此時中野平内の女竹子妹蝶子神保園子等の烈婦國歩艱難若松城の滅亡旦夕に迫れるを悲憤し慨然として謂らく我公固藩祖の遺訓を奉じて朝廷に忠に國家に盡して他念なし而して一藩亦着實沈勇身命を抛ちて公に奉ぜり今や順逆地を易へ兵馬四境に迫り我城の存亡目前に迫り一家眷族已に難に死し知己朋友亦多く刃に伏せり我等は女子の身なりと雖ども驕傲なる敵兵の城下を蹂躪するは見るに忍びざる所必ず之を驅逐し一死以て泉下の家族知己に遇はんと坂下驛に宿營する町野隊に至り從軍せんとを乞ふ隊長其婦女子なるを以て許さず

城兵突出  
越後口市  
端の西軍  
を掃はん  
とす

穰多坊の  
戦

是に於て綠鬢を中斷して之を束ね袴を穿ち眉尖刀を横え勇氣凜然先鋒衝鋒隊に前後して市端の西軍を衝く西軍の將令して之を縛せんとす竹子等奮進數人を斬る是に於て敵兵亂撃竹子飛丸に中りて斃れ敵兵進んで其首を獲んとす蝶子等之を援けんとして遮り戦ひ遂に擒となる竹子年二十蝶子の二女年各十八後其遺骸を収めて坂下驛法界寺に葬る已にして城中越後口の我兵市端に開戦すと聞き其西軍を夾撃せんと欲し大沼砲兵隊等城の西門を出て西名古屋町より直に郊外に出て穰多坊の傍を過ぎて柳橋に至らんとす穰多坊は若松最西の市端にして數十の土藏並立せり此時西軍は越後口の我兵を斥け穰多坊の土藏に據り城兵の郊外に出て近き來るを俟ち一齊に亂射す我兵亦之に應じ左右翼を縦ちて中央及側面より猛撃し將に之を斥けんとす然れども西軍は倉庫の間に出没し或は庫内に潜みて發砲し甚た要害

土將谷安岡等の奮戦

を占む、而して使を馳せて薩土の兵に應援を乞ふ、是に於て、土將谷守部(干城)安岡覺之助等、趣き援け、三面より我兵を襲ふ、兩軍の砲聲、天地に轟き、硝煙、全市を蔽ふ、安岡遂に飛丸の中る所となりて之に死す、我兵遂に其抜く能はざるを知り、軍を收めて城に入る、此日我各隊、追手口、馬場町、大町口、及び御山村、小田村等より、兩軍を砲撃して退く、二番砲兵隊長笹原彌五郎等、傷つき卒に城中に死す、

(十七) 小田山の要害

小田山の形勝

會津城の東南十餘町に一小山あり、小田山と云ふ、路險にして儘に登るを得るのみ、而して頂上能く城中を瞰視すべし、之を以て東方面の守兵、若松市外に達し將に城に入らんとするや、城中使を派して直ちに小田山に據りて城中の聲援をなさしむ、然れども東方面の守兵は、諸隊同時に守衛地を發せるにあらず、されば

西軍小田山を占領す

小田山の砲聲

各隊未だ集合せず、且晝夜兼行馳せ歸り、糧食繼がざるを以て、一先づ城中に入り、糧食を備へ、各隊を集合して小田山を守る未だ晚からずとなし、殊に西軍は小田山の要地なるを知らざるべし、遂に城に入りたり、翌廿六日、西軍は白河口、二本松口より續々として踵き至り、城外の地形を按ず、一向宗極樂寺の僧小田山の城中を瞰射するに究竟の地なるを告ぐ、西軍即ち小田山に登り、壘を築きて巨砲を備ふ、之より日々榴霰彈を亂射せざるとなし、城中最も此砲撃に苦しむ、而して城中亦搦手及び三の丸の壘上に大砲を据へて之に應じ、激戦せざる日なし、初めは西軍天守閣を破壊せんと、之を目標として發砲せしも、建築の堅固なる、幾百數十の巨彈、白壁を毀るのみにして遂に之を壞崩する能はざりき、是に於て、彼は多く破裂彈を射て、城中の屋舎兵員を傷けんとせり、城中此破裂彈のために、火災に至らんとすると屢々なりし

城中の婦女子等能く破裂弾を拾ふ

が此時江戸藩邸に備使せる消火夫會津に従ひ來り城中に在りしが、膽勇にして彈丸雨飛の中を意とせず、敵の砲發を聞くや、毎に桶に水を汲みて屋上に登り、火の起りぬと見るときは、飛鳥の如く縦横に奔走し、忽ちに之を消し留む、其敵彈の未だ破裂せずして降下するとき、衣を濡し馳て之を包みて破裂を防ぎ、却て我發砲の用となしたり、之れ甚た危険なるが如しと雖とも、當時城中彈丸乏しく、且つ日々の砲戰に慣れたるを以て、竟に婦女子も出て、此彈拾ひをなせり、抑も小田山は一に大窪山と稱し、士民の墓地たり、其半腹より頂上に至る其間に大小の墓碑參差たり、西軍毎に之に身を潜めて、我射撃を避け、我兵の近ければ必らず石碁間より狙撃せざるなし、一日城中其墓碑の最大なるものを撰み之を目標として巨砲を發射しければ、彈丸命中して其碑石のみならず、附近幾十の碑石

城兵小田山を砲撃す

火藥庫の爆烈

皆破壊飛散して、西軍の死傷無數なり、八月廿七日、狙撃隊長山川大藏、青龍一番士中隊長木本内藏丞等、小田山の敵軍を掃はんと、小田、青木等の諸村に進撃せしも、山上より瞰射すると激烈にして、遂に目的を達する能はず、隊長木本傷き卒に死せり、小田山の麓に一大火藥庫あり、奥行三二間半充すに硝藥を以てし、些の間隙なし、而して城を距ること僅に數町のみ、小田山の西軍屢々來りて之を奪ふ、城兵亦出て、之を運ばんとすれば、山上の叢林より射撃を受け、竟に近く能はず、是に於て、九月六日午前、城兵此火藥庫を粉碎して、敵の用たらしむ可からずと、巨砲を發して火藥庫を射る、火藥庫即ち爆烈し、其震動、其爆聲、數里外に達し、實に萬雷の一時に落つるが如く、轟然として天柱を折り、地軸を挫かんとす、遠く四方の山野に遁れたる人民と雖も、大に愕き、其

何たるを考ふるの暇もなく、轉々室内のものは室外に走り出て、屋外にありたるものは屋内に駆け入れり、已にして皆想へり、若松城一時に崩壊せるならんと、後數日始めて其事實を詳かにするを得たりき。

(十八) 長命寺の戦

若松の敵軍掃攘を命せられたる町野結義砲兵の諸隊は、八月廿五日、坂下に至りて宿す、明日或明後日を以て、穰多町の敵を拂ひ、城に入らんと期し、創者あるも之を扶けず、直前願ると勿んを約して、宴を張る、悲歌盛興、蓋し訣飲なり、廿七日、味爽坂下を發し、高久村に至る、時に公西郷頼母を使って命を傳しめて曰く、曩に市街の敵を掃攘して守城を命せしも、今や各方面の諸隊日々城中に來會し、防禦餘りあり、而して越後口は西軍の大兵の向ふ所なり、若し此方面を空虚にして、白河口の敵兵と東西相通せしめば、我

町野隊等  
再び越後  
口に向ふ

城兵融通  
寺町口に  
突出す

西軍長命  
寺に據る

か利にあらず、速に此より引返して、越後口の西軍を撃攘すべしと、各隊命を奉して、又西下し、津川口本道舟渡に至る、是に於て、八月廿九日、午前八時、我將佐川官兵衛を始めとして、朱雀二番士中田中藏人隊、朱雀三番士中原田主馬隊、進撃小室金五左衛門隊、朱雀足輕間瀬岩五郎隊、砲兵一番大沼城之助隊、別撰隊、衝鋒隊、順風隊、別楯隊、遊撃隊等、十二箇中隊兵凡千餘人、城中を出て、融通寺町口郭門より、城の西北面に當れる長州大垣備前等の市街の營を襲ふ、其勢疾風の如く、銃手は大小砲を亂射し、槍隊は劍戟を揮ふて進む、別に野田進隊、杉浦丈左衛門隊は、城西より市端柳橋に廻り、穰多坊の敵壘を襲ふ、西軍の宿營する近傍に一大寺あり、長命寺と云ふ、回らすに堅固なる土塀と溝渠を以てし、裡面は墓田、右側は一大庭園にして、松林の間に池水築山相連り、實に要害の地たり、融通寺町、西名古屋町等の西軍苦戦して退き、

城兵三面より進んで長命寺を占領す

土軍の勇猛

之に據りて力拒す、我右翼は赤井町裏西光寺に出て、石碣を以て楯となし長命寺の表門を撃ち、左翼は融通寺町城安寺裏の碑石の間を進みて、長命寺の墓間に出て、敵の背面を攻め、中央は西名古屋町の民家に入りて、敵の右側を劇射し、遂に我中央及び左翼は、猛進して寺内に入る、西軍亦池水を挟み、松林に出没し、築山に據りて防戦す、我兵突貫遂に之を占領す、西軍の敗報土軍の營に達し、久時衛、遠藤平八郎等の諸隊、急に馳せて之を援く、谷守部之が監たり、次て日比虎作、北村長兵衛等の諸隊又赴き援く、伴權太夫、大石彌太郎之が監たり、我右翼之を桂林寺町口、當麻町口に逆撃す、土軍亦勢甚た猛烈、市の中央より榴霰彈を放ちて勢を助く、是に於て、先の敗兵返戦して來り、再び長命寺に據る、我兵憤慨、或は民舍より、或は墓田に出没し、或は街路を突進し、皆死を奮ふて角戰激闘せり、硝烟雲の如く、飛丸雨に似たり、天地之が爲めに

會津原田小室間瀨等の血戦

土將の戦死

會兵の死傷

朦朧として、日光無し、死屍丘を成し、流血泉の如し、風之が爲めに腥くして、草木皆色を失ふ、我隊長原田主馬傷き、小室金五左衛門、田中藏人、古田虎之丞、間瀨岩五郎、鈴木丹下、杉浦丈左衛門等、皆血戦して死せり、我兵遂に退て郭門に入り、濠を隔て、戦ふ、時に大沼城之助隊等、殿戦して赤井町に至れば、土軍日比北村の諸隊、桂林寺町を突進し來るに會し、乃ち郭門の傍なる諏訪社の林中に據り、土軍を轟撃す、土軍苦戦し、援を薩軍に乞ひ、其來援を得て奮進す、大沼隊亦殊死して之を斥く、我軍亦皆城中に退きたり、此日西軍は土軍死傷最も多く、隊長久時衛、遠藤平八郎等創を蒙り、久卒に之を以て死せり、而して我軍の死傷亦頗る多く、五月朔日、白河城陷落の時に次ぐの大戦なりき、會士三坂五郎左衛門(四百石)の弟逸八、亦此戦に死せり、逸八の城を出づる時、家族を會し、盃を擧げて訣別し、國風一首を詠じ、死を

期せり其詠に曰く

武士のつよき眞弓をひく時は

かへらぬものと兼てこそしれ

其他我將士の戦死者大畧左の如し

進撃隊小隊長	磯上内藏之丞	全右	飯東宗慶	全	上島源藏
青龍二番杉浦隊	伊藤彌一郎	全右	飯岡庄太郎	全	高木次郎
青龍一番士中	伊藤小左衛門	正奇隊	芳賀好之助	全	高橋直五郎
有賀隊	井上八十郎	原田隊	伴十次郎	原田隊	高津豊太郎
朱雀三番士中	一瀬主税	全右	遠山清藏	全	小野忠之助
原田隊	井口新太郎	全	井深元次郎	全	永野岩作
朱雀二番士中	原萬次郎	全	南辰三郎	全	浦野祐記
田中隊	石黒廣記	全	三坂逸八	朱雀二番士中 中隊長番頭席	田中藏人
全右	石井金吾	全	日向初之進	全隊	海野順平
全右	石山司	全	關脇常之進	全	中村謙治
朱雀番上田隊	五十嵐新之助	全	松原孫八郎	全	町田源八郎

全	牧原八藏	全	小槍山傳次郎	正奇隊	林數之助
全	相田和吉	小室隊	高橋源次郎	全	長谷川多三郎
全	穴澤辰五郎	全	室井清次郎	別撰組隊長	古田虎之丞
全	佐藤健治	全	宇南山宗平	別撰組	神山鶴松
全	佐瀬大八	全	外島良藏	全	唐澤源八
田中隊	酒井惠三	全	二瓶陶五郎	全	加須屋代五郎
全	北原四郎	全	渡部信助	全	横山辰太郎
全	柴太助	進撃隊	梶原備藏	全	弦木金吾
全	一瀬正弓	全	全豊記	全	辻仁助
全	星精藏	全	岡部清助	全	名越藤次郎
進撃隊中隊長	小室金五左衛門	正奇隊中隊長	杉浦丈左衛門	全	立石岩四郎
全隊	万力文助	全隊	佐藤茂十郎	全	長尾常之進
全	安藤監治	全	弓田貞之進	全	樋口時之進
全	赤羽八百吉	全	三浦源八	全	諏訪九十九
全	齊藤八郎	全	鈴木丈之進	全	熊澤寅藏
全	佐藤喜七	全	小池初之進	全	櫻井幾之進
全	櫻井錠次郎	全	佐藤橋松	全	服部榮

別撰組	堀 榮次郎	砲兵隊	小川 太郎	全	木村 巳之吉
全	春日 佐久良	背龍足輕 小隊長	常盤 數馬	朱雀士中隊	片岡 安太郎
野田隊 小隊長	内藤 隣之助	佐川 隊	大河原 小藤太	別楯隊	河原 田逸八
全隊	同 勇五郎		池上 沖三郎	順風隊	好川 勇治
全	笠間 金次郎		石山 敷之助	會計掛	吉田 勇
全	川村 寅松		五十嵐 勇		柏 徳左衛門
野田隊	高崎 信次郎		橋爪 煮		横山 勝太郎
全	森山 金次郎		坂 五郎		依田 武三郎
全	櫻田 勇		小川 房次郎	生駒隊	田中 善助
砲兵隊	須賀 直助		池上 治三郎	遊撃隊小隊長	武井 清兵衛
全	遠藤 辰五郎	敢死隊	太田 小太郎		武藤 忠吾
全	岡田 真藏	朱雀寄合 中隊長	鈴木 丹下		竹内 太一郎
全	枝村 千代助	同隊	百崎 和一郎	原田 五郎隊	高橋 次郎
全	福岡 千太郎		小山田 清輔		内田 次郎
砲兵隊組頭	福田 八十八	全	若林 八太郎	士中隊長	海野 小兵衛
全隊	岡田 豊治	朱雀二番 中隊長	間瀬 岩五郎	朱雀遠山隊	高橋 新六
全	和田 新五郎	全隊	小沼 乘次郎	朱雀隊	栗村 治平

町野砲兵  
の諸隊木  
曾口に應  
援す

(十九) 木曾口の戦

八月廿七日、町野隊、結義隊、砲兵隊等城中よりの命により、若松附近より越後口に引返して、舟渡に至れば我越後口残留の太田白虎隊三宅遊撃隊の諸兵は、已に津川を退き、只見川を渡りて舟渡を固守せり、而して西軍は其津川の虚を衝き、突進して、片門驛に達し、只見川を隔て、舟渡の我兵と相對し、日々砲戦すと雖ども、

大沼市 太夫	朱雀隊	齊藤 庄三郎	奇勝隊	三井 計次郎
山田 重三	全	四郎	朱雀士中隊長	庄田 又助
古川 三郎	順風隊	坂井 源之進	小隊長	廣瀬 鐵次郎
舟橋 捨藏	有賀 勝助	官兵衛父 佐川 幸左衛門	衝鋒隊小隊長	鈴木 勇
赤羽 宇兵衛	朱雀二番 小隊長	正奇隊小隊長 菊地 勝之丞	原田隊	池田 宇吉
阿妻 市次郎		岩田 市右衛門		牧原 勘五郎
穴澤 吉之助		弓田 豊治		
青山 善次郎	朱雀隊	湯田 忠吾		



越後津川より若松に入るべき諸道

河水急流にして舟の渡るべきなく、唯日を曠くするのみなり、是に於て、町野隊及砲兵隊は、更に西軍の右翼隊の進める耶麻郡木曾方面を防拒すべきを命せられ、直ちに舟渡より館の原に向ふ、此時此方面には、賊志隊、朱雀、西郷隊、白虎原隊等の諸兵ありて西軍に當れり抑津川より若松方面に至らんとするには、左右の二道あり、即ち右は本道にして、車峠及び鳥井峠を踰えて、野尻に出で野澤に至り、續きて片門、坂下の諸驛を経て、若松城の西北面に達す、左は阿賀川に沿ひて上り、幾もなく河の右岸に移り、小支流實川に沿ひて上り、續きて岩屋峠を越え、陣ヶ峯の麓を過ぎ、木曾、慶徳及摺川を経て、若松城の北面に達す、而して慶徳及摺川より小荒井、小田付二驛合併して、今は喜多方町と云ふ熊倉等の諸驛に達することを得、又野尻より阿賀河の右岸に渡り、木曾館ヶ原、慶徳等の諸村に達すべし、其他本道より阿賀川を渡りて右岸の左道に合する道路甚た多し、

陣ヶ峯の戦

是より先き、我軍は木曾、陣ヶ峯等に據り、津川口西軍の左翼を防ぐ、八月廿九日、藝州、松代、新發田の西軍は、三方より進みて滑澤村に至り、我軍と相會し、烈戦數刻、遂に擊破して進む、三十日、西軍諸藩の兵芝崎村に集合し、江谷村より突進して陣ヶ峯を攻めんとす、東軍堡壘を險隘に設けて之を拒ぐ、時に西軍の別隊間道より右側を襲ひ、東軍乃ち萩野村の壘に退き、之を守る、西軍隨て之を攻め死傷甚た衆し、長藝の兵、更に左右に迂廻して兩側より横撃せしかば、東軍遂に萩野村を退く、九月二日、進んで取上峠に陣す、其他東軍の別隊、館の原及び小土山等に出没して、西軍を遮斷す、三日拂曉、我砲兵隊、二十餘名、山を繞りて、叢林中より、俄に堂目村の西軍を襲ふ、西軍二百數十人、餉を傳ふの時なりければ、大に驚き四方に散亂し、後隊に警報せしを以て大兵來りて我歸路を絶たんとす、因て且つ戦ひ、且つ退き、大船澤村に至る、時に、町野隊、間ヶ

堂目村の戦

戰 間ヶ澤の

澤村に於て西軍の大兵と會し、力戰奮闘、接又相逼る、兩軍死傷甚  
た多し、町野隊衆寡敵せず、遂に退く、大砲隊其戰聲を聞て赴き援  
はんとして、遂に退き來るに會し、共に中反村に陣し、使を遣はし  
て館の原の本陣に援を乞ふ、

館の原戰

小布瀬原  
の戰

四日、長岡隊百餘人來援せるを以て、進んで堂山村に陣し、山徑の  
險隘に壘を築き、以て西軍を防ぐ、此日、西軍三路より館の原を進  
撃せり、我兵村内の堡壘に據り、之を力拒す、西軍の砲戰暴雨より  
も急に、猛風よりも烈し、西軍遂に村内に突進して我軍を衝く、我  
軍急に左方の山上に上る、偶々西軍の一隊其山脈山より突會す  
るに會し、彼此相搏ち、激撃相當る、我軍遂に館の原、木曾村を焼き  
て退く、是に於て、町野隊等七日、一合村に陣を替へて警備す、八日  
西軍之を猛撃して斥く、我軍亦退きて荒町峠を固め、十日進んで  
二軒茶屋に陣す、此日、西軍大舉我小布瀬原の本營を襲ふ、是に於  
て、我木曾口方面の軍は一は小荒井驛に、一は慶徳の西軍と激闘  
して、鹽川方面に退きたり、

(二十) 西軍の聯絡

越後方面  
東西兩軍  
の形勢

是より先き、越後口西軍の中央は、只見川の險要を隔て、舟渡の  
我兵に遮られ、又右側八十里越口の西軍は、後軍の至れるに従ひ、  
瀧谷村以南、胃村及び沼平に進みしも、東軍は高田驛を根據とし  
て、只見河線に據り、柳津、輕井澤等の險要に出沒して、之を遮り、又  
西軍の左側は阿賀川の右岸に移り、岩屋越より陣ヶ峯に據り、木  
曾村の我兵と相對し、其間戰線十數里に涉れり、而して此三方の  
我軍は、皆精銳驍勇の兵士にして、死を決して防戦す、之を以て越  
後口の西軍は、其兵數多しと雖ども、若松城外十餘里の地に至る  
も旬日の間、皆會津の山間に停められて、未だ會津の平地に出づ  
る能はざりき、

若松の西軍越後口を拒ぐ東軍の背を衝かんとす  
塔寺驛の戦

舟渡の戦

若松城下の西軍は、越後口中央の西軍、舟渡の兵に支へられて進む能はずと聞き、背面より其兵を夾撃して先づ聯絡を通せんと九月五日、薩長肥垣の兵、城北高久驛に突出して、越後街道を進む。我々武士中伊與田圖書隊、關門を塔寺驛に設け、我舟渡の守兵遊撃隊、白虎隊、結義隊等と連絡して、若松方面を警戒せしが、城下の西軍來り迫るに及び、乃ち力戦して之を拒く、然れども衆寡敵せず、遂に支ふる能はずして散亂し、松坂平左衛門、猪狩新吾等の諸將、之に死す。西軍進んで舟渡の背後に迫り、丘陵より不意に激射す、舟渡の我兵前後に敵をうけ、大に愕き、俄に備を整へて之に當りしが、苦戦に堪へず、其右方にあるものは鹽川に左方にあるものは高田に走る。是に於て、中央の本道空虚となるを以て、城下の西軍只見河の岸上に至れば、前岸の西軍東軍の大兵至れるとなし、砲を放ち、亂撃す、迎兵乃ち合旗を揮ひ、白河口の西軍なるとを

示し、船を熾して之を迎へ、兩軍始めて相通ずるとを得たり、後數日全軍合して若松に進みたり、而して其左右は猶東軍の抗拒に遇ひ、若松に達する能はざるなり。

(廿一) 大内並關山の戦

是より先き、日光口、太田原口の南方面は、三斗小屋、鹽原、藤原等に西軍を打斥け、機に乗じて將に總野の平地に突出せんとせしが、石筵の敗聞達せしを以て、皆其守を撤して沿道の諸村を焼き、朱雀足輕隊長有賀左司馬等は三斗小屋より、小山田傳四郎隊は鹽原より、其他の東軍は藤原口より、會津の國境に退く、當時東西兩軍の形勢は此方面の敵軍宇都宮藩の届書を見るに明知するを得るを以て、左に其一二を掲ぐ、

一 翌二十六日、大原村邊へ爲斥候、弊藩一小隊差出候處、晝九時頃於同村、肥前兵隊に出會、俱に進軍、藤原村賊の胸壁數十間に相迫り、乃發

南方面の守兵守を撤して若松に退く

砲候處、賊兵相應し類に砲戦仕候へ共、不便之場所、且其節人少に付不得止七時過人數引揚申候。兩日死傷之儀は、別紙之通に御座候、其節討取之首級、並分取等之儀は、追て取調可申上旨、在所表より申越候に付、不取敢此段御届申上候以上。

七月十七日

宇都宮藩

大塚數馬

覺

戦死

銃卒

高瀬久馬造

中神鎬之進

銃卒隊司令士

前原吉兵衛

木村善太郎家來

内山久吉

夫一人

右廿五日戦争死傷に御座候

深手

士分隊司令士

中神璋藏

淺手

同 嚮導

小島鏡吉

戦死

安形鞆負太郎

齋藤權兵衛

田中五太夫

彦坂新太郎

井上乾次郎

渡邊桂之進

加藤銀次郎

右廿六日戦争死傷に御座候

七月十七日

宇都宮藩

大塚數馬

宇都宮藩届書

野州藤原村屯集之賊徒共、兼て御届申上候通、當月七日、曉、敵藩宿陣罷在候、西船生村へ襲來候に付、進撃仕、逐拂候後、近邊迄時々出沒相窺候に付、當方に於て要害の地を見立、竹木伐拂、入口へは胸壁を設け、守禦益嚴重に仕罷在候處、當月廿一日藤原村之方に當り、火之手相見候に付、何事共不相分候得共、人數差出候處、賊徒金穀之不便に御座候哉、會津邊攻撃相迫候哉、險要之陣營、民家共不殘放火自燒引拂候に付、跡見届候之處、外に相異候儀無御座、猶賊徒之行衛相尋候處、會津領横川と申候所へ引退候由に付、人數引揚の上、敵藩兵隊追撃可仕旨、肥前藩へ

申談候、敵藩にて先鋒相勤候様に付、約諾仕、其儘尾撃と奉存候得共、前路之儀者頗る深山荒僻之地にて、人家稀疎、兵食も無之に付、用意仕候内、廿二日日光山守衛之、藝藩日光裏通六方道を相進み候由、廿四日に相成、敵藩并肥前藩、同道小百村の方へ進軍仕候段、從在所表申越候に付、此段不取敢御届申上候以上。

八月

宇都宮藩

西村鎮兵衛

南口西軍の進入

西軍、肥前、宇都宮の兵は、八月廿四日、藤原より其虛に乗じて進み、藝州の兵は已に日光裏通、六方道を取て進み、此日三依驛に至り止りて他軍の至るを待つ、肥前、宇都宮の兵は栗山峠を越え、五十里村を過ぎ、廿七日、始めて三依に藝軍と相合す、是に於て、我軍且つ戦ひ且つ退き、田島驛に至る、是より先き、白河城の西軍、黒羽及び館林の兵は、白河を發して三斗小屋口に向ふ、八月廿三日、青龍中隊長原平太夫、朱雀中隊長有賀左司馬、之を拒きて利あらず、退て大峠、駒返、阪野、際村等の險に據り、廿七日、西軍を逆撃し、搏戦奮

三斗小屋の戦

野際口の戦

闘之を却く、隊長原平太夫、有賀左司馬、及び小川勝之進、武田寅治、小出新助等士卒の死傷多し、是に於て、遂に野際村を退きて、田島方面の我兵に會す、

杉山の戦

廿八日、肥前、宇都宮、藝州の兵は、道を分ちて進み、野州横川村に於て、鹽原より進入せる太田原の兵と相合し、遂に會津領絲澤に至る、廿九日、藝州、太田原の兵は本道より、其他の西軍は高野村を廻りて田島を進撃す、此時我軍は田島を退きて、松山より大内の險に據り、日光方面の西軍を防禦せんとす、三十日、我軍兵を松山に伏し、西軍の至るを俟つ、宇都宮の兵先つ至る、伏忽ち起り、亂戦猛撃、敵の隊長彦坂孝次郎をはじめとして士卒を打取ること甚た多し、西軍の大兵來り援くるに及び、遂に松山を退く、

大内峠の戦

是に於て、我軍大内峠の要害に據り、西軍の進み來るを俟つ、九月一日、味爽肥軍先鋒となり、宇都宮の兵中軍となり、太田原の兵後

軍となり、藝州の兵は左右の山麓より進み、我軍を撃つ。我軍高畦に伏して拒き、正面の西軍を撃破す。時に藝隊不意に我左側に出で、忽然陣營中に突入し、短兵接戦相逼る。我青龍三番足輕中隊長野村悌之助大に怒り、兵士を叱咤し、激闘遂に戦死す。士卒亦力戦遂に藝軍を斥く。時に又西軍正面及び右側より突進して再び壘中を襲ふ。我將小山田傳四郎、横山傳藏奮戦之に當り、遂に支ふる能はずして退き、關山を保つ。此日我戦死者大略左の如し、西軍の死傷亦數十名に過ぐ。

會兵の死傷

- 小山田傳四郎隊 橋爪辰之助 青龍三番足輕中隊長 野村悌之助 波部貞之助
- 朱雀寄合半隊 松田圓治 吉田善七全 深谷作三郎
- 頭横山傳藏隊 小荒井藤四郎 横山慶四郎 横山隊小隊頭 温味安太郎(關山)
- 砲兵隊頭取 笹沼金吾 齋藤新太郎 唐木隊小隊頭 三橋文内

關山の戦

二日、藝軍先鋒となり、太田原の兵中軍となり、宇都宮の兵後軍となりて進み迫る。我軍關山の險に據り、道路を挟みて保壘を築きて防戦す。此地は若松城を距る五里、南方面中最も近き要害の地なり。此日三斗小屋口の西軍、黒羽、館林、薩州等の兵來り加はり、勢威大に振ひ、直ちに關山を攻む。我軍力戦夜に至る。是に於て、西軍苦戦暗夜に乗じて退き、大内峠の險に據て陣す。三日、中津、人吉、今治の兵、大内峠に來り西軍と會す。乃ち全軍大内峠を發して再び關山を進撃す。我兵各所に埋伏して、西軍を亂射す。西軍屈せず、關山に逼り、大小の砲銃を激射す。榴彈空に裂けて散亂し、實彈地を掠めて飛び、烟塵山野を蔽ふ。時に薩軍、我背面に廻りて夾撃せるを以て、遂に支へずして、本郷に退き、轉して高田に至れり。此時西軍の死傷は宇都宮藩のみにて數十名あり、肥薩等の兵の死傷亦隨て多かりき。會兵の戦死者大畧左の如し。

東西兩軍の死傷

- 青龍三番寄合 野村悌之助隊 目黒常四郎全 甲斐惣助 青龍二番寄合 戸田八百太

横山傳藏隊 熊澤 幸 信 朱雀寄合 小沼辰太郎 鱈川隊 阿妻新之助  
全 大八木 重太郎 横山隊 朱雀足輕 吉田 忠 松 青龍三番 赤城千代之助  
横山傳藏隊

四日、西軍關山を發し本郷に進して宿陣す、本郷驛は若松を去る一里、五日、拂曉西軍若松に侵入す、此日は即ち我舟渡の兵敗れたるの日なり、

(廿二) 飯寺、川原の戦

九月五日、若松城中、日光口の西軍本郷より若松に進入するを偵知し、先づ一番砲兵隊長大沼城之助、大砲隊長田中佐内をして之を襲はしむ、城之助等兵を分つて、城西材木町住吉神社附近の叢林、或は民家に潜伏せしめ、敵兵の至るを俟つ、材木町の西は鶴沼川の右岸なる飯寺村に續き、平坦なる砂原なり、而して鶴沼河の左岸凡二里餘にして、高田驛あり、此日日光口の西軍を撃たんとするや、使を高田に派し、馳せて河岸に出て、西軍を挾撃せんと

南口の西軍若松に達す

砲兵隊西軍を逆撃す

飯寺の戦

を約す、已にして西軍本郷より鶴沼川を渡り、若松市端に至り、直ちに城下に入らずして材木町の西に廻り、白河口の西軍と聯絡を通せんとす、蓋し城北の市街は、已に白河口の西軍の占領する所となるも、城西城南の市街は未だ其の西軍の侵入する能はざる所なるを以て、城南より進みたる日光口の西軍は、市街の我陣地を通過して、城北に達する能はざるなり、此時我伏兵は乃ち西軍の前隊已に過ぎ、漸く其輜重の至るや、皆挺身して之を衝く、輜重隊大に驚き、兵器彈藥糧食等を棄て、散亂す、前隊亦顧みて愕き、即ち返戦之を防ぐ、時に城將佐川官兵衛等精兵五百餘人を率きて、城の西門より出で、我兵に應援し、縦横血戦、大に西軍を敗る、高田の我兵亦疾く馳せて前岸の松林に據り、夾みて西軍を刺射し、川を渡り、追撃す、是に於て、西軍糧食を失ひ、地理に暗く、遂に諸方に散亂せり、乃ち我軍の一隊は日光方面に遁れたる西軍を

柳原口の戦

追ひて大内峠に至り、一隊は亦凱歌を奏して城中に退く、六日薩州肥前人吉中津館林黒羽等の兵城西柳原の市街に入らんとす敢死隊新練隊拒戦奮闘之を卻く西軍遂に市に入る能はず僅に黒羽宇都宮中津今治の兵を飯寺村に薩州肥前の兵を深川村に太田原人吉の兵を幕内村に配布し相呼應して防禦を嚴にす此日敢死組差圖役關場安五郎新練隊笠尾八重之助其外數名戦死せり、

飯寺の再戦

八日味爽深霧に乗じて我兵四百人出て飯寺の西軍を襲ひ高田方面にありし長岡の山本隊及我木本隊之に應援して西軍を撃ち其勢疾風急雨の如し西軍の中津今治の兵大に驚き潰走す已にして西軍の援隊來り援け東軍を斥く即ち木本隊は一の堰に城兵は市街に退く山本隊敵の背面に回りて之を知らず將に敵中に突進せんとす時に西軍の別隊亦來りて山本隊の後面に逼

長岡山本隊の血戦

山本隊の死傷

る山本隊は深霧冥濛の中之を我水戸市川隊の來援と誤り初め隊の來援混同して前面の敵に當らんとしければ其別隊忽ち劔を揮ふて不意に之に迫る山本隊始めて西軍なるを知り大に驚き隊を整へて之に當らんとするに西軍三面より之を圍み血戦す是に於て遂に隊長山本帶刀を始めとして三十二名皆擒となり其死傷も甚た多し、

擒となるもの左の如し

- |        |         |       |        |        |
|--------|---------|-------|--------|--------|
| 山本帶刀   | 稻垣喜助    | 千本木林吉 | 倉澤彌五兵衛 | 雨宮敬一郎  |
| 篠崎繁右衛門 | 永戸九郎右衛門 | 中島富彌  | 松井松五郎  | 内藤佐之助  |
| 神戸菊五郎  | 能勢彦太郎   | 中川音三郎 | 寺田善右衛門 | 高橋辰次郎  |
| 岡本甚十郎  | 安田代太郎   | 丸山菊五郎 | 渡邊平吉   | 渡邊三平   |
| 室橋政七   | 長相龜次郎   | 八木藤太  | 佐藤政吉   | 吉田玄太郎  |
| 高橋彦右衛門 | 佐藤伊之七   | 阿部彌龍太 | 長澤龜之丞  | 久保曾右衛門 |
| 田島十次郎  | 中澤虎一    |       |        |        |

戦死せしもの左の如し



長澤金太郎 島井藤太郎 増井彌兵衛 山本敬太 篠田安作  
山口辰二郎 雨宮兵吉 長島兵八 大宮兵九郎

(廿三) 援を米澤藩に促す

會士堀米藩に説く  
堀慈憤して自刃す

是より先き若松城圍をうけ勢漸く急を告ぐるや、藩士堀久米之助を派して援を米澤藩に求めしむ、久米之助深沈にして剛毅なり、其使して米澤に至るや、是非を明にし、利害を論じ、義のある所を説き、同盟の前約を述べ、聲色共に勵し、然れども當時大數既に傾くを以て、彼兩端を持して議遂に決せず、遷延曠日師を出すを肯せざるものゝ如し、久米之助憤慨して曰く、咄懦夫共に謀るに足らず、唯四方に使用して君命を辱しめざる者之れ臣が任なり、而して今斯の如し、何の面目ありて復君侯と同胞に見えんやと、手書及び十金を以て逆旅の主人に附し、囑するに後事を以てし、更に一書を舛して米澤侯に與へ、其着くる所の憤鼻禪を解き、筆を

揮て詩歌各一首を書し、從容劔に伏して死す、實に九月四日なり、年三十一、其歌に曰く、

米澤西軍に降る

神かけて誓ひしものゝ適はずば

再び家路思はざりけり

之れ使を奉じて城を出る時の詠なり、同月五日、米澤竟に西軍に降り、蓋し米澤の恭順に傾くは、北越より其兵を退くるの時なりと云ふ、

(廿四) 城下の火

若松城下西軍の形勢

越後口の西軍は、其中央虚となりて白河口の西軍と僅に聯絡を通じたりと雖も、其左軍は尙鹽川木曾喜多方方面の我軍に支へられ、右軍は又高田柳津方面の我軍に遮られて、若松に達し得ざるを以て、若松城の攻撃は白河口日光口の西軍之に任せるのみ、蓋し一城を攻圍するに當りては、必ず他より來援するの路を扼

さざる可らず然るに我軍は遠く城外の四方に出没して城下の西軍の後背を衝かんとし或は一方を突出して封境外に出て同盟の諸藩と相通せんす而して城中の兵は日々突出して市街の西軍を襲撃するを以て西軍亦之に應じて鋒を接し晝夜警戒を嚴にし守備を修むるに汲々として未だ城中に進撃するの違なし

城兵火を  
放ちて西  
軍の營を  
焼く

九月九日薄夜城兵西南の烈風に乗じ密かに火を市街の西端に放ち以て全市を焦土と化して西軍の宿營する所を絶ち永く城下に駐ると能はざらむんとす八月廿三日より此時まで日々兵火に郭内市中の各所を烏有に歸せりと雖も未だ全市の半ばを残したりきは是に於て烈風火勢を鞭ち烟天を衝き須臾にして長州大垣の諸營を焼き盡し漸くにして市の中央なる土州の本營に延びんとす其間殆ど一里烈焰天を焦して一團の火海の

西軍の狼  
狽

如し此時城中より頻りに大小砲を亂射し火勢を助け猛火は飛んで倉庫に及び巨彈は雨下して屋舎を破壊し硝薬は一齊に爆裂して其聲百雷の如く山河爲めに震撼す西軍の諸隊大に驚き右に走り左に往き狼狽周章火を救ふ能はず僅に輜重を東北隅の市端瀧澤に移せり

西軍白河  
口に遁れ  
んとす  
參謀板垣  
の決心

此時西軍は城兵の突出の勢あるを見大に怖れ將に白河口に退かんとす西軍の參謀板垣退助土軍に令して曰く東軍城を出でて我を襲撃し諸藩の兵敗走するに至らば土軍は宜しく一團となり勢を合し銳を集め死を決して猛進城の虛を衝かん是れ豈奇功を奏するの機にあらざらんやと我軍亦城を虚しくするの危を慮り敢て市街に出て襲撃せず已にして火も亦土の本營に及ばずして熄みたり

木曾口西軍の猛進

(廿五) 熊倉の戦

九月十日、津川口より左側を進みたる西軍は、亦三隊に別れ、藝州長州の兵は右方木曾口より阿賀川に沿ひ、親兵、長府、松代の兵は中央總座松嶺より越前、松代、藝州、岩國の兵は左方木本口より進撃す、東軍の西郷隊、町野隊、衝鋒隊、砲兵隊等は本營を小布瀬原に布き、左方は慶徳村に、右方は草取嶺に保壘を築き、殊死血戦して力拒せしが、西軍の勢甚た猛烈、遂に支ふる能はずして且つ戦ひ且つ退き、小荒井驛に至る、西軍追撃、兩軍其市端に戦ふて日暮に及び、勝敗未だ決せず、已にして東軍硝薬彈丸盡きたるを以て、熊倉驛に退き、漸く戦備を整へ敵の迫るを待つ、此日砲兵隊長關清之進傷き中根米七之に代る、

小荒井驛の戦

熊倉驛の激戦

十一日午後、西軍一隊をして鹽川驛を畧せしめ、一隊をして熊倉驛を衝かしむ、我軍數百人、三面に分れ、叢林及丘陵、田圃等より包

鹽川方面東西兩軍高田に向ふ

撃し、短兵接戦、呐喊して猛進す、西軍の先鋒松代の兵大に驚き、敗走し、後隊隨て潰え、輜重硝薬皆遺棄して走れり、我兵進撃して小田付驛に至れば、西軍留り防ぐ、我別隊火を小荒井驛に縱ちて夾撃す、西軍腹背敵を受け苦戦に堪えず、將に退走せんとす、時に鹽川に向ひたる西軍の一隊、戦聲を聞き返し來り之を援はんと、我側面を撃つ、我別隊亦之と上高村に突會し、兩軍搏戦格闘時を逾え、西軍終に大に敗れ、退走すると十數里に及ぶと云ふ、此日、我半隊長田母神金吾、西郷隊富田覺治、誠志隊林又次郎、町野隊横田直徳、白虎隊遠藤嘉龍次等戦死せり、

十二日、東軍熊倉驛を發し、鹽川驛に至りて防備し、十三日夜、鹽川を發し、高久橋を渡り、道を下荒井、中荒井等の諸村に取り、十四日城南一の堰村方面に據り、城中糧道を開く、此時に當り木曾方面は戦一時熄むと雖も、高田方面は戦況益激烈となり、八十里越

の西軍大に苦戦するを以て、木曾方面ノ西軍應援として亦鹽川附近より終に高田方面に向ふ、

(廿六) 諏訪の戦

西軍の後援益若松城下に集る

西軍全力を盡して若松城を攻む

是より先き、西軍の參謀板垣退助、書を米澤藩に送りて降を勸む、是に於て、米澤藩先づ降り、重臣齋藤主計等をして兵を率きて會津に入り、西軍を援けしむ、此時に當り、諸道の西軍益若松城下に來會し、勢威大に振ふ、  
九月十四日、西軍全力を盡して四面を進撃し、機に乗じて城中に突入せんと、東北面は白河口の西軍之に任じ、西南面は日光口の西軍之を受持ち、且つ小田山には殊に砲隊を増加して、城下を瞰射激撃せしめ、桂林寺町口、融通寺町口は薩長、彦根、大垣、備前の兵をして猛撃せしむ、城中乃ち四方の郭門に兵を派遣し、且城壁より巨砲を連發して之に應じ、融通寺町口及び桂林寺町口は青龍

有賀小山田相澤の諸隊諏訪社に據る

隊長有賀等戦死す

川原町口通寺町口の郭門敗る

士中有賀惣右衛門隊、全鈴木作右衛門隊、其他相澤平右衛門隊、小山田傳四郎隊、井深宅右衛門隊等之を固め、壘を諏訪神社の側に築き、西軍と血戦す、其大小の彈丸樹林を裂き、倉庫を倒し、堡壘を壞り、營所を飛ばし、烟塵冥濛空を蔽ひ、礮聲轟然地を動かし、死屍丘をなし、流血杵を漂すも、兩軍少しも屈せず、死力を盡して激闘す、已にして西軍の死士突貫して諏訪社の壘を衝く、是に於て、我兵死守搏戰僅に斥く、我隊長有賀惣右衛門、堀常彦等之に死す、此時川原町口、融通寺町口の西軍の勢甚た猛烈を極め、郭門危急なりとの報を得、桂林寺町口なる諏訪社の我兵赴き援ひ、小山田傳四郎隊等残れる者甚た少し、已にして援兵未た至らざるに、西軍川原町口の郭門を撃破し、人吉の兵は片原柳町より、藝州の兵は深川村より、太田原の兵は材木町より、宇都宮の兵は新町及び番町より突進し、融通寺町口の郭門亦破れ、長州大垣の兵進入して

隊長小山田の激闘

川原町口の西軍と合し、郭内本一の丁を突貫す。此時大町口亦破れて薩長士の兵進入して川原町口と聯絡し、以て本城を攻撃す。是に於て、桂林寺町口を守れる諏訪社の小山田傳四郎隊は、四面皆敵兵に包まれ、城中に通ずべきなし、已にして郭内に進入せる西軍は、我背後より諏訪社に迫る。隊長小山田傳四郎、性剛猛、一隊に令して銃を棄て、劍を揮ふて敵の列中を突撃せしめ、自ら槍を揮ふて率先して進む。西軍接刃角闘久して遂に圍を破る。傳四郎の子辰治、飛丸に傷つき、將に敵の獲る所とならんとす。傳四郎返戦之を援けて、竟に城中に入る。西軍乃ち諏訪社を占領し、堡壘を増築して日新館を環撃す。日新館は諏訪社と本城の間にある大廈にして、我兵の之に據るもの猶多し。城中亦毫も屈せず、烈射角戦。西軍をして城門に近く能はざらしむ。其兩軍の巨彈銃丸飛で驟雨よりも劇し。此日、諏訪口に我兵の戦死せる者大畧左の如し。

傷兵の死

相澤平右衛門隊	五十嵐利助	青龍士中隊頭	有賀物左衛門	相澤隊	佐々木 武太郎
全	畑 盛藏	全半隊頭	西郷常之進	全小隊頭	北村直衛
全	芳賀辨之進	全	齋藤信八	小山田信四郎隊	清水八三郎
青龍一番士中有賀隊	小田切七郎	青龍一番士中鈴木作右衛門隊	服部儀衣	相澤隊	樋口市三郎
全	岡村慶之助	全	北 忠吉	高倉定之助	山浦八太郎
全	片桐小太八	小隊頭	堀 常彦	福田武八	小林多門
全	代田力之進	相澤隊	小山田辰治	小田武八	麻田兵庫
全	玉木徳之助	全	吉村八郎	安積秀之助	
全	永本信治	横山隊	大竹安次郎		
全	海野小次郎	井深宅右衛門隊			
全	山村多膳		國井惣吉		

# 會津史 卷九終

明治三十年六月廿五日印刷  
明治三十年六月廿五日發行

正價金參拾五錢

著者

福島縣平民  
池内儀八

發行者

福島縣平民  
池内清治郎

印刷者

島保藏  
福島縣若松町大字馬場上五ノ町廿二番地

印刷所

株式會社 秀英舎 第一工場  
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

一手販賣

岩代若松馬場下一ノ町

河野忠三郎

東京市神田區神保町

東京堂

全

八尾新助

全 日本橋區通り壹丁目

大倉孫兵衛

全 京橋區元數寄屋町三丁目

信文堂本店

全 淺草區茅町二丁目

松成堂

全 京橋區南紺屋町

小川寅松

岩代若松一ノ町

信文堂

全

森文作

全

齋藤八四郎

全

荒井書店

全 若松甲賀町

伊藤文華堂

全 若松大町

田中善平

全 若松七日町

博盛館

奧羽其他各縣各地ノ書肆

特約大賣所

賣捌店

會津史

卷十

館書圖京東				
二	二	二	二	二
冊	號	架	函	類





耕雨關塲忠武閣  
相城池內儀八著

鹽澤史

第十卷

明治三十年七月出版

會津史目次

卷十

第八編 保科氏後松平氏

第七章下 容保公の籠城



- (三七) 若松城總進擊
- (三八) 一の堰の前役
- (三九) 一の堰の後役
- (四十) 高田の戦
- (卅一) 城兵の力拒
- (卅二) 會津開城
- (卅三) 會藩の處分
- (卅四) 伊南方面の戦



會津史 卷之十 地内天藏版

第九編 王政復古

第一章 民政局及郡縣

第十編 附錄

第一章 偉人奇士

- (一) 僧覺明
- (二) 僧日什
- (三) 花下兼載
- (四) 岡野平内
- (五) 僧天海
- (六) 山鹿素行
- (七) 廣澤安任
- (八) 澤田名垂
- (九) 野矢常方

第二章 寺社并古跡

- (一) 石部櫻
- (二) 一笑山
- (三) 飯盛山
- (四) 柳津圓藏寺
- (五) 小平瀨

第三章 城壘

- (一) 鶴夕城

會津史卷十目次終

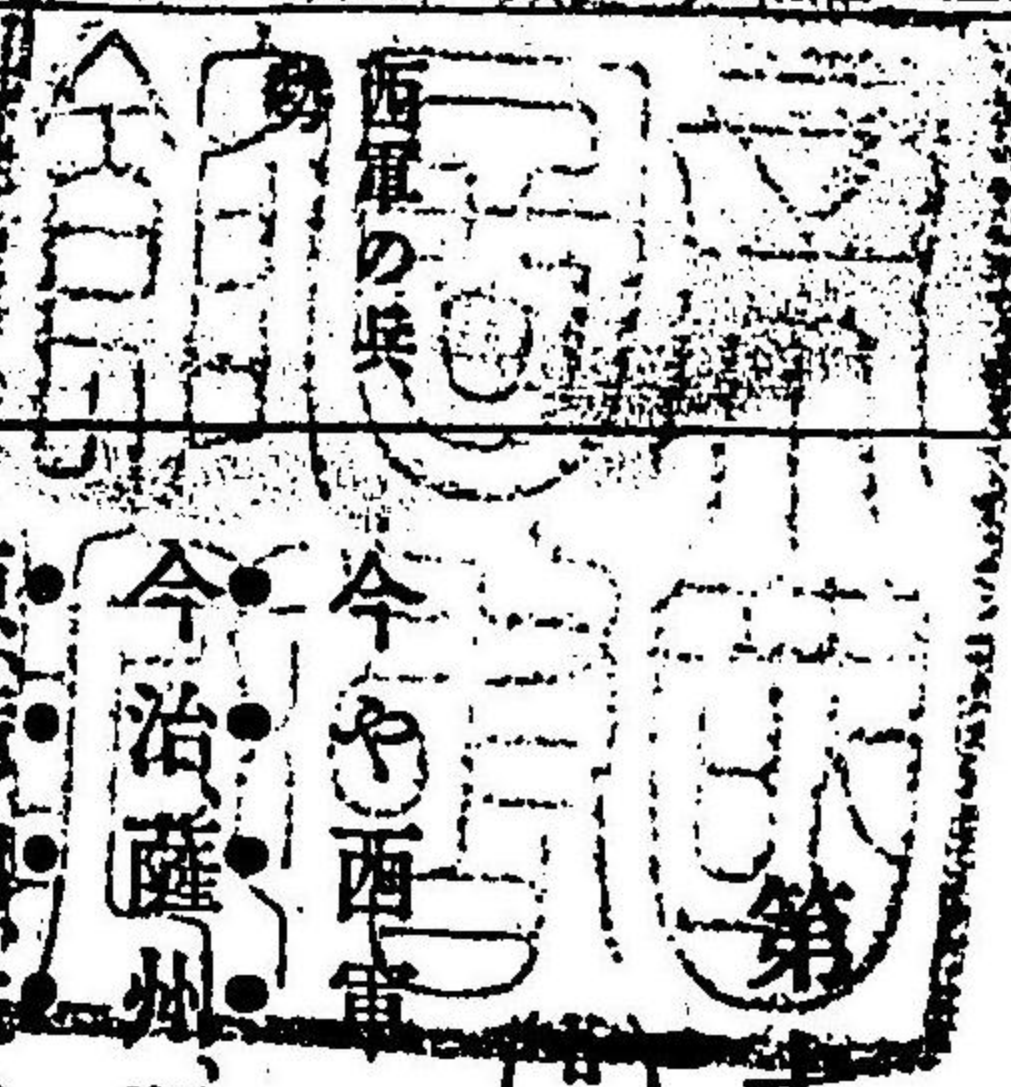
會津史 卷十

耕雨 關場忠武 閱  
相城 池内儀八 著

第七章下 容保公の籠城

(七) 若松城總進撃

西軍の兵  
 今や西軍の四方より會津に入りたるもの越前・黒羽・宇都宮・中津・  
 今治・薩州・肥前・長州・太田原・水戸・小倉・松本・人吉・土州・大垣・米澤・佐土  
 原・備前・大村・飯山・館林・彦根・岩國・松代・藝州・高田・新發田・加賀・尾州等  
 の諸藩にして、兵數凡十餘萬、薩長の兵最も多し、大砲百餘門あり、  
 而して城中には壯士三千、老幼男女二千、大砲五十餘門を備へ、皆  
 死を決し、城と共に國に殉ずるを知て、生を思ふものなし、城外に  
 は猶勇將烈士千數百人、各郡に轉戦して、城中と氣脈を通じ、虚に  
 城中の兵勢



乗じ變に應して、境外に突出せんとす。此時天候漸く寒冷に、期月ならずして積雪道を埋め、朔風膚を刺し、大に征客を困難せしめんとす。是に於て、西軍は高田方面の戦未だ息まず、伊南及び田島方面、東軍の勢再熾すと雖も、之れ等枝葉の戦鬪に汲々として時日を空しくすれば、會城の根本を固むるのみならず、終に風雪の大敵と戦はざるべからざるに至らんを恐れ、全軍一舉して會城を抜き、根本を覆さんと、即ち九月十四日を以て總進撃をなす。是より先き、石筵口の敗るゝや、事急劇にして、若松城外に貯蓄せし糧食彈藥を、城中に運搬するの違なかりしが、其後南方面は西軍甚た妙く、交通を遮斷せらるゝの憂ひなきを以て、糧食を此方面に求めて、搦手より運送し來れり。又、四近の村民は日に餅菓、或は家釀薪炭等を、城中に輸し、城兵は市街の空屋に入り、米、噲、野菜を求めて運びしより、城中糧食乏しからず。然れども、日光口の西

城中の糧食

村民等糧食を城中に獻す

軍城下に逼りてよりは、從來の如くなる能はざりき。是に於て、西軍四面を包圍して、糧道を絶ち、猛撃以て城兵を苦しめんと、即ち十四日午前八時を期し、外郭十六門、其他小田山等、諸口の西軍齊して砲攻を始む。我兵之に應じて、四方の外郭に防禦し、本城の高壘よりは巨彈を連發して之に聲援せり。市街は彈雨東西に飛び、猛火南北に起り、兵馬の傷つくもの算なく、陣營焦土と化すと雖ども、西軍更に屈せず、攻撃益烈し、城中は亦四方よりの彈丸雨の如く、聚り、城壁を貫き、殿樓に破裂し、大樹を挫き、巨石を碎き、硝煙濛々、天守閣を見る能はず、死屍枕藉、鮮血渠と爲る。殊に西は諏訪口、川原町口、融通寺町口、北は甲賀町口、東は小田垣口、南は天神橋口、最も猛烈を極め、兩軍の硝煙天を蔽ふて、日月光なく、砲聲殷々、山河を震動して、地軸を碎く。青龍有泉、壽彦隊、白虎隊、砲兵隊は出て、小田垣口に防ぎ、槍隊は天寧寺町口に出て、角戦す。已にし

西軍三晝三夜全力を以て城の四面より激撃す

城兵城を出て、外郭の各門を守す

て西北の外郭、西軍の占領する所となりしを以て、此諏訪口の戦は前に出づ此方面の城兵多く日新館に據りて血戦し、夜に入りて猶息まず、是より尙二晝夜の間、兩軍倍奮勇、其激戦を持續し、十六日に至る、殊に十五日の如きは最も激烈にして、兩軍大砲の發數三千數百餘なりと云ふ、之我負傷兵城中の病室に於て且よ此戦城中に於ては生駒五兵衛、今泉、隼、右衛門等の諸將、城外に於ては小川、郷、右衛門、佐藤、清七郎等の諸將、戦死し、其他士卒の死するもの多し、

(廿八) 一の堰の前役

此時に當り、城將佐川官兵衛等兵を率ゐて城を出で、高田の東軍を援けて、越後口の西軍を防ぎ、其勢甚だ猛烈なり、將に進んで南方面に突出せんと欲す、是より先き、東軍の一隊は南方面、大内、田嶋等を占領し、後軍の至るを俟ち、亦將に國境を越へて、一は日光を襲ひ、一は間行して白河を襲ひ、以て城下の西軍をして顧慮す

東軍南方面に據る

東軍西軍を一の堰に破る

高田の東軍と城中相連絡す

會兵の死傷

る所あらしめんとす、然れども、西軍は城西の各村に據り、屢々城中との聯絡を絶つとあるを以て、先づ是等の西軍を斥けざるを得ず、因て鹽川熊倉より引き上げた諸隊、城の西南一の堰村に集合せり、一の堰村は飯寺村の隣村にして、其間十數町のみ、九月十五日午後一時、西軍進んで我一の堰に迫る、我軍之れを邀撃し、鶴沼川の河原地に戦ひ、我別隊は突進して飯寺村の西軍を襲ひ、兩軍奮闘、日暮に至る、西軍遂に敵を前後に受け、披靡して退く、小田山上の巨砲も之れが爲に山腹まで却運するに至れり、是より高田方面と城中と相通ずるを得たり、此日、朱雀二番中隊長西郷刑部、同四番小隊長秋月新十郎等、之に死し、藩老一瀬要人、白虎中隊長原早太、誠志隊半隊長樋口友衛等、傷つき、翌日に至り卒に死せり、此日の戦死者大畧左の如し、

家老千百五十五

一瀬要人

朱雀二番中隊長

西郷刑部

全西郷隊

昔川辰之助

- |           |        |         |       |        |
|-----------|--------|---------|-------|--------|
| 白虎中隊長     | 原 早太   | 誠志隊     | 樋口友衛  | 植松辰治   |
| 全 原隊      | 若林八次郎  | 衝鋒隊     | 金井鐵之助 | 高橋茂三郎  |
| 全         | 樋口勇四郎  | 全 半隊長   | 米倉美軒  | 青山嘉次郎  |
| 全         | 鈴木五郎   | 朱雀四番小隊頭 | 秋月新十郎 | 原 興市   |
| 全         | 好川瀧三郎  | 伊與田隊    | 遠山軍治  | 横田大作   |
| 朱雀四番隊     | 伊藤重助   | 遊撃隊     | 上伊南藤吉 | 赤塚三郎   |
| 新練隊土屋鉄之助隊 | 長谷川清四郎 | 安味新吉    | 吉田宗次郎 | 小槍山覺次郎 |
| 全         | 武藤安左衛門 |         |       |        |

(廿九) 一の堰の後役

東軍西軍と再び一の堰に戦ふて走る

十七日味爽、西軍前日の敗軍の耻を雪かんと、大舉して一の堰の我本營を襲ふ、玄武士中隊長伊與田圖書、全小隊長大石彌五兵衛、木本隊半隊長神戶民治、誠志隊半隊長井上恒之助、朱雀四番士中隊長野村勝藏、御軍事方今井十内等奮闘して皆之に死す、東軍遂に衆寡敵せず、且つ戦ひ且つ退き、面川村に至り、結義隊兼遊撃

雨屋村の戦

隊長大竹主計飛丸に中りて仆る、東軍終に雨屋村に退く、時に西軍の進撃甚た急なり、因て朱雀四番附屬隊、砲兵隊等は、雨屋村薬師堂下の丘陵に據り、白虎隊及び西郷隊等は、其堂後の山上に據り、皆死屍を積んで楯となし、銃丸を亂射する數の如く、決死以て西軍を力拒す、西軍竟に火を諸村に放ちて退く、此日の戦死者大畧左の如し、

會兵の死傷

- |        |         |        |             |
|--------|---------|--------|-------------|
| 玄武士中隊長 | 伊與田圖書   | 野村 操   | 茂原岩之助       |
| 全 伊與田隊 | 橋爪 又右衛門 | 山本 權八  | 鳥羽 源太       |
| 全 小隊長  | 田原與五右衛門 | 山室 清治  | 鳥羽 主税       |
| 全 伊與田隊 | 大石彌五兵衛  | 有賀九右衛門 | 朱雀四番寄合西郷刑部隊 |
| 全      | 津川瀧兵衛   | 澤井 周藏  | 全 西郷隊       |
| 全      | 筒井次郎右衛門 | 澤井 友八  | 全 士中小隊長     |
| 全      | 中林三之助   | 清水 源人  | 結義隊         |
| 全      | 梅津 慶    | 樋口多司馬  | 全 渡邊英次郎隊    |
|        |         |        | 早川 清藏       |

重臣内藤上田等の家族其菩提寺に自盡す

- |          |        |          |        |        |
|----------|--------|----------|--------|--------|
| 全 井上哲作隊  | 阿部平助   | 荳野際      | 阿部熊之助  | 淺井源吉   |
| 全 指揮役    | 宗像虎四郎  | 別撰櫻井隊    | 森田辰之助  | 赤道傳之助  |
| 全 渡邊英次郎隊 | 玉木六太郎  | 朱雀四番隊    | 樋口力左衛門 | 石原綱右衛門 |
| 誠志隊半隊長   | 井上恒之助  | 全 木本隊半隊長 | 伊勢喜代治  | 長澤丈吉   |
| 御軍事方     | 今井十内   | 全 木本隊    | 原田次郎   | 山内繁八   |
| 大砲方      | 原 惣五郎  | 全 木本隊    | 神戶民治   | 根津新藏   |
| 御用所密事    | 竹崎 邦助  | 遊撃隊長     | 荳野義弓   | 木村次郎   |
| 白虎隊      | 關原繁太郎  | 遊撃隊      | 大竹主計   | 星 保記   |
| 衛隊       | 五十嵐喜平太 | 別撰       | 津吉新吾   | 杉原良之助  |
| 有賀左司馬隊   | 横田傳九郎  | 天野徳之助    | 天野徳之助  | 平山元之助  |

其他小山、堤、澤、面川等附近の諸村に戦死せるも亦多かりき。

家老内藤介右衛門の父可隱上田八郎右衛門(八百石)の父伊閑年皆古稀に近し初め共に家族を携へ城に入んとす至れば則城門既に閉ちたり於是菩提寺なる面川村泰雲寺にありしが此日敵兵一の堰を破りて來り迫ると聞き慷慨自ら禁せず將に自刃せ

會兵川村の忠死

ん。と。す。可。隱。其。子。婦。築。瀨。氏。に。謂。て。曰。く。信。節。門。が。名。城。を。守。り。て。生。死。未。だ。知。る。可。から。ず。汝。宜。く。他。に。避。て。後。報。を。待。つ。へ。し。死。未。だ。晚。か。ら。ざ。る。な。り。と。築。瀨。氏。肯。か。ず。可。隱。之。を。強。ゆ。築。瀨。氏。已。む。と。を。得。す。其。二。子。を。携。へ。て。出。つ。須。臾。還。り。來。て。曰。く。路。塞。り。如。く。所。を。し。請。ふ。同。く。死。な。ん。と。是。に。於。て。可。隱。先。つ。其。二。孫。を。刺。し。妻。女。五。六。人。伊。閑。は。四。人。と。共。に。列。坐。香。を。焚。き。城。を。拜。し。て。自。刃。す。家。宰。古。川。十。兵。衛。及。從。臣。阿。部。石。野。元。木。等。の。四。人。火。を。放。て。之。に。殉。ふ。時。に。其。僕。某。出。て。戦。況。を。偵。察。し。寺。に。歸。れ。ば。一。室。伏。屍。相。枕。藉。す。る。者。都。て。十。有。八。人。鮮。血。室。中。に。溢。る。中。に。可。憐。な。る。幼。兒。の。一。首。級。あ。り。口。に。菓。子。を。含。み。莞。爾。と。し。て。冥。目。す。之。れ。可。隱。の。兒。孫。英。馬。な。り。僕。乃。ち。寺。僧。に。厚。く。其。葬。祭。を。托。し。亦。劍。に。伏。し。て。死。せ。り。我。軍。の。卒。に。川。村。彦。右。衛。門。と。云。ふ。もの。あ。り。常。に。射。撃。を。好。み。且。つ。銃。工。に。巧。妙。な。り。之。を。以。て。私。財。を。抛。ち。て。小。銃。貳。十。餘。挺。を。製。し。農



民の強壯なるものを多く備ふて、己れの僕となし、常に之を率ゐて射撃を練習せしが、西軍城下に迫り戦急なるに及び、自ら其僕二十餘人を従へて、各地に轉戦殊功を顯はせり。此日、亦白虎隊に附屬して、一の堰の我軍に加はり、血戦して遂に面川村に戦死せり。時に年六十四、實に俠骨の奇男子なりと謂ふべし。

(三十) 高田驛の戦

是より先き、高田附近に於て、東西の兩軍屢々激戦すと雖とも互に勝敗ありて、八十里越、六十里越の兩口の西軍は、未だ若松の西軍と相通ずると能はざりき。是に於て、若松城下の西軍、及び越後口本道、并其左軍は、皆右翼高田方面に向ひて、東軍を撃退せんとす。我軍乃ち高田を本據となし、遙に若松城と相聲援し、南は小山、松の岸等に堡壘を築きて、海老山、胃村等の西軍と相對持し、北は赤留村に胸壁を築きて、八木澤、及び雀林、逆瀬川等の西軍に備へ、

東軍高田驛に據り、越後口西軍と拒く

守備を嚴にして、倅つ、已にして八十里越口の西軍、海老山、胃村の二方より進んで、小山、松の岸の東軍を攻む。東軍力拒し、別隊を以て、沼平に廻らし、西軍の右翼を衝き、遂に之を走らす。是に於て、東軍の兵勢益々振ふ。

水戸長岡の諸隊西軍と走らす

九月十六日、八十里越口の西軍、仁王寺村より突進して、永井野に迫らんとす。報あり、時に佐川官兵衛、永井野に陣し、長岡の諸隊は、隊長山本帶刀、飯寺の戦に擒となりしより、能勢三左衛門を以て隊長となし、永井野に來りて、佐川隊に應援せり。亦我水戸の市川隊等は、其西軍に水戸天狗組の一隊あるを偵知し、之と雌雄を決せんと、自ら相當らんとを乞ひ、長岡隊と共に伏を設けて、西軍の深く重地に入るを待ち、突然左右より砲撃して、大に之を破れり。十八日、西軍の後援、鹽川方面より、續々踵き至り、長州、小倉、松平の兵は、逆瀬川口より、八木澤に、松代、小倉の兵は、鹽野村より、雀林を

西軍の諸隊高田を衝く

經て寺崎村に出で、直ちに高田に親兵及び長州松代の別隊は中田口より新古の兩道に分れて、赤留に向ひしに、東軍其各村に拒戦し、遂に敵する能はずして高田に退き、其市端の堡壘及び其周邊の松林に據り、銃砲を連發して之を拒ぐ、西軍亦土堤に據り、丘陵に登りて猛撃す、我軍の一隊敵の右側に出て、進撃すれば、西軍の別隊亦我右側に廻りて攻撃し、彼れ短兵を以て戦を挑めば、我亦刀を揮ふて接戦す、砲烟天地を蔽ひ、劍火電光を欺く、已にして東軍衆寡敵せず、遂に高田驛を退く、此日、朱雀二番中隊長長谷川勝太郎傷づき、竟に死せり、士卒の死傷も亦多し、

(卅一) 城兵の力拒

若松城は重圍の中に陥りしより既に二旬餘、孤城屹然として、天下の大兵を引受け、内に糧食盡き、外に應援なく、難戰苦闘、刀折れ矢竭き、士卒皆瘡痍に痛む、而して城中に拒くもの、城外に戦ふもの、

會兵の難  
戰苦闘

會兵の悲  
歌慷慨

の。昨。は。東。に。今。は。西。に。或。る。北。に。或。に。南。に。轉。戦。健。闘。戎。裝。を。解。か。ず。し。て。雨。に。沐。し。風。に。櫛。れる。こ。と。數。閱。月。身。軀。爲。に。疲。憊。し。手。足。爲。に。腐。蝕。し。四。方。に。馳。驅。奔。走。し。て。寢。食。す。る。を。得。ざ。り。し。と。屢。々。な。り。之。を。以。て。人。々。遍。に。戰。死。せ。ん。と。を。願。ふ。の。み。然。れ。ど。も。萬。人。一。致。同。心。其。京。都。以。來。國。家。の。非。なる。に。慷慨。し。其。薩。長。の。權。畧。能。く。我。公。の。孤。忠。一。藩。の。苦。節。を。空。く。し。巧。に。地。を。回。へ。位。を。易。へ。た。る。を。痛。恨。し。其。西。軍。の。益。々。驕。傲。なる。に。憤。恚。し。婦。女。老。幼。と。雖。ど。も。皆。劍。戟。を。揮。ひ。銃。砲。を。把。り。堞。壁。は。死。屍。を。以。て。埋。ま。り。溝。渠。は。碧。血。を。以。て。溢。れ。森。林。は。霰。彈。に。裂。け。殿。樓。は。榴。丸。に。碎。く。と。雖。ど。も。猶。頑。として。固。守。せ。り。是。に。於。て。我。藩。公。父。子。を。天。守。閣。下。の。石。礎。の。傍。に。奉。じ。巨。材。を。其。の。上。に。交。架。し。て。彈。丸。の。破。裂。を。避。け。後。殿。の。女。中。諸。將。士。の。妻。孀。は。石。壁。に。依。て。米。苞。を。積。み。敵。彈。を。避。け。て。皆。茲。に。住。し。負。傷。者。の。看。護。糧。食。の。分。配。硝。藥。の。供。給。に。従。事。し。て。忙。し。然。れ。ど。も。城。中。は。皆。確。

城中の防  
備

幼童等城  
上に紙寫  
を飛ばす

城中の慘  
狀

城中の死  
傷

煙○彈○雨○に○慣○れ○時○に○消○日○に○倦○み○た○る○幼○童○等○は○飛○丸○を○侵○し○て○紙○寫○  
を○城○上○に○放○ち○或○は○壁○上○を○競○走○し○或○は○群○童○集○ま○り○擬○戦○の○遊○戯○を○  
な○す○此○時○城○中○に○集○り○た○る○負○傷○者○は○六○百○餘○人○或○は○手○斷○ち○或○は○足○  
碎○け○病○床○に○呻○吟○す○る○も○皆○切○齒○扼○腕○猶○空○拳○を○揮○ふ○て○敵○と○戦○は○ん○  
ど○す○而○し○て○西○軍○の○砲○擊○倍○劇○烈○其○彈○丸○病○室○に○破○裂○し○て○負○傷○者○を○  
粉○碎○せ○し○と○亦○甚○た○多○く○實○に○慘○劇○を○極○め○た○り○今○城○中○に○於○て○西○軍○  
の○巨○彈○に○中○り○て○死○せ○る○も○の○を○舉○ぐ○れ○ば○大○畧○左○の○如○し○

隱居組頭生駒五兵衛(八百石)、白虎隊小隊長中村帶刀(四百石)、井  
深隊半隊長鈴木傳吾、玄武半隊頭鈴木傳内(百石)、町藏奉行秋山  
彦左衛門(百石)、飯沼彙之進(四百五十石)、御軍事奉行添役和田大  
助(百石)、幌役御使番席今泉隼右衛門(二百石)、間瀬新兵衛(三百五  
十石)、生駒隊組頭唐木與市(三百石)、士中半隊長遠山民次郎(百石)、  
赤羽伊織(二百石)、原甲斐八郎(二百石)、富岡久兵衛(百石)、傳習第三

大隊軍目附篠田部、戸枝市郎右衛門、竹俣大吉、中野久五郎、黒河  
内寅三郎、飯田文次、井深金吾、守屋岡右衛門、三村太郎、菊野榮吾、  
大石寅之助、大石彌左衛門、小野田速太、酒井源吾、鈴木八三郎、日  
向内藏之丞、日向政記、三宅初次郎、岩淵初太郎、鈴木久五郎、鈴木  
義衛、關與三郎、雪下豊治、佐瀬房太、澤田治助、齋藤甚左衛門、佐藤  
琢磨、阿部庄左衛門、小淺六三郎、小林幸之進、有賀勝助、小林新吾、  
小松宗彌、小林萬作、小松十郎兵衛、全十之助、福島常三郎、古川小  
左衛門、松本萬吉、松川平吉、松田喜兵衛、松田甫右衛門、増子久五  
郎、石川鐵太郎、佐藤八兵衛、佐野庄司、佐々木森之助、山口新助、山  
浦半吾、山室源次郎、山浦鐵右衛門、全鐵太郎、全鐵三郎、築瀬武四  
郎、黒河内寅三郎、野口量之助、野村監物、梅宮源藏、上野磯次郎、白  
井留之助、鶴飼新八、村上倉松、夏井類助、中村左一郎、南摩節、遠藤  
元之助、遠藤傳次郎、榎倉徳左衛門、椎野常四郎、庄田久右衛門、志

津内氏藏版

會津史 卷之十 十五 地内氏藏版

賀猪熊、佐瀬勝之助、全八郎、小島安兵衛、下條郷助、山浦常之助、山内鐵之助、山口源之助、山口新助、宗像善九郎、高橋只次郎、高津友彌、高橋牧右衛門、高橋留太郎、鹿野左門、鹿目金庫、音永完悦、北澤與吉、後藤四郎兵衛、小關勘助、田部榮吾、辰野小十郎、唐木辰五郎、橋本忠藏、竹本鴨夢、田中善助、吉川常五郎、吉川瀧江、柏谷藤左衛門、金子官藏、渡部熊次郎、渡部七郎治、渡部彌市、太田仙三郎、大宮茂助、大竹佐兵衛、大森勝之進、大原安次郎、戸ノ部左五郎、遠山豊三郎、本郷留之助、本堂新藏、星林之助、星金四郎、羽金利吉、長谷川幸助、橋本忠三、原田忠輔、石川鐵太郎、井形禮助、石山彦太、伊與田丈助、鈴木源内等婦女子は、山川大藏(浩)の妻、築瀬辰治の妻等、枚舉に違あらず、

(卅二) 會津開城

此時に當り、米澤藩は已に西軍に降り、兵を出して若松城下に來

米澤藩兵を若松に

出して西軍に會す

米澤人を以て城兵に降を勧む

藩公の決心

會藩上下の艱難

り會せしが、參謀板垣退助は、城兵の皆死守奮激身を以て社稷に殉せんとするを視、其賊名を負ふて徒らに命を王師の戈に罹りて、捐つるを憾み、米澤を以て大義名分の在る所を明にし、歸順を勧めしむ、米澤乃ち密かに人を遣はし、具に天下の形勢を説き、切に歸順を勧む、然れども城中は已に死を期し亦生を思はず、猥りに敵に屈して羞を天下に貽さんと思ひ、且つ米澤が先きの同盟を輕んじ、奮進我孤軍を援けんとはせず、萎靡逡巡主として西軍に降れるは城中の皆憤恨する所なるを以て、直ちに其歸順を勧むるに従はず、唯其勢を謝して之を返へす、然れども藩公は四面皆其王師なるを思へば、猶頑然弓を引き、益々朝廷の疑を深くし、更に事情通ぜず、聲氣達せざるに至り、反亂の罪を重くして萬世解くに由なきに至らんを恐れ、翻然決する所あり、已にして西軍の攻撃日々猛烈を加へ、萬丸爆裂、火光天に觸れ、城兵の死する

城中降を議す

もの麻の如く而して糧食竭き彈丸欠乏す時漸く初冬の候北風冷雨膚を刺し婦女子は飢寒に迫り士卒は瘡痍に苦み城外の人民亦皆山野に傍徨して露に寝ね雨に沐するもの三旬其家を焼かれ其財を奪はれ尙ほ未だ城下の戦息まざるを以て流離間關歸るを得ず僅に菜根を咬み老幼を助けて難を避け日夜空しく城府を望み黒烟の天に漲るを視砲聲の殷々たるを聞くのみ是に於て藩公米澤己に降り仙台振はず其奥羽同盟の恃む可らずして勢の終に支ふべからざるを知り徒に戦を遷延して士民を苦しましむるを歎じ竊に主將を會して降を議して曰く先きに職を京師に奉ずるや専ら先帝に忠節を盡し數々隆賞を賜はりしに一旦朝議の變ぜしより忽ち伏見の一敗となり痛恨骨に徹し爾來一藩協力上下戮心生を捐て義に趣き必ず恢復の功を奏して我大冤を雪ぎ京都以來國家に盡しし所の赤誠を天朝に

藩公の仁義

達せんと欲せり然るに天下の形勢已に定まり西軍諸藩の兵は赫灼たる錦旗の下に馳驅する王師にして我は孤城外援なきの賊子と呼ばるゝに至れり固より軀を戦陣に抛ち屍を馬革に裹むに丈夫の本懐なりと雖も其王師なりと聞き猶頑冥死を決せば則ち亂臣暴徒と歌はれ徒に耻を後世に傳へられ竟に此臭名ど此羞辱を雪ぐの時をからん之れ實に終生の遺憾なりとす今より順に歸し其聖斷を仰げば死すとも耻づべきなし而して一旦外患あるの日力を朝廷に宣べ効を國家に報せんには則ち正邪曲直身後自ら公論の在るあらんと衆切齒慷慨議決せず公亦曰く汝等皆吾が爲めに血戦し父傷き子死し骨地に積み血流れて河をなすに至る之吾が見るに忍びざる所汝等猶王師と戦を決せんと欲せば吾獨り降らんと諸將嗚咽して之に従ふ藩士秋山左衛門之を聞き憤慨禁せず自ら銃を以て咽を貫きて死する

會士手代  
木秋月等  
米藩の陣  
を助ふる  
降を謀る

會士鈴木  
川村等土  
藩の軍營  
に至り降  
を乞ふ

に至る、

十九日、藩公、手代木直右衛門、秋月、梯次郎、小森一貫齋を遣はし、鹽川なる米藩の陣營に頼りて降を乞はしむ。米將齋藤主計、嫌疑を憚り其使者を縛し、若松なる土軍の本營に送る。參謀板垣乃ち高屋左兵衛をして之に接見せしむ。三使降伏の旨を陳せり。是に於て、三使を一室に幽し、若松在陣の諸參謀相會して其諾否を議す。二十日に至り城中三使の返らざるを以て、鈴木爲輔、川村三助を使者とし、土州の軍夫郭内を徘徊するを誘ひ來り、之を嚮導となす。二使其夫卒に導かれて土の本營に至り、降伏の旨を述べ、左の書を出す、

一書拜呈、寒冷之節、長々御滯陣、益御壯剛可被爲在候半と、欣然之至拜賀候。陳者國情之義に付、歎願之筋有之使者差立申度、彼此心配仕候得共、四方之通路相塞り殆ど當惑罷在候處、幸に昨夕御手之小者之由にて當城へ召連候に付、一と通相尋御陣へ御返申候、尤當手之者兩人附添差出候間、前文之次第御許容被下候

者御手より御一人、此者一同御遣被下度、左候は、直様使者差出可申候間、委細之儀者、同人共より御聽取何分にも宜敷御取被下度奉伏願候、謹言。

九月廿日

是に於て、西軍の參謀等、其降伏の僞りならざるを知り、廿一日、先きの三使を呼び、左の開城の令を示す、

一、明廿二日十字に、大手城門に降旗相立、十二字に大小銃器、楯引渡、尤舶來砲銃計り、其外弓、短火繩筒等は庫に備付の儘引渡相成候様之事、  
一、午後、肥後父子軍門に降伏し、手願相並、右相濟、一先歸城等之父子とも、瀧澤村妙國寺へ歸候致候様之事、  
附番兵として、薩長より一小隊つゝ、同寺へ差出に相成候事、

開城

西軍の參謀  
相謀し  
降を容る

因て高屋左兵衛をして、盡く其五人を城に送り送らしむ。廿二日午前十時、城中降旗を追手門前に建つ。是に於て、西軍の使番各藩の陣營を馳せて諸口の砲撃を停めしむ。全十二時、軍監中

村半次郎軍曹山縣小太郎御使番唯九十九等諸藩の兵を率ゐ、錦旗を擁して整々追手門外の式場に進む、薩州土州の兵、爰に警衛し、軍容凜然たり、已にして手代木、秋月の二人、禮服を着け、刀を脱して之を迎ふ、時に軍監は、秋月等に明廿三日を以て家臣は猪苗代に、傷病者は城南青木村に、婦女子及六十歳以上四歳以下のものは勝手次第に立退くべきとを達せり、暫くありて重臣萱野權兵衛、梶原平馬、出て、次て藩公父子近臣十餘人を従へ、從容禮服を着け出て、着座し、應接懇懇甚た禮節あり、軍監軍曹等亦座を進む、是に於て、藩公自ら左の書を出す、軍曹之を受取りて軍監に渡せり、是に於て公は一時城中に入る、

臣等保、乍恐隨而奉言上候、御臣儀

京都在職中葉

天朝莫大之

鴻恩ながら、万分之微衷も不奉報、其内當正月中於伏見表、暴動之一取旨、意行達

不憚近様奉驚天聽深く奉恐懼候、爾來引續今日迄、遂に奉抗敢王師、併土頑陋之訛誤、今更何と可申上様無御座候、實に不容天地之大罪、措身に無所、人民塗炭之苦を爲受候次第、全臣容保之所致に御座候へ者、此上如何様之大刑被仰付候共、聊御恨不申上候、臣父子并家來死生偏に奉仰

天朝之聖斷、但國民婦女子共に至候而者、元來無知無罪之儀に御座候へ者、一統の御赦免被仰出候様代而奉、款願候、依之從來之諸兵器悉皆奉、蓋上、速に開城、官軍御陣門へ降伏奉、謝罪候、此上萬一も

王政御復古出格之御憐愍を以至仁之御寛典於被仰付者、其加至極難有奉存候、此段大總督府御執事迄、冒萬死奉、款願候、誠惶誠恐頓首再拜、

慶應四年九月

源容保謹上

時に重臣萱野權兵衛等、左の款願書を捧ぐ、

亡國之陪臣、是等隨而奉言上候、老寡君、皆保儀久々、京都に於て奉職罷在、寸功もなく、蒙無量之大眷、萬分の一も未奉報、陸恩剩觸

天隨遂に今日之事體に至り曾保父子城地差上降伏奉謝罪候段畢竟臣等祖  
愚疎暴にして輔導之道を失ひ候儀今更哀訴仕るも却而恐多次第に御座候へ  
共、臣子之情實難堪奉存候間代而臣等發處嚴刑殺下置度伏而奉冀候何卒曾保  
父子等  
至慈寛大之御沙汰候様御取成被成下置度不願忌諱泣血奉祈願候臣等謹  
恐誠惶頓首再拜

- 松平若狭重役 蓋野權兵衛長兼
- 梶原平馬兼兵
- 内藤介右衛門信節
- 原田對馬種實
- 山川大藏重
- 海老名郡治重
- 井深茂右衛門重實
- 田中源之進重
- 倉澤右兵衛重
- 外諸臣共一同願上

藩公城外  
に謹慎す

右終りて藩公父子暗涙を拂ふて三千の死士に訣別し輿に乗じ  
て城を下る其の風姿肅然たり嗟榮枯常なく盛衰一瞬間に轉じ  
風月依然たるも人生實に夢の如し軍曹山縣小太郎騎馬前驅と  
なり薩の一小隊亦之が前導となり土の一小隊後を擁し追手郭  
門より博勞町を過ぎ城北瀧澤村妙國寺に送る西軍の士卒民家  
の營所より之を瞰視して罵り王師たるの尊嚴を傷くるもの多  
し會津藩臣民の之を見るもの悲歌慷慨皆泣かざるものなし暫  
くして一門男女凡そ三十餘人亦出て同寺に徙る時に參政の  
重臣及び在城者の人員兵器員數左の如し

在城の人  
員

- |        |         |        |
|--------|---------|--------|
| 蓋野權兵衛  | 海老名群治   | 小森一貫齋  |
| 梶原平馬   | 井深茂右衛門  | 黒河内傳八  |
| 内藤助右衛門 | 田中源之進   | 神尾織部   |
| 原田對馬   | 倉澤右兵衛   | 井深守之進  |
| 山川大藏   | 手代木直右衛門 | 黒河内秀之丞 |



竹村助兵衛  
佐野源之丞  
野口九郎大夫  
桃澤彦次郎  
吉川尙記  
駒西信藏  
秋月悌次郎  
中村三郎左衛門

清水作右衛門  
春日郡吾  
小森駿馬  
黒河内一八  
筒井茂助  
水島辨治  
小出鉄之助  
大江利右衛門

飯田左門  
中山甚之助  
村岡友之進  
服部鋭次郎  
林房之助  
堀悌助  
小池帶刀

物人数

但軍器局共 一百三十一人	治官士中	一五十七人	病者
一六十八人	役人	一四十二人	士中ノ從僕
一六四十六人	兵卒之外下々迄	二十人	鷹ノ者
一七百六十四人	士中兵隊	一四十六人	他領脱走ノ者
一千六百九人	士中以下 右同斷	一五十七人	奥女中
			婦女子
			惣々五千二百卅五人

城中の兵器

一大砲但彈藥付	五十壹挺	一小砲	二千八百四十五挺
一胴亂	十八箱	一小銃彈藥	二万二千發
一槍	千三百二十筋	一長刀	八十一振
	以上		

(卅三) 會藩の處分

翌二十三日中の兵士は、米軍之を護して、天寧寺町口より猪苗代に退かしめ、傷病者は城南青木村に退き、城中の病院を移して治療せしめ、婦女老幼は城北鹽川に移り、城外の兵千七百餘人亦全所に謹慎せり、翌日午後、城池兵仗盡く西軍に致し、西軍代で皆城に入る。實に明治元年戊辰九月廿四日なり。八月廿三日、石筵口敗れしより、爰に三旬、十万の大兵を孤城にうけて、晝夜激戰奮闘、城中は累々骨を以て山となり、城下は化して焦土となり、其伏見鳥羽の戰より此に至るまで、藩士の國難に殉ずるもの無慮三千餘。

猪苗代謹  
鹽川謹慎

名。刀折れ矢盡きて始めて降る。其武に於て耻つべきなし。國家の  
 危急を憂ひ、皇室の尊榮を謀り、政府の衰弊を救ひ、薩長の驕慢を  
 抑制し、而して一朝朝議變じ、天下の大勢大に定まり、順逆を以て  
 降を説かれ、始めて大義名分のある所を知り、罪を引て、王師に降  
 る。義に於て羞つべきなし。

當時西軍の軍監、市街の各所に榜示して、左の事を諸藩の士卒に  
 布令す。

肥後 若松

會津降伏に付ては君臣共に夫々へ退き居り謹慎之場所も相定まり居候處猥  
 りに會津藩士杯と偽り稱へ候者は斬捨候共不苦候事  
 但官軍に關係之下輩たり共衆而法令を不承者同斷取計同然たるべき事  
 明治元辰九月廿三日  
 會津在陣軍監

而して軍監中村が、東京江戸改稱して東京となる 督府への届書は、降伏當時の  
 事情を詳にせるを以て、左に掲ぐ、

九月十九日夜肥後父子降伏之使者秋月佛次郎手代木直右衛門小森一貫齋軍  
 門へ降伏歎願申出候に付同廿日右之者共御返しに相成同廿二日八字城追手  
 先三ヶ所へ白地に降参と書候旗を相建候に付御使番唯九十九山縣小太郎軍  
 監中村半次郎追手門迄罷越候處城追手内口迄出迎として安藤熊之助鈴木爲  
 輔罷出次に重臣梶原平馬内藤助右衛門軍務局秋月佛次郎大目付清水作右衛  
 門目付野矢貞助右各迎ひとして罷出居候何れも降伏夫より主人父子降参之  
 都合相伺候に付城外へ被罷出候様相違候處右重臣之者兩人一應城中へ立戻  
 り即刻主人父子右重臣共召連れ軍門へ降伏謝罪歎願書持参に付御使番より  
 取次申候續て重臣共之歎願書差出候に付同斷夫より一應主人父子城中へ立  
 戻り三字に退城妙國寺謹慎罷在申候其外器械之義も不殘差出家臣兵隊之義  
 は同廿三日十字より退城猪苗代へ米澤藩護送にて謹慎罷在申候猪苗代警衛  
 彦根大村藩にて仕候其餘病人義は青木村へ立退き謹慎罷在り候同廿四日四  
 字に會津請取に付御使番唯九十九外一人軍監抽者相揃罷越候處追手中門口

迄重役山川大藏軍事奉行小森一貫齋大目付竹村助兵衛器械奉行相馬繁作  
事奉行在竹四郎目付日向信左衛門右出迎ひとして罷出本丸より引渡二之丸  
三九同断首尾よく七字相濟引取申候城障兵之儀は各藩より罷出申候前條戰  
略手負死傷委細之儀は藩々より御届可申上候肥後父子降參の始末參謀衆よ  
り御届可相成筈には候得共不取敢此段早々御届申上候以上

會津在陣軍監

九月廿六日

中村半次郎

東京謹慎  
高田謹愼

明治二年正月猪苗代の兵士は東京に、鹽川の兵士は越後高田藩  
に、謹慎を命せられ、皆其地に護送せらる、先きに開城の議決する  
や、一女子あり、深更月明に乗じ、笄を以て一首の歌を城中の白壁  
に刻して曰く、

明日よりはいつくの人かなかむらん

なれし大城にのこる月影

自ら髪を断て、死者の冥福を祈る、

西軍の將  
奥平我將  
秋月一  
書を送る

時に長將奥平謙輔、其舊友なる我秋月悌次郎に手書を裁して送  
る、其書に曰く、

不相見者八九年矣、何日月不待我也、相神之嘆、人皆有之、想子亦當然也、千里各天  
彼此參商、天命無常、朝不謀夕、遂使我二三兄弟、不好是謀、我則隨之、命也、將亦何言、  
不佞以歳之六月、承乏帷帳、從事長岡、其七月、自柏崎海路、襲樂坂、持其餘鋒、以臨米  
澤、米澤君臣如崩、厥角本廳、使介相通、以試晉國之暇、整酒藉相贈、以傲羊陸之風流、  
不料王師自東者、先祖生以著其懷、悵悵悵悵、夫貴國爲幕府亦至矣、無貴國則德  
川氏之鬼、其不祭、臣各爲其主、職也、季布之節、雖不及、韓張之先見、比之丁公、則有  
餘矣、貴國似之、且也大東之氣、不振、未有如今日之甚也、所謂朝歌夜紵、爲秦宮人、  
國皆有之、方今求所謂不義之義者、亦不可得、况眞節義乎、是乃盡天子之所以當宇  
長嘆、而外夷之所以鼓舌失笑也、詩曰、他山之石、可以磨玉、天下無石久矣、今貴國  
頑然爲石、使天下各磨玉、則貴國不獨爲晉幕府、其節有大造于海內、亦大矣、則弊  
邑亦與彼其屬矣、猶恨執心不一、守城不丁、使古英雄、島居元忠、聲稱擅其義、名不  
佞竊爲神州、悲之、雖然、既往不咎、遂事不說、所願者、盡天子以楚莊之心、封之、故國使  
托其臣、民他日、邊國有警、被堅執銳、爲士卒之先、以其所以報德、川氏者、致之朝廷、以  
表其自新之心、亦一美事也、足下是風之、吾國有落合生者、文謙士也、乃足下之來、

會津 卷之十一 三十一 池内日藏版

持其文以請是正者今猶好在學似益進不佞之歸有日矣貴城咫尺匹如万里前途猶遠保重保重不一源君正頓首。

被賜客月念四日之書審讀數次且悵且愧僕亡國遺孽謝劣無似將何辭以答焉雖然辱足下之厚誼如不終背之則老寒君之寸丹無所自而僕之情事無所伸也忘故覆髮之罪敢陳其一二願足下亮之夫老寒君之素志固在天朝不獨爲故幕府也僕昔年西遊抵貴藩佐久間佐兵衛子日以尊王室恭順幕府爲至的戊年之夏小幡邸監持藩公上幕府書來其書大意曰各港閉鎖末也官民一和本也獎邑之所以從之者專爲是也吁貴藩之所議先獲其心僕故曰尊王室及所以恭順幕府亦所尊王室弊邑雖至親豈獨阿私德川氏哉夫一德川氏也貴藩幕府視之獎邑宗家視之故情義之所係不無厚薄此亦自然之勢也來書曰以所以報德川氏者致之朝廷官之懸篤非足下豈能如此讀至于此泣然流涕徹足下僕亦豈盡言夫視藩子之將入井奔說教之者人情也况宗家之危急豈忍坐視然合爾輩者凶矣獎邑終不得在右宗家德川氏亦終不得統率諸侯猶已爾之見不可救藥也故獎邑絕望宗家專選奉王室且也伏水之一舉人之所皆知故不復費焉老寒君東歸思過遣使於列藩謝罪於朝廷屏息待罪月餘日何料道路梗塞至情不達及大兵壓境四面受敵有一

二殘人奪我貨財害我士女曾無王師吊恤之意故盡我甲兵以應之亦武門之常事已方孤城受圍之日背城借一兵食雖少猶以支歲月及聞米藩人之言始知王師問罪君臣恐懼乃投戈乞降奉還土地納兵器待罪僻鄉獎邑無他之意於是可見已苟其不然聞道猶迷冥頑決死則爲王室之罪人而終天之憾不可解焉是以不爲死守引罪呼天亦君子之所宜動心也嗚呼包胥哭庭之使未歸而鄭伯率羊之辱已見時勢至此復何言獎邑之罪載在朝典斧鉞之誅所甘受也聖天子若思先帝之殊遇不忘祖先之勤勞而使獎邑比小諸侯不絕其先祀則邊海有事之日豈不腆之兵賦爲王先驅果如足下之所稱則不獨獎邑之被其澤實天下之至幸也雖然方今賊視我者將食其肉踐其皮不然袖手傍觀如不知者故生死肉骨非貴藩而難獎邑殘兵雖羸鼓舞而訓練之猶可用也國民頑愚不移今已決然入死地待斧鉞是乃顯然日新之機也於此時聖裁寬宏不奪其故國則其臣民出於望外忠勇剛武倍奮於前日必矣而知其機者非足下而誰傳曰君子知免小人不知今若一切罪而殺之則人或將曰君引罪如此臣引罪如此然聖裁一何嚴也世之懷二心者將環城自守以獎邑爲戒僕之所恐者實在于此欲私告於大方君子未得其人會禁高明惠顧故唐突左右敢布腹心宗社論胥方寸已亂言無次序願足下裁之候屬傾寒爲國珍攝不一

行無與兮、歸無家、國破孤城、亂雀鴉、治不奏、功戰無、略微臣有、罪亦何、嗚呼、聞說天皇  
元聖明、我公貫日發、至誠恩賜、御書當非、遠幾度、額手望京城、懷之恩之夕、蓬萊  
瀟胸、應淚沾巾、風漸漸兮、雪慘慘、何地置君、又置親。

又囚中の作に曰く、

京洛此時合獻謀、請居伏病北蝦州、死埋枯骨還非罪、唐太以南是帝州。

秋月復書  
一藩の精  
神を明に

梯次郎名は胤永、韋軒と號し、京都以來藩公に従ひ、常に樞機に參  
し、苦心劃策する所ありたり、其書を得るに及び、乃ち復書し、之に  
一詩を添ふ、

會士小笠  
原の慷慨

藩士小笠原勝修は午橋と號し、性質洒々、落々物に拘らず、而して  
學博く才多し、又囚中の作あり

曉收原上骨、夜投原上村、村空無鷄犬、愁懷不可言、君辱不能死、  
國亡不能存、草間猶求活、愧彼泉下魂。

又囚中歲晚の作に曰く、

歲月崢嶸髮欲暈、悠悠心事奈蹉跎、南冠空灑新亭淚、一片山河落日多。

曾て外船の我海岸を窺ふや、幕府會藩を以て之が警備をなす時  
に午橋詩あり曰く、

巨艦如山不足驚、此行欲察賊奴情、海風颯々吹毛髮、腰下雙刀鳴有聲。

會士武井  
の悲歌

藩士武井寛平、柯亭と號し、血性節義の士、各地に轉戦す、其伊北方  
面に戦ひたるとき、營中作あり、

豈耐西軍毒我民、銜枚半夜躡隣岫、羸將拙計君休笑、元是吟花嚼月人。

會士安部  
井の憤激

我士安部井政治、盡忠悲歌の士、會津城陥るや、脱して函館に趣き、  
遂に戦死す、戊辰歲晚の作あり、

海潮到枕欲明天、感慨撫胸獨不眠、一劍未酬亡國恨、北辰星下追殘年、  
交友回頭半委塵、豈圖斯地獨迎春、燈前暗灑幽懷淚、不是尋常送歲人。

會士萱野  
の至誠

國老萱野權兵衛長修、亦純義至誠の烈士なり、其恭順と決するや、  
自ら佐幕の謀主なりと稱し、一藩上下の罪を負ふて、朝裁を俟つ、  
朝廷之に死を賜ふ、今や碑を若松七日町招魂社内に建て、其忠魂

藩公父子  
謹慎

義魄を弔す、

十二月容保公亦東京に送られ、次て備前池田侯に永預けとなり、嗣子喜徳公は久留米有馬侯に永預けとなる、當時兩公作あり、

容保公

自古英雄多敵奇、胡爲大樹乘連枝、斷腸三顧許身日、揮淚南柯入夢時、  
万死報恩志未遂、半途墜業恨何涯、暗知氣運推移去、月黑梧桐暗子規、

喜徳公

決意三旬守孤城、豈圖低首降西兵、自歎見義不能死、俯入陣塵聞雁聲、

容保父子  
天恩に浴す

天皇聖明至仁、明治五年一月、特旨を以て兩公の罪を恩免せられ、尋て容保公は從五位に叙し、正三位に進み、廿六年十一月病を以て東京に薨す、忠誠靈神と謚す、

容大公生  
斗南藩賜封

是より先き、明治二年二月、容保公の長子、容大公、城東御薬園に生る、次て東京に移らる、五月、朝廷特旨の恩典を以て、陸奥斗南三万

喜徳公の  
高風

石を賜ひ、其祀を繼がしむ、全三年十月、藩士を封地に移す、而して喜徳公水戸の支族嗣絶ゆるを以て、其實家に歸り、其家を繼ぎ、明治廿四年、病を以て卒せり、

(卅四) 伊南方面の戦

東軍八十  
里越方面  
に勢を逞  
ふす

是より先き、會將佐川官兵衛、高田に破れたりと雖も、勢少しも屈せず、更に殘兵を招集し、其回復を謀らんと、先づ八十里越口伊北方面に據り、各地を畧し、將に西軍の背後を衝かんと欲し、會將武井寛平等は九月廿四日、大沼郡大蘆村に西軍と戦ひて之を破る、是より先き、城南雨屋附近に據りたる砲兵隊等は、大川を渡り大内峠に至りて其險要を扼し、此時迄大内の險を守れる、一番砲兵隊は隊長大沼城之助代りて高橋某之を率ゐ、進んで伊南方面に向ひ、六十里越方面西軍を撃ち、佐川隊と連絡を通じて進む、九月廿三日、高遠の兵を大蘆村に襲ひて之を破り、進みて飯山の兵を

東軍六十  
里越方面  
に威を震  
ふ

木伏村に攻めて之を走らす、西軍大に怖れ瀧原に退き、急を入小屋の加軍に告ぐ、東軍更に進で入小屋を撃つ、加軍之を逆撃し、又大に敗れて會津の國境に退く、而して高橋隊は六十里越口を猛進して、西軍の別隊を小林村に追撃す、西軍披靡、輜重を棄て、走り、將に國境外に遁れんとす、是に於て、東軍勢大に振ふ、時に城中より使者來りて降に就く、藩公の手書を得、泣血命を奉ず、乃ち隊長高橋、戎服の上に木綿の和服を着け、裾を擧げて獨り、山道を跋渉して敵陣に趣き、九月廿四日を以て我一藩歸順せしとを告げ、兵器の收受を請ひ、諸隊と共に鹽川に至りて謹慎せり、

庄内藩の義勇

是より先き、庄内藩、會津と共に西軍の向ふ所となりしが、膝を薩長に屈するを肯せず、銳を蓄へ勢を養ひて、西軍を國の四境に防ぐ、藩主酒井忠篤、忠勇にして節義に富み、よく心を兵事に用ゐ、其臣松平了恒、酒井久厚、酒井兵部、松平權十郎、松宮源太夫、俣野市郎

庄内藩降伏

右衛門、長阪右近助等、皆雄武義烈の士、一方に將となり、我藩兵亦越後方面より趣き援ひ、屢々西軍を破り、兵威大に振ひたりしが、米澤藩已に降り、奥羽同盟瓦解せると聞き、九月十七日、歸順に決し、歎願書を出し、廿六日、遂に鶴岡城を開き、兵士と共に城外に退きて謝罪天裁を俟てり、

奥羽北越諸侯降伏

此時會津より庄内に入りたる松平定敬、板倉勝靜、小笠原長行等の諸侯同日官軍に降れり、仙臺藩亦國論一變、謝罪歸順に決し、九月十五日を以て、謝罪の歎願書を西軍に捧げて降れり、是より先き、牧野忠訓、及び内藤政養、安藤信正、本多忠紀、南部利剛、丹羽長國、阿部正靜、田村邦榮、水野知泉、織田信敏、松平信庸、岩城隆邦等、奥羽北越諸藩主皆降り、全く平定に歸せり、

第九編 天政復古

第一章 民政局及郡縣

若松市の繁盛

若松城已に陥り、四方に轉戦せし所の西軍、皆城下に集り、幾万の市民亦亂定まれりと聞き、漸く歸り來り、慘憺たる残趾焦土、忽ち雜踏熱鬧の地となり、俄に家屋を建て、店舗を開き、産を修めんに汲々たり、

市民の傷産

然れども此戦亂に於て、市民は皆財産を蕩盡せざるものなく、巨商豪家と雖ども、亦家に擔石なく、纔に勞力して衣食するに至れり、當時は軍紀軍律今日の如く嚴正ならざるを以て、夫卒は民家に入り、分捕と稱して其家具財産を劫奪し、而して運送に便ならざるものは店舗を開きて之を市民に賣却し、貴重の器物其他運搬し易きものは、日々駄馬を以て郷里に送るに至る、市民の歸順



と聞きて、其故居に歸り、家屋貨財、已れの所有なるを證明して之を哀求するも、彼等は戰勝の威を藉りて、却て之を鞭撻し、其家人を使役して財貨を運ばしむるに至る、嗚呼孰か之を弔民の王師と謂はんや、

民政局

已にして西軍の諸隊、漸く凱旋し、會津地方は若松坂下野澤に民政局を設けて、萬般の施政戰後の善後策を取る、時の若松民政局長を林鐵之丞と云ひ、能く民を撫し仁を布けり、

廢藩置縣

是より先き、慶應三年十月十四日、徳川將軍大政を奉還せしより、政權朝廷に歸し、次て十二月九日、若倉具親、大久保利通等、從來の施政に大改革を斷行して、朝廷の面目を一新し、明治元年正月を以て、亦從來の官職を改め、太政官代を置き、三職八局を設け、二月越前尾張及ひ薩長土肥の六藩、建議して開國の時宜に適ふを説く、是より朝廷全然開國主義となり、好信交通の事に意を注かる、

閏四月、三職八局を廢し、太政官の下に議政、行政、神祇、會計、軍務、外國、刑法の七官を置き、地方を分て府藩縣となせり、即ち朝廷及舊幕府の所領を以て、府縣となし、諸侯の領地を以て藩となし、府縣には知事を置き、藩は舊に仍る、二年七月、神祇、太政の二官、及び民部、大藏、兵部、刑部、宮内外務の六省を改め置く、

王政の隆興

十月、天皇江戸に遷らせ給ひ、江戸を東京と稱し、永く皇居の地と定め、政府を移されたり、二年正月、全國の諸藩、奏して封土を奉還せんを乞ふ、勅して之を許し、藩主を藩知事と爲し、現石の十分の一を賜て、世祿と爲し、其重臣を舉て參事となし、施政を助けしむ、

若松縣

我若松は民政局を廢し、朝廷の領地となれるを以て、二年二月、縣となし、四條隆平を知事に任じ、來り治めしむ、時に中村義實、大參事となり、安部井馨根、少參事となる、隆平力めて仁政を施し、民望を得たり、嘗て一首を詠ず、

亂れたる世をし鎮めてあしはらの

國豊かなる神風そふく

次て隆平罷め、鷲尾隆聚縣知事に任じ、若松市戦後衰弊の回復を謀る。

四年七月、全國各藩知事を東京に召し、諭して其職を罷め、皆府縣の制となし、府に知事、縣に令を置く、是に於て、封建の遺風全く廢せられて、郡縣の制大成す、鎌倉政府封建の制を馴致せしより、爰に七百年、始めて郡縣の治に復し、之より中央政府の權力始めて重く、朝威海の内外に震ふに至る。

若松縣を廢して福島縣に合す

若松縣令鷲尾隆聚罷め、澤簡德縣令に任じ來り治す、九年、若松縣を廢して、福島縣に合す、山吉盛典、三島通庸、赤司欽一、折田平内、山田信道、渡邊清、日下義雄、原保太郎、小倉信近等、前後其縣知事となり、今日に至る。

第十編 附録

第一章 偉人奇士

(一) 僧覺明

覺明の幼時

覺明は、孤峯と號し、會津の人なり、七歳にして出家の志あり、十九にして落髮し、天台教を學びて、奥義を究む、年二十六にして、紀州鷲峰の開山法燈に就き、教を受くると數年、後諸國に遊歴す、又常に山谷の中に在りて座禪し、以て哲理を練る、應長元年、商船に乗りて元支那に入り、江湖に遊び、名僧に謁し、護國寺にて佛眼禪師の塔を弔ふて歸朝せり、其後出雲國に草庵を作り住せしに、不日に禪僧雲の如く集り來れり、元弘三年、後醍醐天皇伯耆國船上山に臨幸ありし時、覺明を召して戒法を受け給ひしに、大に叡慮に協ひ、雲樹國濟國師の號と、天長雲樹興聖寺の寺額を賜ふ、後、紀伊

覺明支那に遊ぶ

後醍醐帝覺明を信依す

覺明尊氏  
の招聘に  
應ぜず

後村上帝  
覺明に三  
光國師の  
號を賜ふ

覺明寂す

國鷲峯及京都の妙光寺に移住す、足利尊氏兄弟、覺明の徳を崇敬し、一寺を營み、請ひて開山せんとす、覺明其賊焰を恣にするを惡み、固く之を拒み、宵遁れて南朝に奔れり、後再び後村上天皇其義の詔を蒙り、戒法を授け奉りしかば、三光國師の號を加へ賜ふのみならず、和泉國大鳥郡高石邑に一寺を開き、大雄と號してこゝに住持たらしめ、聖恩甚渥かりければ、師も亦遠く去るに忍ひず、此寺を以て終焉の地となし、正平十六年五月、歳九十一にして寂す、嗚乎、國師兩朝の歸依する所となり、深く其恩遇に感し、尊氏兄弟招けども應ぜず、節操氷雪を凌ぎ、緇林中古今其儔匹を見ず、當時世家の播紳又數國を領するの武將、朝に南山に歸順して榮爵を得、夕に北庭に反降して私利を謀り、覩然として恥を知らざるもの、師の一喝に逢ひなば、豈夫れ愧死せざるを得んや、宗良親王の撰給ふ新葉和歌集釋教部に、

三光國師入滅の時よみ侍る 妙光寺内大臣

あまを舟のりまゐる人はさきたちつ

くるしき海を誰かわたさん

とあり、妙光寺内大臣は文貞公贈太政大臣藤原師賢の長子家賢なり、又四條權中納言隆俊隆資の四子寄進狀あり左の如し、

河内國島頭庄内吉近名、事爲故國師御菩提料所、可寄進、當寺三光庵之由比丘尼明魏申置候早、可有御管領候恐々敬白

十月二日 隆俊花押

大雄禪寺方丈侍者御中

これ等によりても師の高徳を崇信する人の大方ならさりしを想ふべし、然るに世の人此國師を知るもの鮮なし、依て之を偉人奇士の首めに載せて以て世人に知らしむ、

(二) 僧日什

日什の生

日什台教を學ぶ

日什晩年法華に歸依す

日什一派を創立す

日什寂す

日什派の盛況

僧日什は、會津瀧澤村の人なり、父を石塚某と云ふ、正和三年四月其母一箕山八幡宮に祈願し、其歸途社前に生る、幼にして孤となり、七歳出塵の志あり、遂に薙髮して僧となり、玄妙と稱し、比叡山に登り、台教の奥秘を極め、兼て諸宗に通ぜり、滿山の僧侶尊重せざるなし、次て郷里に歸り、羽黒山東光寺に住し、講筵を開く、遠近より來學するもの常に五百餘人、其名朝野に著る、六十八歳の時始めて開悟する所ありて、法華に歸依し、名を日什と改め、後圓融帝永徳元年、京師に趣き、一派の立義を奏し、勅許を得て、洛陽妙滿寺、遠州玄妙寺、及び若松に妙法寺を開基す、之を一派の三大本寺と稱し、他寺の管轄を受けず、日什二位僧都となり、次で寺を弟子日仁、日義、日妙に附屬し、明徳三年二月、妙法寺に寂す、歳七十九、瀧澤村に葬る、後寺を建て、妙國寺と云ふ、是より日什が弟子、専ら此宗派を弘通し、信ずるもの頗る多く、武總二州の間に七百餘ヶ

寺を建立するに至れり、

(三) 花下兼載

兼載の幼時

兼載足利學校に學ぶ

兼載宗祇を師とす

兼載朝廷に侍講す

左内流浪す

花下兼載は、會津猪苗代の人なり、父は三浦義明二十三世、猪苗代盛實と云ふ、連歌を以て著る、兼載幼にして穎異、髮を落して僧となり、若松自在院に入り、常に和歌を好む、後下野足利學校に入り、文籍を涉獵し、應仁、文明の頃、京都に至り、宗祇を師とし、終に宗祇の讓を受け、宗匠となり、花下の稱を許され、耕閑齋と號し、屢々禁裡に召され、源氏物語等を侍講し、法橋に叙せらる、後岩城に寓せしが、古河公方の招きに應じ、數年の後、永正七年六月、下總古河に死す、年五十九、野渡村萬福寺に葬る、著はす所園塵集二卷あり、

(四) 岡野左内

岡野左内は、蒲生氏郷の臣なり、氏郷卒し子秀行宇都宮に還るの時、去て上杉景勝に仕ふ、嘗て伊達政宗と双を交へて、相戦へり、上

左内浦生  
氏に仕へ  
猪苗代を  
領す

左内の時  
蓄

左内の潔  
清

左内貯金  
を分散す

杉氏米澤に移るや、左内滅封せられ、仕を辭して流浪す。政宗之を聞き、三萬石を以て之を招く、肯せず、再ひ蒲生氏に仕へて一萬石を領し、猪苗代城に居る。左内節儉にして家に數萬金を貯へ、毎月金銀財寶を出し、室内に充て、其間に起臥して樂む、衆人皆之を鄙む、一日友人の爭鬪するを聞き、愛する所の刀正宗を提げて、之に赴き、其間に居て和解し、三日を経て毫も貨寶を問はず、歸りて徐に之を收む、衆人皆感服せり、又雇僕あり、黄金一枚を有す、左内賞するに黄金十枚を以てして曰はく、士金をければ戰に臨みて、功を立て難し、汝人の奴となりて、金を貯ふ、心を用ふるごと、當に此の如くなるべしと、之を賞す、慶長五年、關ヶ原の役に永樂錢一萬貫を上杉景勝に獻じて軍資を助け、又金を其友凡數千人に分てり、後病みて將に死なんとする時、金三萬兩と正宗の刀一口を蒲生忠郷に、金三千兩と名刀を忠郷の弟忠知に獻じて曰く、是皆俸

の餘なりと、又其友に數千金を分てりと云ふ、

(五) 僧天海

天海の幼  
時

天海の勤  
學

武田信玄  
天海を重  
す

徳川家康  
天海を招  
きて天下  
の施設を  
顧問す

天海は、會津高田の人にして、父を船本道光と云ふ、天文十七年正月朔旦生る、永祿三年、龍興寺舜幸を師とし、十三歳にて僧となり、佛教を學び、後諸國の名師に就きて業を受け、識大に進む、其言論明瞭にして、音聲鐘磬を叩くが如し、人皆之を重ず、天正年間、甲斐の武田信玄、天台宗の僧三千人を延きて、議論せしむ、天海之が講主となり、其言論辯舌、衆をして嘆服せしむ、信玄其學博く才秀づるを喜び、益之を重ぜり、是より名朝野に聞ゆ、後郷に歸り、彌斯道を究め、信者益多きを加ふ、其後徳川家康其徳を慕ひ、之を招きて己の顧問となす、天海俊邁にして、經世の才あり、徳川氏の天下を掌握し、國家を大成し、其子孫をして永く海内に號令せしむるを得たるもの、天海興りて力あり、其梵鐘の銘に由て、大阪を挑發せ

後陽成帝 依す 天海を信  
天海上野 寛永寺を 開く  
天海寂し 慈眼大師 と謚す

素行幼時 羅山を師 とす

しが如き、日光廟を建て、建築宏壯、輪奐の美を盡したるか如き、諸侯の妻孥を江戸に在らしめたるが如き、外様諸侯をして、大政に容喙せしめざるが如き、東叡山に親王を迎へたるが如き、皆天海の勧めし所なりと云ふ、後陽成天皇嘗て詔して法要を問はせ給ひしに、詳かに奉答す、上皇大に悦び、擢で僧正となす、寛永二年、二代將軍秀忠、東叡山寛永寺を建て、天海を以て開山とす、三代將軍家光も亦之を敬愛せり、寛永二十年十月二日寂す、慈眼大師と謚せらる、

(六) 山鹿素行

山鹿素行は、通稱を甚五左衛門と云ふ、會津の人なり、保科正之と同時の人六歳にして學に就き、九歳江戸に出て、林羅山の門に入り、十一歳にして人の爲めに小學論語等の書を講ず、其辯論殆んど老成人の如し、十二歳にして羅山經書を講ずるに見臺を用ゐるとを許

素行兵書を學ぶ

素行一派の說を創む

素行罪を得て赤穂に流さる 赤穂侯素行を重んず 素行教化を施して 恩人に酬ふ

せり、又十六歳にして北條氏長に従ひ、兵書を學び、五年にして諸弟子其上に出づるものなし、二十二歳にして小幡家の秘傳を受けしより、素行に従ひ業を受くるもの、其數二百餘人、識見甚た高く、才能亦凡ならず、別に一家の說を立て、聖經要錄なる書を著はして、曾子以下を歴詆し、程朱を排斥す、當時江戸の由井正雪、會津の山崎闇齋、土佐の野中兼山、備中の熊澤蕃山と並び稱せらる、然れども其過激の說を立てたるを以て、罪を獲て播磨の赤穂に流され、後赦されて江戸に歸る、赤穂侯淺野長友親ら弟子となり、之を優遇せしを以て、素行其厚志に感じ、竊に侯に謂て曰く、天下無事死を以て舊恩を報ゆる能はず、而れども必ず非常の境遇に際し、大に酬ゆるあらん、臣聖道と兵法とを以て、侯の諸臣に教へ、我が志を盡さんとす、侯大に喜ぶ、其後殆ど五十年にして、其子赤穂侯長矩死を賜ひて國除せられしかば、其遺臣四十七人、果して

一致協力苦心の末吉良氏を殺して君の讎を復せり素行性質英  
適にして記憶強く且至誠の人なり其人の爲に謀りて利害得失  
を陳べ事に臨みて果斷なりき

(七) 廣澤安任

安任の少  
壯  
安任天下  
を周遊し  
て名士と  
交る

幕末國事多難の際に當り天下幾多の志士傑物中精識偉度天下  
の形勢を洞達し氣宇宏濶裕に一世を擔當するもの一は佐久間  
象山にして一は廣澤安任なり安任は會津の人富次郎と稱す幼  
より剛健稍長ずるに及びて疎放小事に拘らず一切の毀譽を度  
外に付し讀書講學論議往往人の意表に出づ家素より微祿貧困  
にして殆ど給するに能はず年少教を藩士宗川茂に受け勤勉衆  
に超え中年笈を負て昌平齋に遊ぶ而して區々章句の間に拘泥  
するを好まず意を實學に留め慨然經世の志あり安任學成り東  
西を遊歴し交を四方の名士に結び曾て水戸に至り會澤憇齋藤

安任早く  
より開國  
主義を取  
る

安任朝廷  
の公卿に  
世界の大  
勢を説き  
開港を勸  
む

田東湖を訪ひ又藤森弘菴の門を叩き幕府の末造箱館の鎮臺加  
須屋筑州の聘に應じ謀議する所あり堀織部正の外國奉行たる  
や交を結び外人と往來し歐米各國富強の由て來る所を察し早  
く鎖國の非計なるを悟り開港の説を固執し世人の忌諱に觸る  
る所甚た多し藩主容保公京師の守護職となるに及び佐久間象  
山と謀る所多く往來日に繁し象山の暗殺せらるゝや鳴罪の檄  
中に近頃會津人と交り公卿を誘惑し開港を主張するの語あり  
所謂會津人とは山本覺馬及び安任を指すなり兵庫開港の議起  
るや詔して十万石以上諸藩の名士を禁中に召し其利害を討論  
せしむ議者多く鎖國開戦を主張し廷議殆ど之に傾かんとす安  
任之を聞き慨然病を力めて昇殿し宇内の大勢を歴陳し鎖國攘  
夷の非を説き大に人心を感動し三港の詔勅の如き與りて力あ  
り又藩兵の組織を改革して洋式を採用し砲銃を購求し藩士の

安任戊辰の亂鐵窓に呻吟す

子弟を撰拔して海外及び長崎に遊學せしめたるか如き安任の功亦少からず其京師に駐ると七年其間東奔西走毎に藩公を輔佐し上は親皇關白及公卿諸侯より下は天下の名士と相往來し大に國事に盡瘁せり

戊辰の亂起るや海内相聞き外寇の乘ずる所とならんを憂へ獨り江戸に留り藩公の爲に謝罪恭順に周旋せしが成らず却て獄中に投ぜられ將に斬刑に處せられんとして纒に免かれ或は重病に罹り死に頻せること屢なり或は獄吏の苛責凌辱を蒙り間關苦境具に至る亂後漸く免れて獄を出て斗南に移りて藩政に與かる時に舊會津藩士は戊辰の戰亂に四隣を懼伏せし威名も歴代豊富なりし食祿も一朝にして地に落ち幾世住み馴れし若松を退去して陸奥の極北なる斗南に移れるを以て昨日まで二十八万石の雄藩たりしもの今日は僅に三万石の小祿に急變し

安任藩産を以て國を利せんと謀る

上下の困難慘狀甚しく榮華豪壯を夢みし過去の樂み忽然醒めで今は荒野を拓き瘠地を耕して漸く口鉢の飢寒を凌かざる可からざるに至れり之を以て不平を抱きて罵々するものあり或は憤慨して暴舉をなさんとするものありて斗南藩の施政甚た困難なりき然るに安任病羸の身を以て大參事山川浩等を助け群疑を解き衆難を排して人心を鎮め卒に無事なるを得たり廢藩の事決するに及びて安任幡然として曰く吾れ國家を誤る實に多し亡國の士は以て存を謀るべからず范蠡と其迹を異にして其志を追はんと遂に望を青雲仕途に絶ち荒野の遺利を拾ひ未だ興起せざる牧畜の先導者と爲り間接には國家を利し直接には舊藩士の産を助けんと欲す然れども安任赤貧洗ふが如くをるを以て苦辛經營の末僅少の資本を得先づ恐山の硫黃採掘を創め廣原の開墾に勵み漸く利潤を得遂に歐人二人を聘して



安任一大牧場を起す

安任朝廷の招きに應ぜず

安任歿す

安任の友南摩羽峯の祭文

顧問に任じ一大牧場を寒地に拓くに至れり其辛苦經營實に二十餘年未だ曾て一日も懈らず朝廷其賢を知り屢々徵せども起たず明治九年車駕東巡天皇安任を召し見大に其事業に勵精するを嘉賞せらる供奉せる大久保甲東安任の廬を訪ひ切に己れの先輩として朝廷に推舉せんじす安任辭して從はず自ら牧老人と號し間餘詩を賦し書を友とし以て自ら樂む二十四年二月病て歿す年六十三我會士南摩羽峯安任と友とし善し其死を聞き痛悼之を祭る其文に曰く

祭廣澤士遠文

羽峯南摩綱紀

吁嗟乎君真生體健而氣純何爲舍吾而獨逝遠焉吾曾與君同學切瑣常期日新維經維史朝露夕温于花于月乃詩乃文切々偲々爾汝相親吾公之護帝閣也君東走西奔羽翼克力撼乾轉坤或謁指紳閭危言或交諸士爵々議論戒輕躁之舉而和朝暮之間拮据執掌不遑食與眠吾則異其撰遺役于北海之濱熊狼之所怒號波濤之所掀翻相距萬里阻地隔天瞻望不見唯有夢魂相往還已既而世局一變天地否塞而日月眠

安任四中の傑作

囚中八首加註

昏干戈四起砲雨彈煙流血漂杵積屍成山君乃下獄仰天吞冤吾亦幽囚古寺參禪天定而勝人吾與君俱浴一視同仁之恩君參事於再造之藩而吾竦然滯越海之濱及藩之廢也君創收音而開華樓冀北之原百千成群桃林之野唱月耕雲克成人所不能爲以躬爲天下先百折不屈克奮克勤何其識見之卓而志操之堅也時吾出仕東西之京而守廣文之冷官與君燕雁相違不得晨夕接歡也頃君移居都門時同杯罍醉奮談新夜或達晨乃思永如此提携以送殘年奈何陰雲嫉明月秋風摧蕙蘭自今而後笑語與誰傾罇酒切瑣與誰披肺腑吁嗟君顏在自君音在耳而隔黃泉吾腸既斷吾魂既銷而吾淚不乾乃庶君所常嗜酒與魚以招君魂魂也有知尙惠然來殮

安任「囚中八首加註」の遺稿あり半生の歴史を知るに足るを以て左に掲ぐ

客歲余入獄也私挿白冊子日註見聞時賦小詩一首轉傳馬街獄時有隨身者悉見奪取余索無配性今而思之茫無上臆者及在保科侯邸兀坐無事念適及舊詩漸拈得八首即當日初入雜咏也因作加註即日註也今補以完之詞拙意陋固不足觀惟直叙無忌則私謂實諸鬼神而不差者也

時己巳十一月十六日於麻布新堀邸

廣澤安任識

其一

是我當年政事堂。豈圖一變作囚牆。乘除何數看如此。不堪斷腸還斷腸。

慶應四元明治戊辰閏四月二十日余就囚先鋒總督督署上邸為監 安置于濱松藩屯  
所少時既三日 獲與載余發銃手一小隊 挾前後護之下 紮問所獄時設紮問所于我藩  
舊邸而置獄也 十有七藩 薩州尾州肥州等 更日監護 此日為肥州人當直 待遇頗  
厚 因其者亦多 既而回顧 則造獄者四區 我藩相聽政局二區 及用人局用所局皆為所  
汚 余凄然不勝視 暗淚滴今不止 傍人未知余因何若斯之切也 及彰義隊敗屯川野者 關  
多矣 五月十五日戰敗 囚者日增 四獄不能容 乃別設監察局 擄一大獄 又於後宮設一  
室 投之拘留 不還 蓋不格戶不給 待稍 凡六區六七十人至百人餘 不絕繼也 至八月  
名荷從此 諸藩更置 專任兵部 嗚呼 以我公忠誠而一旦變至此極者 亦何數也 初  
公為京守護也 願辭以不任其職 越前公時為總裁 強勸公就職 公召群下議 議未決 橫  
山常德相曰 理窮於此 當殉義所重而已 成敗者非所問也 公從之 出奉命 時承井伊大  
老安藤閣老擅政之後 輿論紛起 要之不出尊攘二事 不得其宜也 越前侯則與一橋中  
納言公慶喜 土佐容堂 宇和島宗等諸侯議 皆欲開尊崇之道 而及外國交際之  
義 亦受我公則先到京師 執掌王事 建言略開緒 無幾中納言以後見向幼 亦到公  
專任守護 傾國不遺力 莫所為非 出至誠者 於是 啟感特溫 褒賜無虛歲 公特於內

侍如之 其隱然為天下重鎮 甲寅七月廿日 將軍薨於坂城 一橋大納言先有此  
宣勳入製統 將大政 奮習有所為 是歲十二月 天皇崩 人不能記之 天下初以安至此  
之者 皇親王即位 尚幼 沖聖 二條關白 攝政 天下始抱不安也 然以藩力協和無  
費 際 憚我者亦不 及德川右府任大納言 辭政柄 公亦辭職 右府以人心 願將生變 就  
藩將有日 而事情切迫 不可以請之矣 遂為伏水之役 右府受命 上京 而隨而事敗 以至  
今日 豈非命哉 然人之所尚者 義也 成敗者 勢也 而應勢背義 可恨 本壘宗 所謂大義  
滅親者 豈其然乎 昔者我藩祖 以馮道事論 時人蓋有深意云 夫 天朝者 名義之所存  
也 倘令右府不知之 則安視 辭祖 宗數百年 政柄 如棄 敵履 裁而外 應以 欺罔 喜 歡 同 天  
之朝 等 私 陷 以 恭 順 云 云 令人 傳 播 者 不 少 巧 詐 百 變 實 令 人 不 遑 應 接 此 乃 人 心 之 所 以  
不 厭 而 成 敗 之 所 以 分 也 朝 為 臣 僕 者 夕 則 相 共 斃 之 甚 之 則 受 其 實 如 此 者 使 藩 祖 視  
之 其 謂 之 何 哉 然 則 我 邸 之 荒 蕪 至 此 狀 者 亦 有 數 而 然 耶 余 不 堪 酸 嘆 也 矣 吁

其二

會携彩筆此翺翔 今日誰憐前度郎 觸眼官容都不異 夜來月色獨凄涼

嗚呼 置囚有數區 而余適入此者 蓋亦奇也 何者 此當日之用所局 而即余曾所視事之  
舊官署也 前則與聽政局相對 從東南則諸局相連 右隔矮牆 望我公寢室 屋軒歷々 遙





吾子有意則爲之紹介。余懇請之有九郎弟新太郎出仕長州故而處德川氏事者。日延遲。脫走兵士日赴北。姊崎師敗。四月有宇津宮日光等戰報。竟至事連勢結。自有人力不可回者。蓋亦命也矣。嗚呼。余初非不慮之。故駐此者。亦知其不能。有爲然。業既受其命。義不可辭。於是稍可吐。我心者。唯有吉之助一事而已。留駐中。屢有以兵事訊者。然其人非決者。故屢致會於人。彼亦俊傑士。余苟無所恃。安得唇舌動之哉。一日行過大村藩長岡生。余在豐生有其侶二人。問余公行。余略辨之。彼等未識。余乃共贈先鋒總督營見武治。武治時曰。有往日之奮足。以處事。將有大總督報降于吾子。宜謹待之也。余敬從之。談半武治以有急公務。退。武治云。余待之久。使人。矢。代。其。催。之。武治竟不出。此夕安置濱松藩之命。後聞。余至。武治。余初駐府下時。人或勸以潛居。余固相。余非無戒心。然徒潛居無益於事故。寧欲脫。薩人等公標名氏。時。休。之。助。曰。可。矣。有。是以。蹤。跡。公。行。竟。罹。此。禍。亦。出。不。虞。矣。嗚。呼。逢。天。下。多。故。日。曾。無。寸。益。於。世。也。豈。不。遺。憾。哉。

其五

東。奔。西。馳。十。二。年。閱。來。世。態。與。塵。緣。唯。餘。一。事。未。經。過。今。日。就。囚。應。是。天。

余自獄中私報林三郎。余。友。田。日。人。問。乃。事。殆。經。過。盡。有。不。入。獄。一。事。耳。而。今。如。此。豈。非。命。也。哉。嗚。呼。余。負。郭。窮。巷。一。寒。士。也。性。無。他。嗜。好。初。從。鄉。先。生。有。秋。介。不。曾。世。使。勉。受。

業幸因先人縱其好。以至成長。今已生四十歲。追思其所經。則自甲寅歲從兄于軍。暫出府下。米利堅人。得來。我公。明年復游府下。與伊東。結。及水戶。訪時名士。始見會澤。弘。等。戊午歲。以命遊昌平。爰是爲辭家長游之始。實十二年前也。在。同。年。歲。壬。戌。歲。游。北。地。從。精。屋。鐵。台。在。函。館。鐵。台。欲。歸。其。全。地。余。亦。在。函。館。者。八。閱。月。而。行。山。越。內。從。石。久。遠。而。聞。公。蒙。京。守。護。命。船。歸。江。戶。七。月。到。品。海。港。遂。受。命。西。上。步。探。候。封。閉。情。月。行。而。從。江。州。歸。三。島。驛。會。公。親。方。到。復。命。遂。命。上。京。駐。京。凡。七。年。出。國。地。者。皆。君。命。也。特。荷。公。寵。榮。職。係。公。務。不。拘。一。節。結。交。廣。接。事。多。故。上。謁。關。白。親。王。及。堂。上。十。餘。名。時。輔。翼。總。裁。及。列。侯。二。十。餘。名。於。東。西。英。士。則。不。知。其。數。下。及。野。老。買。兒。僧。夫。等。有。一。奇。一。長者。莫不引接。故從天下大事。至閱老細。故實莫不經過也。即報於三郎。亦此意爾。夫遭遇如此。而不能匡救盡力。以有自致。竟令辱君。至今日者。實余輩之罪也。亦何面目立天地間哉。雖曰成敗命也。抑有以人事挽回者。其當在何時耶。蓋伏水敗後。恐無其方也。獨所恨者。往時屢獻鄙見。庶幾及開眼時。大改政體。又引勝水川。西周氏。等。以獎勝之。且從。地。中。時。亦。遊。長。州。專。爲。此。論。也。公。善。之。命。屢。下。而。時。相。無。撥。當。中。其。器。者。所。謂。築。室。於。路。傍。者。終。不。果。所。用。然。亦。不。成。余。後。轉。遷。用。所。例。格。束。縛。殊。緊。下。一。字。不。得。不。循。舊。規。余。爲。之。長。嘆。每。思。程。伯。淳。於。今。法。度。中。有。可。成。者。語。服。其。長。者。不。敢。激。昂。以。要。速。成。譬。如。菓。未。熟。強。撈。執。之。亦。不。中。食。也。百。餘。年。間。夙。病。痼。疾。在。因。學。術。一。且。欲。洗。去。之。苟。

非有其人中其任則難亦難矣蓋所貴於國者活機也至天地運行日月照臨山川流峙人物生活莫不皆然故能導之者當置人於鼓舞振作之中令之不能知其所以由矣是豈他人贊可之所能及哉

其六

平生設說耐艱艱好在如今自試看莫是愁心發於色被人懇切勸加餐

自古聖哲之士尙苦困圖者多矣唯以不動心為貴余初在總督營時胸間似有與常異者因謂投此故歟何其如是也自蓋自嗟居平日視下泄中有長蟲意初解所發也然為之動心者拙劣之甚也既移藩署邸時獨在鎖鑰中不為非不聊時獻奴持茶或湯來懇慰勉余因為之愴然自省嗚呼為彼等所慰如此誠不覺泣下時有此對移大名街獻本多侯時疫氣大至一獄不染者三人余亦其一也時獄醫津和野瀧殘忍無意於救人予藥則疫與瘡同器診人則身居戶外一手自掩鼻一手偵察病人皆知其無能療既而其醫適病余亦罹病後醫保戶小代之療治懸至而會余以寬待出移別室福田某八郎門時今泉某見三首等先在焉為余躬湯藥調味為餐是以疫氣日衰而仙臺藩相但木土佐時結交在阪英力首謀二人以及瀨主膳以殺長州藩世等繼至上野僧義觀院王內家以疾卒亦至善國雅者井上文雄草野御牧故共以國雅項我瀧也等亦同室於是私命

紙筆聊效雅雅時余有今朝為我替揮筆一室九人六處終始稍伸氣息者唯有此時然纒二十日爾而轉下傳馬街獄苦難尤其者以此為最蓋獄有謂名主者不其罪在命之一獄之權在其手獄中易制者則有新入者直加答為法且新設此獄故免而後責以懷財來否其予食序坐乃無非視之多寡以為其等者且曰欲無死則莫如出財殺人無咎者獄是爾然每稱之益由名主待遇至余入時與義觀土佐等共焉二人為余說名主今日之事與州督一也財亦相通宜為安任寬優惡者不亦然然余則六人共一席義觀二人共一席土佐等也蓋不能就寢名主語余曰如無宿獄獄有百姓獄稍寬其下等者三人共一席皆因財等也蓋不能就寢名主語余曰如無宿獄獄有百姓獄稍寬其下等者所入至十六人共一席獄吏不肯答蓋問一人倚榻板開雙股以容一人等至如吾子尙寬矣後有小林平角等為余投財於是得坐隅常盛水用之故不而絕無火氣入是以人多中混氣疥癬滿身機風溢衣有開窗風作群句其不苦然者余亦每朝一掃風殺與疥痂自作堆耳且病疫者不常絕死者未必就刑也仁政之大者也時余病未全癒而又患指疽重熱之中午昏殊如余坐則伏地得僅拜日晷故只覺指腹痛未知其色或昏或動其痛為疥為疽也請醫切斷則以禁刃辭許然亦甚重故腐敗日增竟為之短及移細川藩邸正月二十日也時海老名權相秋始脫苦界余時有脫得當初德名權相更作四之又數日更蒙寬宥得養病于德水院蓋共是諸友開余病院主謂之云於是如籠鶴之放冲空始移在德水院先是諸友往訪來然余前乏共警會十三夕于村健堂來宿此夕無

月而得四更天色如畫余因呼起建堂聯句作小詩白澤滋月色多(建)接聯居九月復依命移  
不定散庭柯(余主人開戶向我笑)如此其宵無酒過余時經飲數十日也  
保科侯邸十一月凡經列邸侯者三經獄中亦三落空一歲有餘月日今而思之猶令人毛起者在傳馬街獄每與土佐等相戒方一有生出入界而反顧此中狀則何侈心不可消哉何苦艱不可堪哉彼等為泉下客余獨得再生於是乎詳述以自警云

其七

酒。杯。偶。得。闔。家。同。歡。笑。何。知。是。夢。中。生。惜。曉。風。吹。枕。過。依。然。身。在。故。宮。中。

當是時國情是急安暇顧吾家哉然日月悠久不得不雜慮麻生况於天倫不可已者乎  
余生二十一失父幸有兄承家祖母過九旬母亦過六旬皆健強在堂余則離家日久  
事因公命非漫然長遊且母亦遙來余京寓躬視近狀悅駐者殆一年以祖母在鄉故歸  
然以親來視故情致愈交通贈一尺素足以為相見之想也從余一陷音信相絕於各地  
騷擾之間流說時聞其好者必浮不好者或信久之山河崩裂舉家老幼亦未知為其何  
如也余夢安得不到于家哉在大名街時始聞兄戰死于北越有友人來于嗚呼殉難  
者義也余每思一家男子三人余僅備十歲而無一死以酬君恩者且如余不能成一事  
子在此實累一家也及得其報稍覺塞責既而又思余兄勇敢有氣且數奇不得志每  
欲留以當難衝者非一旦夕之願也故其死必不醜也後問之果然時我軍有利然在母

情則果如何二子已矣及城陷日獨許幼稚者往來致使命有一某土州發帛曰官軍殘忍甚  
放礮之唯初首耳於是人皆信余一甥亦未知何處戰死初出戰後在高田扶老提幼流離  
死流說紛々自入母耳可知也  
無處置身今亦未知為何如死嗚呼悲哉而日望城中黑烟簇々砲聲轟々而已及今  
年二月余出養病始裁書贈母報之曰巷說紛紛以去歲三月某日書為臨終豈料今  
日再視此書矣可以想也乃知余不唯夢母亦夢余其幾回哉今我公幸得奉先祀則  
余等亦得闔家相見共歸夢中事者其在近耶實意外之幸也

其八

憶。曾。京。洛。傲。游。時。朝。醉。東。山。夕。鴨。涯。天。地。如。今。籠。樣。窄。人。生。其。奈。瞬。間。移。

嗚呼彼一時也此一時也一藩滅為赤土主從分散骨肉亦不能相見遂為天下笑蓋亦  
此為極度今雲霧稍開再得拜天日則頓度亦漸回自是日新者為可得而庶幾也然則  
何以雪此耻世々世々不可不雪者也蓋雖一世變遷不可測唯因天理之正盡人事之  
極者雖百世可以知也己夫天之視大地球也安暇就其中而生別人位等品哉唯以推  
功報本之義世襲世祿自為形其弊至人位等品亦為有定種人々不自喻也故至交際  
愈廣眼界愈大則人位等品之說不待不自廢々之則不待不予之自主權而使入自立  
其家產也國產亦天理也 是為初頭下手第一着眼而導之以科學 學不分科則不專不

則民智自開、民智自開、則器械自精、巧國力百倍、用器者以一人成、而置人於不惰、不  
 倦之域、政要必則爭富強五洲、亦可得也、何問獨靈瓊々之爭哉、請論其大領、人生八歲  
 入小學、必十五寄宿大學、必有之、十八大沙汰之撰、其所能而就科、學以事、專門除  
 此外、則盡入兵、月、諸科、有疾病、事故、不中、兵者、就食於其所、長於是、始分、人位、等品、  
 其入兵者、日練三年、日練中、乃免、將帥、自在此、業、好農、工、任其、所、於是、始許、娶妻、保室、余  
 子分產、亦不禁也、其事、專門者、肄試其業、以就官、必因其所學、用之、終身不代、其方、及漸  
 登庸之、則國無遺民、政無遺業、治化、蒸蒸日上、新者、可得而庶幾也、雪今日之大羞、以蒙天  
 之永眷者、在於斯哉、其在於斯哉、

余叙此書、其意實在不偏不倚、反覆讀之、觸諱者不少、公之於人、恐招殃、不如藏之於  
 名山、待鬼神加護也、嘗讀清初八家集、其書直筆不入正史、私以寫本行、余於是、有深  
 感云、十八日又識、

(八) 澤田名垂

澤田名垂は通稱新右衛門、初の通稱を友治文蕃と云ふ、自ら五架  
 を培植して五家園とも、亦木隱翁とも號す、別に和氣在躬と稱す、  
 會津藩の世臣たり、幼より學を好み和歌を嗜む、長ずるに及て同

名垂の國學

名垂の著書

塙保己一  
名垂の傑  
作に感ず

藩士和學師範安部井武氏に従て、二條家の風を學ぶ、後上京して  
 芝山大納言持豐卿の門に入り、其奧義を極む、又名簿を本居大平  
 に送りて教を乞ふ、一日藩庭に諸有司列座、題を設て一時百首を  
 詠す、漏刻尙餘ありて又十首を加ふ、時に享和二年六月、年廿六也  
 又、藩令を奉じ日新館童子訓、及新編會津風土記の編輯に與て力  
 あり、文化二年、和學師範の令を受け、學政を改め、常に近習に奉仕  
 し、藩主に侍詠す、兼て古實に精く、畫を能くして古圖を摸し、古書  
 に註せし者千餘部あり、悉く官庫に納む、累に昇班加祿の賞あり、  
 弘化二年四月、病て没す、享年七十一、其著書に爲政雜談、家屋雜考、  
 四季狩の記、宿直物語、阿里志朝氣、桃太郎傳、咲蛙詞、猿蟹傳、油揚傳、  
 阿奈遠可志、古字考、日文奧書、和歌體六種辨、五家園雜記、無名歌集  
 等あり、後江戸の人塙保己一、群書類從編輯の時に當て、何れより  
 か無名歌集を得、稀代の珍書なりと大に悦び、將に同書に編入せ



んとす、會々同藩士佐藤甚右衛門傍に在り、塙誇示するに奇書を得たるを以てす、甚右、一見、忽ち曰く、此は是れ我藩士澤田名垂の閑に乗じて戯に擬作せし者也、塙聞て大に駭き、實に然りや、嗟妙作かなど、嘆稱し、終に編入するを已めしと云ふ、

(九) 野矢常方

野矢常方とは何人ぞ、彼は詞人として一代風騷の主となり、紅塵紫埃の表に、超然卓立する逸物にして、又武人として一藩武術の師となり、國事多難の際に、凜然節義に斃れたる所の名士なり、常方通稱は與八、初め駒之丞、致仕の後涼齋と改む、蓼園、蟬癖翁は並に其號也、世々會津藩に仕ふ、幼より和歌を好み、武を嗜む、就中槍術に長し、師範志賀與三、兵衛重方に學び、寶藏院流十字槍法の印可を得たり、年廿四、重方に從て山陽西海諸國を遊歴し、武名一時に轟く、其遊歴中京師に在るの日、加茂季鷹の雅名を聞て之を訪

行常方の偉

術常方の武

風常方の國

ふ時に季鷹待遇頗る傲慢、東僻の一鄙夫を以て蔑視す、常方更に意に介せず、詠稿を出して正を乞ふ、季鷹取て沈吟數回、驚歎して曰、天下の歌人と、忽ち報然として更に敬禮を加へしと云ふ、後藩主の馬廻となる、既にして重方歿するに逢ひ、起て槍術師範となり、後定藤市藏に傳ふ、又和歌を澤田名垂に學び、遂に名垂の後を續て、和學所の師範を兼ね、藩主に侍詠す、常に定家西行の風韻を酌む、是を以て品調自ら高雅、其名聲名垂の上に出つ、性寡欲、溫雅、和歌を乞ふ者常に陸續絶えず、野夫と雖も敢て拒まず、粗箋と雖も敢て辭せず、又傍ら茶を好み、頗る其業に長じ、殊に茶杓を造る事に巧也、嘗て江戸に役し、歸期近きに及び、家人庭艸を刈り、園石を洗て之を待つ、歸るに及て簷端に立ち、獨語して曰く、庭艸の葉末に置く露を観んと、心に期せしも、之か風致を減じたる事哉と、以て其風采を視るべし、戊辰の國難に八月廿三日、曉、十字槍を提

行常方の性

韻常方の風

常方の戦死

け、桂林寺、町口、郭門を守衛し、力戦して斃る。享年六十七。著書山路、苞蓼園集あり、集は湮滅見るべからず。亂後門人小川清流、星曉、萩等數人、詠歌の記憶に存するものを集録し、蓼の落穂と題して刊行す。

第二章 寺社并古跡

(一) 石部櫻

石部櫻の由来

石部櫻の偉觀

石部櫻は、若松市を距る十數町、瀧澤村の北にあり、昔石部治部大輔か庭中の樹なりと云ふ、石部は蒲生氏の臣なりしが如くなるも古書にも今は多く田圃となれり 根の周り三丈餘、數株となりて四面に蟠れり、高さ三丈餘、枝葉の庇ふ所昔時は方二十間餘なりしも、年々其枝を折るもの多かりしを以て今は十數間餘となれり、此事寛文の風土記にも載せられたり、實に五百年餘の老樹にして、色香他木に勝り、

佳觀比なし、花時には樹下に群集し春を賞するもの甚た多し、樹下に二三の碑あり、藤原有功卿の歌、春海先生の句、曉邨翁の詠を刻す、

(二) 一箕山

一箕山の由来

若松を距る東北數町に在る一小丘なり、四方は皆平田にして、眺望甚た佳なり、丘上八幡宮を祀る、之れ寛治年中源義家、清原武衡征討の時、逆賊平定を祈り、兵卒をして人毎に一箕の土を運ばしめ、此丘陵を築き、其上に宏壯なる社殿を建造せり、之を以て一箕山と名けたり、蒲生、加藤、松平の諸侯、皆社田を付し、屢々社殿を修理せり、今日に至るも詣つるもの甚た多し、

(三) 飯盛山

飯盛山の眺望

若松を距る十町餘、瀧澤村の南にあり、一名辨天山と云ふ、山を登れば會津の平野一眸の中に集り、近くは白布を連ねたるが如き

宗像神社  
繁螺堂

鶴沼川、千五万、葦相接したる若松市を瞰視し、遠くは飯豊の白雪、御神樂、高陽等の青巒を望み、其景勝、四時共に絶佳なり、山腹に宗像神社あり、堂の左側に猪苗代湖疎水の洞道あり、右側に繁螺堂あり、六稜にして三層なり、高さ十數間餘、漸々盤て項上に登り、又漸々別道を下に還る、恰も繁螺の殻中に似たり、昔時は佛像を安置せしも、今は白虎隊士の木像を置く、

白虎隊の墳墓

繁螺堂の南に白虎隊の碑、及び墳墓あり、其近傍櫻樹松柏等繁茂し、春秋殊に風色美なり、山麓に大夫櫻あり、根の周り丈餘、高さ六間餘、寛永中堀江町某樓の妓の墓標に植ゑたるものなりと云ふ、  
此事は双櫻記、錦の仇討等に詳なり之を以て白虎隊を吊ふの壯士、風月に吟するの墨客、花に酔ふの粹人等、常に群をなせり、

(四) 柳津圓藏寺

柳津の佳景

柳津は河沼郡にある一驛にして、只見川は其西を流れ、諸山は其

虚空藏堂の由来

東を擁し、景色最佳なり、山上に寺あり、圓藏寺と云ふ、寺中に虚空藏の堂宇あり、數十間の斷崖の上に建築し、其土木の宏壯なる近縣にあらざる所のものなり、之を以て參詣の人毎に絶えず、此堂は大同二年、徳一の創立とも謂ひ、或は慈覺の創立とも謂ふ、本尊虚空藏佛は弘法大師の作なりと、此堂昔は河岸にありしを、元和三年に水害を避けて今の地に移す、曾て豊臣太閤天正八年此の地に下向せしとき、寺領を寄附す、其後保科氏封に就くに至りても、亦寺領を寄附す、此寺屢々火災水害に罹りしも、信徒多く、堂宇の美、今猶舊時に異ならず、

(五) 小平瀉

小平瀉の風致

小平瀉は、猪苗代湖の東岸にあり、數十町の間、白砂極めて清潔なり、其岸汀一面の松原にして、他木を交えず、其青松或は高く聳え、或は低く這ひ、千熊万狀皆奇形ならざるなし、而して此處より湖

天満宮

面を望めば、遠近の諸山蒼波に浮動し、實に湖上第一の佳境なり。此松林中、天満宮を鎮座す、社殿の建築甚た壯麗にして、諸國より參詣するもの毎に絶えず。

鶴ヶ城

鶴ヶ城の沿革は、卷の一に載せたり、今や荒艸亂離の中、僅に其残趾を見るのみ、因て詞人の懐古の作を左に掲出す。

第三章 城壘

過若松城址

鷗雨 杉孫七郎

城壘既荒、秋草深、園濶、老樹尙森森、當時順逆、今休閒、獨成三句、死守心。

鶴城懷古

梅嶽 佐治爲秀

山川顧望、舊藩邦、古城秋聲、落暉中原、上躑躅、三千士、天色黯澹、血痕紅、世間彈指爲股頭、欲說悲壯、泣英雄、吾亦當年守牌者、玉碎瓦全、感何窮、斷礎橫、草芊芊、山時水湧、烈士風、修文講武、日新館、陌年、猶士跡、不空、忠誠、前後、豈有二、所謂勳王、易地同、征臺使、鮮非徒勞、最推西南、戡定功、慷慨從軍、會藩士、昔日、迷頭、今、蓋忠、果看、過化、存神、妙、書日新

館正門揭過化右神篆額、戊辰、丁丑、有、始終、君、不、看、漢、祖、唐、宗、撥、亂、日、擢、用、季、布、屈、突、通、會津城懷古 信濃 丸山子堅

千里郭、百雉城、四山皆險峻、磐梯最崢嶸、昇平百年占地利、士修文武、農勉耕、庶事一朝誤、順逆、據險、欲拒天下兵、白虎青龍、顧壯士、寧進而死、豈退生、長槍大馬、又巨礮、王師堂々、簇旆、旌、乘、寒、從、來、不、可、敵、刀、折、矢、盡、死、屍、橫、榮、狗、吠、竟、何、足、怪、食、祿、致、身、是、忠、誠、孤、城、于、今、風、雲、慘、猶、覺、當、時、碧、血、腥。

過若松城

松齋 大庭 機

夕陽下、馬倚長風、風景不殊、感不窮、舉目山河、非復昔、寒烟衰草、滿城中。

與佐々彌洲東海散士吊若松城址有感

海南古狂谷隈山

砲烟跡、絕廿餘年、殘壘頽垣、更耐憐、騷客不關、往時怨、漫將文筆、賦山川。

和韻

東海散士

國亡家破廿餘年、膏劔飄零、獨自憐、宮裏無人、春艸亂、殘陽空照、舊山川。

若松城懷古

全

休道當年負賊名、吠堯榮狗、本忠誠、國亡人去、尋無跡、暮雨滿城、紅宇鳴。

和柴四郎若松懷古

五十嵐力

戊辰役後、幾經年、世上風光、更堪憐、志士當年、恨未散、黑煙猶蔽、舊山川。

會津史 卷十終

# 會津史 卷十終

明治三十年八月廿五日發行

正價金參拾五錢

著者

福島縣平民  
池内儀八  
福島縣若松甲賀町  
百八番地

發行者

福島縣平民  
池内清治郎  
福島縣若松町大字馬  
場上五ノ町廿二番地

印刷者

島保藏

印刷所

株式會社 秀英舍 第一工場  
東京市牛込區市谷加賀町  
一丁目十二番地

一手販賣

岩代若松馬場下一ノ町

河野忠三郎

全 東京市神田區表神保町

東京堂

全

八尾新助

全 日本橋區通り壹丁目

大倉孫兵衛

全 京橋區元數寄屋町三丁目

信文堂本店

全 淺草區茅町二丁目

松文堂

全 京橋區南紺屋町

小川成松堂

岩代若松一ノ町

信文堂

全

森萬作

全

齋藤八四郎

全 若松甲賀町

伊藤文華堂

全 若松大町

田中善平

全 若松七日町

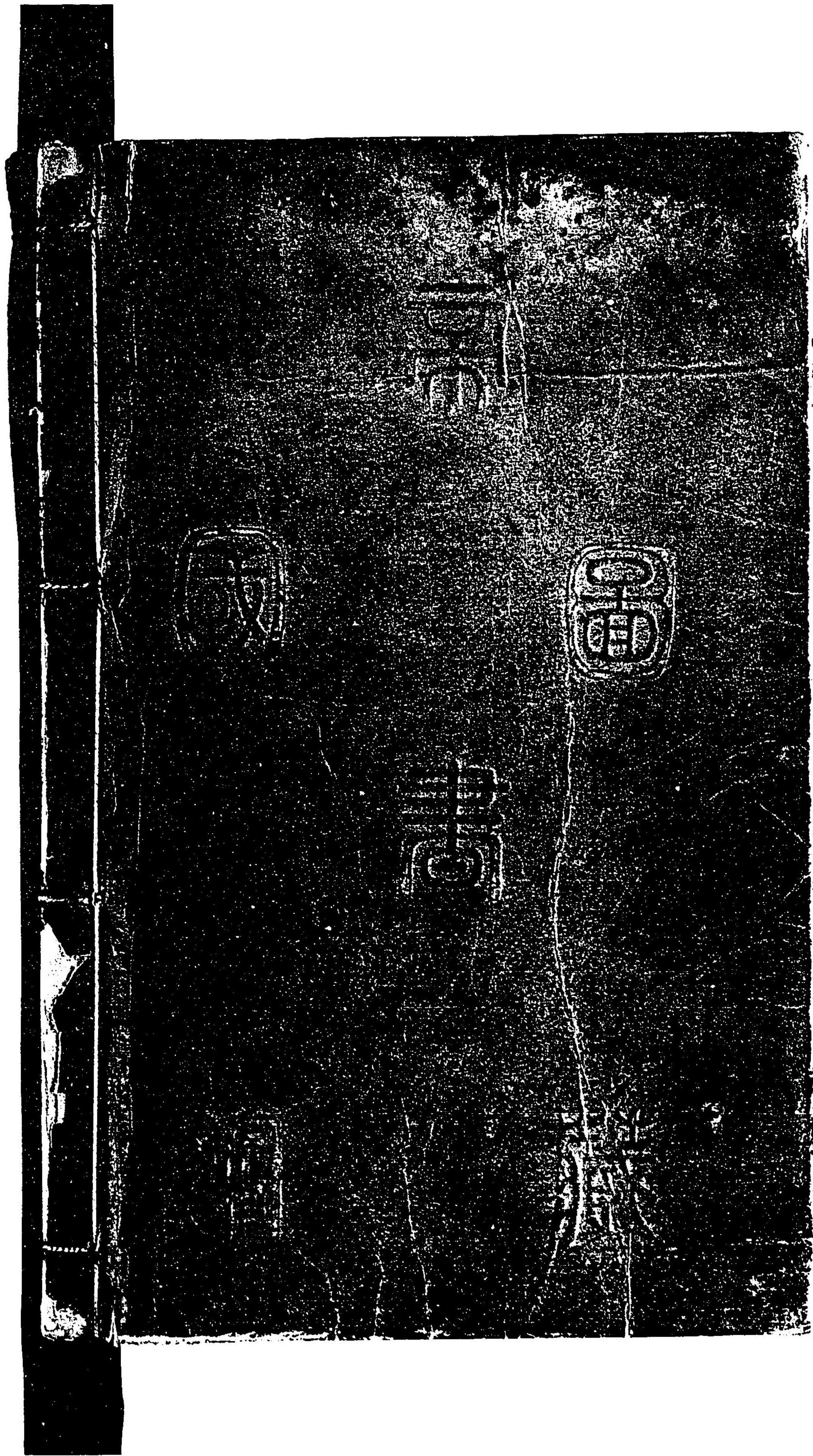
博盛館

賣捌店

特約大賣所

奧羽其他各縣各地ノ書肆

110  
5  
29





110  
A5  
29

月  
事  
史  
  
九  
十